

神並遺跡第13次発掘調査 概要報告書

—— 第二阪奈有料道路建設に伴う ——

1992・3

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会



1. 有孔円板・劍形品・勾玉



2. 勾玉・白玉一連

序

大阪府と奈良県とを結ぶ幹線道路は、一般国道163号線、同308号線、府県道大阪生駒線（通称阪奈道路）などがありますが、生駒山地の北側を迂回するルートであったり、交通渋滞が頻繁に発生するなどの問題があり、大阪都心部及び東大阪市と奈良県北部を最短距離で結ぶ新道路が切望されていました。さらに新道路は、関西国際空港、関西文化学術研究都市へのアクセス道路としての機能を果たすことなど、両府県にとって産業・経済の発展に大きな役割を担うことが期待されています。

いっぽう、東大阪市内には、私たちの祖先の足跡というべき貴重な文化遺産—遺跡が地下深く埋もれています。新道路建設予定地にも西から鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡、神並遺跡など原始時代の文化発展を考える上で重要な遺跡が所在しています。そこで、これら遺跡の保存をめぐる何度も協議が行われました。その結果、まず昭和63年度に神並遺跡の発掘調査を実施することとなりました。成果の概要をまとめたものが本書であります。

今回の調査では、古墳時代後期の祭祀関係、鍛冶関係の遺物が多数検出され、当該期の神並遺跡を考える大きな手がかりを得ることができました。その内容については本書に記すとおりであります。

最後に、現地調査及び本書作成にあたってご協力、ご指導をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表しますとともに、本書が歴史学研究のみならず、文化財保護普及の冊子として広く活用されることを切に願うものであります。

平成4年3月31日

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 森 分 最

例 言

1. 本書は、昭和63年度に実施した、第二阪奈有料道路建設工事に伴う神並遺跡第13次発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、東大阪市教育委員会の指導のもとに、財団法人東大阪市文化財協会が、財団法人大阪府道路公社の委託を受けて実施した。
3. 現地調査は、昭和63年9月1日から平成元年3月22日まで、遺物整理は、平成元年4月1日から平成4年3月31日まで実施した。
4. 調査・整理は以下の事務局体制のもとに進めた。(平成4年3月31日現在)

理事長	森分 最 (東大阪市教育委員会教育長)
常務理事	西脇 実 (財団法人東大阪市文化財協会)
事務局長	池田和幸 (東大阪市教育委員会文化財課課長)
事務局付	小寺健夫 (東大阪市教育委員会文化財課課長代理)
調査部長	原田 修 (東大阪市教育委員会文化財課主幹)
庶務部長	下村晴文 (東大阪市教育委員会文化財課主査)
調査副部長	福永信雄 (東大阪市教育委員会文化財課主任)
調査副部長	勝田邦夫 (東大阪市教育委員会文化財課<郷土博物館>主任)
庶務副部長	芋本隆裕 (東大阪市教育委員会文化財課主任)
調査部	上野節子 (財団法人東大阪市文化財協会)
庶務部	大林 亨 (財団法人東大阪市文化財協会)
庶務部	朝田直美 (財団法人東大阪市文化財協会)
調査担当	菅原章太 (東大阪市教育委員会文化財課<郷土博物館>)
調査補助	渡辺政子、八木 亮、樽本博幸、渡辺忠雄、岩佐雅彦、竹山功一、別所秀高、山本 剛、西田 豊、大内純子、坂田美也子、大西百合子、松井直美、浅山清香、牧上亜佐子、梅木千恵子、高山京子、山本祐子、石橋健一、植村雅典、一ノ瀬琴美、豊田容子、水澗俊広、八田圭司、辻本美樹、木下美佐、上田佳世、田中かをる、李 隆司、竹内紀子

5. 遺構名称の略号は以下の通りである。

S B……掘立柱建物、S D……溝、溝状遺構、S E……井戸、S K……土坑、

S P……柱穴、ピット、S X……落ちこみ状遺構

遺構番号は検出順に一連して付けている。現地の土色及び土器・土製品の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖(1987年版)』に準拠し、記号表示もそれに従った。

6. 本書の執筆は、Ⅳ-2)を株式会社第四紀地質研究所(代表 井上 巖氏)が行い、その他の項及び編集を菅原が担当した。Ⅳ-2)の報文は、元来、財団法人大阪文化財センターの委託に基づいて、株式会社第四紀地質研究所が作成したものであるが、今回、同センターの許可を得て本書に掲載することができたものである。掲載に際しご好意を賜わった同センターに原く御礼申し上げるとともに、その仲介の労をとられた同センターの関係各位に深く感謝の意を表したい。

7. 現地における遺構平面図・遺物分布図の実測・作成は航空写真測量によっており、国際航業株式会社に委託した。

また図版に収めた遺構写真は菅原が撮影し、遺物写真はスタジオ、G.F.プロに委託した。

8. 現地調査の実施にあたっては、大阪府道路公社、近畿日本鉄道株式会社(建設改良局)、第二阪奈有料道路作業所(第3工区、第4工区、第5工区、トンネル工区)、安西工業株式会社の方々にご協力いただいた。記して御礼申し上げます。

9. 現地調査及び本書作成にあたり、下記の諸兄からご指導、ご教授を賜わった。ご芳名を記させていただきます、厚く感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

片岡 肇(京都府京都文化博物館)、堀田隆長(三重大学教育学部附属中学校)、松田真一(奈良県立橿原考古学研究所)、山田 猛(三重県教育委員会)、奥 義次(三重県立松阪高等学校)、山澤義貴・駒田利治(三重県埋蔵文化財センター)、小野久隆・福岡澄男・国乗和雄(財団法人大阪文化財センター)、藤田富士夫(富山市教育委員会)、倉内郁子(千葉県立房総風土記の丘)、中切孝彦(株式会社毎日総合広告)、吉岡 哲(大阪府立清友高等学校)

10. A地区において出土した縄文時代早期の遺物については、今回の報告ではその概略を記すにとどまった。詳細については別稿で報告する予定である。

本文目次

序	1
例言	
I. 序説	1
1) 神並遺跡の位置と自然的・歴史的環境	1
2) 調査にいたる経過	4
II. 調査の経過と方法	5
1) 調査の経過	5
2) 調査方法と調査範囲・地区割	6
III. 調査の概要	9
1) A地区の調査	9
2) B地区の調査	18
3) C地区の調査	23
4) D地区の調査	43
5) E地区の調査	47
6) F地区の調査	49
7) G地区の調査	50
8) H地区の調査	51
9) I地区の調査	52
10) J地区の調査	58
11) K地区の調査	61
12) L地区の調査	63
IV. 神並遺跡・池島遺跡ほか出土白玉の化学分析	65
1) 中河内の滑石製模造品出土の遺跡	65
2) 神並遺跡・池島遺跡ほか出土白玉の化学分析(財団法人大阪文化財センター)	67
V. まとめ	79

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	現地説明会風景	4
第3図	小区内の1mメッシュ地区割	6
第4図	神並遺跡第13次発掘調査地区と地区割	7～8
第5図	A地区土層断面図	10
第6図	A地区柱穴群・土坑平面図	11
第7図	A地区井戸実測図	12
第8図	A地区・K地区遺構平面図	13～14
第9図	A地区古墳時代遺構平面図	15
第10図	A地区中世土器実測図	16
第11図	A地区古墳時代土器実測図	17
第12図	A地区・I地区製塩土器実測図	17
第13図	B地区遺構平面図、土層断面図	19～20
第14図	B地区出土土器実測図	22
第15図	C地区東西ライン断面図	23
第16図	C地区南北ライン断面図	24
第17図	C地区中世遺構平面図	24
第18図	C地区出土青磁碗実測図	25
第19図	S D 31内遺物出土状況実測図	26
第20図	C地区古墳時代遺構平面図	27～28
第21図	C地区中世土器実測図	29
第22図	C地区S D 31出土土器実測図	29
第23図	C地区古墳時代土師器実測図	30
第24図	C地区古墳時代須恵器実測図	31
第25図	C地区ミニチュア土器実測図	32
第26図	有孔円板、不整形板実測図	36
第27図	剣形品実測図	37
第28図	白玉実測図	38
第29図	勾玉・子持勾玉実測図	38
第30図	フイゴの羽口 計測位置	39
第31図	フイゴの羽口 実測図	40

第32図	ファイゴの羽口 実測図	41
第33図	D地区土層断面図	43
第34図	D地区中世遺構平面図	44
第35図	D地区古墳時代遺構平面図	45
第36図	D地区出土土器実測図	46
第37図	B・D地区出土砥石実測図	46
第38図	E地区遺構平面図	47
第39図	SE5 実測図	47
第40図	SE5 出土遺物実測図	48
第41図	F地区遺構平面図	49
第42図	G地区土層断面図	50
第43図	G地区遺構平面図	50
第44図	H地区遺構平面図	51
第45図	I地区土層断面図	52
第46図	I地区中世遺構平面図	53~54
第47図	I地区古墳時代自然河川平面図	53~54
第48図	I地区古墳時代土器実測図	56
第49図	I地区出土ファイゴ羽口実測図	57
第50図	SD51出土線	58
第51図	J地区土層断面図	58
第52図	J地区遺構平面図	59~60
第53図	K地区土層断面図	61
第54図	K地区出土土器実測図	62
第55図	L地区土層断面図	63
第56図	L地区遺構平面図	64
第57図	SE3 実測図	64
第58図	河内を中心とした玉作遺跡	65
第59図	SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	69
第60図	FeO-MgO図	69
付図1	A地区縄文時代早期遺物分布図(1)	別添
付図2	A地区縄文時代早期遺物分布図(2)	別添

表 目 次

第 1 表	C 地区出土滑石製模造品一覧表	34~35
第 2 表	鞆羽口計測表	40
第 3 表	鉄滓一覧表	42
第 4 表	化学分析表	70~72
第 5 表	X 線回折試験結果一覧表	73

図 版 目 次

図版一	神並遺跡第13次調査航空写真	
図版二	A 地区の遺構	1. 調査前の状況 2. SE1 土器出土状況
図版三	A 地区の遺構	1. 中世遺構検出状況 (南より) 2. 中世遺構掘削後状況 (南より)
図版四	A 地区の遺構	1. 古墳時代遺構検出状況 2. SP316 根回り石検出状況
図版五	A 地区の遺構	1. 第8層内 有舌尖頭器出土状況 2. 押型文土器 出土状況
図版六	A 地区の遺構	1. 縄文時代早期遺物包含層検出状況 (南より) 2. 第8層内 有舌尖頭器出土状況
図版七	B 地区の遺構	1. 自然河川検出状況 (西より) 2. 第9層内 土器出土状況
図版八	C 地区の遺構	1. 調査前の状況 2. 中世遺構検出状況 (北より)
図版九	C 地区の遺構	1. 古墳時代遺構検出状況 (北より) 2. SD31 遺物出土状況
図版十	C 地区の遺構	1. 第9層内 遺物出土状況 (西より) 2. 第9層内 遺物出土状況 (近景、南より)
図版十一	D 地区の遺構	1. 調査前の状況 2. 中世遺構検出状況 (北より)
図版十二	D 地区の遺構	1. SP35 根石出土状況 2. 古墳時代遺構検出状況 (南より)
図版十三	E 地区の遺構	1. 遺構検出状況 2. SE5 掘削後状況

図版十四	F・I地区の遺構	1. F地区 遺構検出状況(西より) 2. I地区 中世遺構検出状況(西より)
図版十五	I地区の遺構	1. 自然河川検出状況(南より) 2. 第9層内 遺物出土状況
図版十六	I地区の遺構	1. 第9層内 遺物出土状況 2. 第9層内 須恵器甕(370)出土状況
図版十七	J・L地区の遺構	1. J地区 遺構検出状況(西より) 2. L地区 SE3断面
図版十八	K地区の遺構・遺物	1. K地区 遺構検出状況(西より) 2. 出土土器
図版十九	A地区の遺物	1. 中世の土器 2. 古墳時代の土器
図版二〇	A・I地区の遺構	1. 製塩土器(外面) 2. 製塩土器(内面)
図版二一	A地区の遺物	縄文土器破片
図版二二	A地区の遺物	第7A層、第8層内出土土器
図版二三	B地区の遺物	第9層内出土瓦器椀
図版二四	B地区の遺物	第9層内出土瓦器椀
図版二五	B地区の遺物	1. 第9層内 出土土器 2. 第9層内 出土土器
図版二六	C地区の遺物	1. SD31 出土土器 2. SD31 出土土器
図版二七	C地区の遺物	1. 第9層内 出土土器 2. 第9層内 出土土器
図版二八	C地区の遺物	第9層内出土土師器壺・甕
図版二九	C地区の遺物	第9層内出土土師器壺・甕・高杯
図版三〇	C地区の遺物	第9層内出土土師器高杯
図版三一	C地区の遺物	1. 第9層内 出土滑石製模造品 2. 第9層内 出土滑石製模造品
図版三二	C・I地区の遺物	C地区SD31 出土鞆羽口 I地区第9~10層出土鞆羽口(側面)
図版三三	C地区の遺物	C地区SD31 出土鞆羽口 I地区第9~10層出土鞆羽口(正面)
図版三四	C地区の遺物(参考)	縄手遺跡出土鞆羽口
図版三五	C地区の遺物	1. 鉄滓 2. 炉壁片
図版三六	B・D地区の遺物	1. 出土土器 2. B・D地区出土砥石
図版三七	F地区の遺物	SE5出土土器
図版三八	C・E地区の遺物	1. C地区第3層内出土青磁碗 E地区SE5 出土白磁碗、青磁碗 2. E地区SE5 出土土師器皿、瓦器椀、須恵器捏鉢
図版三九	I地区の遺物	第9層内出土土師器壺・甕

- 図版四〇 I・J地区の遺物 I地区第9層内出土須恵器蓋・杯・甕、土師器高杯・鉢
J地区SD51 出土跡
- 図版四一 I地区の遺物 1. I地区第10層内出土土師器甑
2. I地区第9層内出土土師器甕
- 図版四二 C・I地区の遺物 1. C地区第9層内出土ミニチュア土器
2. I地区第9層内出土須恵器杯・甕、土師器甕

I. 序 説

1) 神並遺跡の位置と自然的・歴史的環境

神並遺跡は、東大阪市東石切町1丁目を中心に、西石切町1丁目、額田町にかけて所在する縄文時代早期から江戸時代にかけての複合遺跡である。

本遺跡は生駒山地西麓で発達する中位段丘上に立地し、標高15~45mに位置する。遺跡の範囲は、近鉄東大阪線の鉄道敷を中心とし、東西約550m、南北約300mに及ぶものと推定されている。

近鉄東大阪線建設関連の工事に伴う発掘調査や、その後の工事時に実施された地層の調査の結果⁽¹⁾によれば、

- (1) 近鉄奈良線から石切神社までの間に少なくとも5段の段丘面が認められるものの、各々の面は規模が小さく連続性も著しく悪い。
- (2) 段丘面を形成している礫層は赤色土化が進んでおり、中位段丘構成層および高位段丘構成層に相当すると考えられるが、詳細は明らかでない。
- (3) 遺跡の南辺部を西に流れる鬼虎川(新川)は、段丘面とその構成層および下位の大阪層群を深く下刻して蛇行し、不明瞭なトランペット状谷を形成している。また現在の川はこの谷底をさらに下刻して、旧谷底を段丘下させている。
- (4) 本遺跡はこの段丘の面上と段丘崖に立地する。

ことなどが明らかになった。いっぽう、生駒山地は逆断層作用で隆起したものとされ、その西斜面は急峻となっている。谷あいを通れる小河川は急流性で、土砂が急速に堆積し扇状地の発達を促す。近世に入って、この小河川の急流性を利用して、水車が生駒山地西麓部で発達したことは夙に知られるところである。従って、本遺跡周辺においても、扇状地の発達は顕著である。例えば、第2次調査において、古墳時代~中世の遺物包含層の下部、縄文時代早期の遺物包含層までの間にシルト~細・中・粗粒砂~細礫の互層堆積である間層が約1.4mも存在していることから、縄文時代早期とそれ以降とは、遺跡立地のベースが異なっていることに注意を喚起する必要があるだろう。

さて、神並遺跡周辺で人類の生活が始まるのは旧石器時代である。ナイフ形石器の出土をみた正興寺山、千手寺山、芝坊主山の遺跡が、神並遺跡と指呼の間にあることは大変興味深い。山畑遺跡では尖頭器が出土している。旧石器時代末から縄文時代草創期にかけて盛行する有舌尖頭器は、早くから草香山遺跡出土例が著名であったが、神並遺跡でも第2次調査で4点出土し、伴出する押型文土器の編年的位置付けと絡んで大きな論議を生んだ。今回の第13次調査においても2点出土した。有舌尖頭器は、このほか中石切町、六万寺町で発見されている。

縄文時代に入ると、神並遺跡は早期の近畿地方を代表する遺跡となる。第2次調査では、谷への傾斜面に少なくとも211個体分の神宮寺式押型文土器が発見されている。また第11次調査地

点では、南向きに張り出すテラス状の緩やかな斜面上に、集石土坑1基、焼土坑3基、土坑8基が検出されている。これらのことから、本遺跡は短期間のキャンプ的なものとは考えられず、定住的なあり方が想定されている。なお、近年の調査進展から、市内の押型文土器出土遺跡は漸増している。即ち、日下、西ノ辻、鬼塚、山畑の各遺跡である。前期では、縄文海進時の海喰崖が鬼虎川遺跡で発見されている。平成2年度の調査で海岸線の堆積土層から、前～中期の縄文土器とともに、さまざまな自然遺物が出土した。これらは、当時の生態系や植生を知る重要な資料である。後～晩期になると、日下、芝ヶ丘、辻子谷、鬼塚、縄手、馬場川、西の口の各遺跡が出現する。日下遺跡は、戦前から府下で数少ない貝塚として著名であったが、近年の発掘調査で、竪穴住居や環状列墓が検出された。環状列墓は土壌墓がサークル状に連なったもので、縄文時代の社会組織を考える上で貴重な成果である。墓制の上では、鬼塚遺跡で再葬墓が2基発見されており、注目される。馬場川遺跡では、多量の土偶が出土している。これらの縄文時代の遺跡は、標高15～80mに位置している。

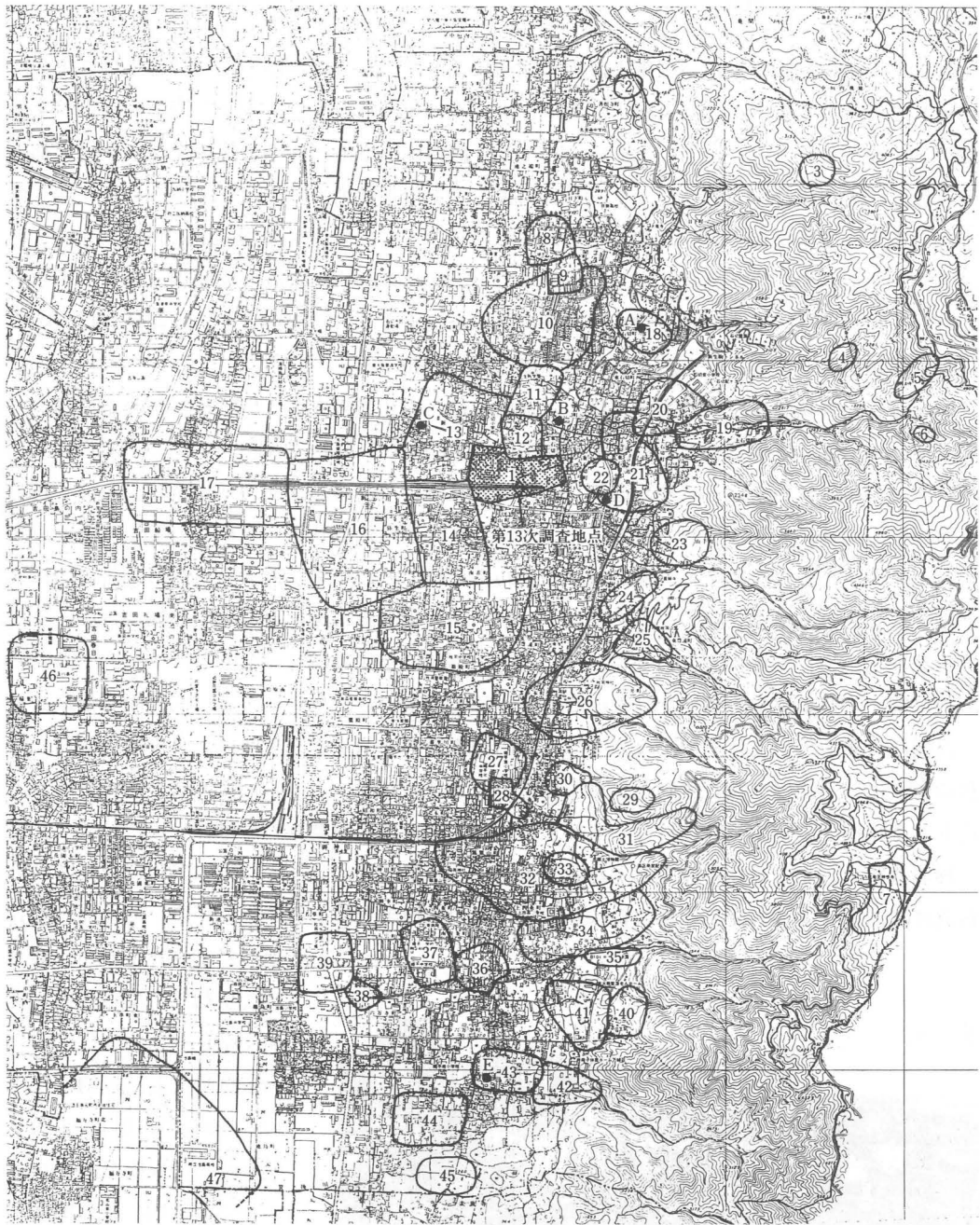
それに対して、弥生時代の遺跡は、後期の高地性集落を除いて、標高1～10mの平野部を中心に集落が営まれている。前期の遺跡は中垣内、鬼虎川、鬼塚、稲葉遺跡などがある。中期に入ると、河内平野に拠点的な大集落が出現する。本遺跡周辺にも、西に隣接する西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡がある。西ノ辻遺跡では、方形周溝墓、甕棺墓、溝、自然河川などが検出されている。とくに自然河川の堆積層からは当時の人々が廃棄した中～後期の弥生土器が多量に発見されている。後期になると、北鳥池、岩滝山、馬場川、西の口の遺跡があるが、中期の集落遺跡と比べると、規模は小さく、集落は拡散傾向になる。神並遺跡、とくにその東半部では、良好な遺物包含層や遺構は未だ検出されていない。

古墳時代では、日下、馬場、芝ヶ丘、辻子谷、神並、西ノ辻、鬼虎川、植附、鬼塚、縄手、西の口などの集落遺跡が営まれるほか、生駒山地西麓部の尾根筋に後期の群集墳が設けられる。神並遺跡では、第3次～第6次調査地点で、中期の掘立柱建物、落ちこみ(製鉄関連遺構)、導水施設、溝、土坑を検出している。植附遺跡では後期の竪穴住居が発見されている。下六万寺遺跡では、採集資料であるが、滑石製模造品が確認されている⁽²⁾。それらは、有孔円板、刀子、勾玉、管玉、白玉の種別があり、注目される。

歴史時代に入ると、神並遺跡のすぐ北方に石切劔箭神社や法通寺跡があるように、古代から中世、近世にいたるまで連綿と集落が営まれている。また生駒山地西麓の山頂付近には、興法寺や神感寺などの山岳寺院が築かれ、中世には城砦化するようである。このように神並遺跡を中心として西麓部のみに限ってみても各時代、時期の遺跡が点在し、歴史の宝庫となっている。

注(1) 那須孝悌・樽野博幸「東大阪市神並遺跡周辺の地層」(東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会『神並遺跡II』、1987年)

(2) 藤井直正・都出比呂志ほか「下六万寺遺跡」(『原始・古代の枚岡、第1部各説』、1966年)



- | | | | | |
|------------|------------|------------|--------------|-------------|
| 1. 神並遺跡 | 2. 善根寺山遺跡 | 3. 草香山遺跡 | 4. 宮山遺跡 | 5. 興法寺跡 |
| 6. 三味尾山遺跡 | 7. 神感通寺跡 | 8. 日下遺跡 | 9. 馬場遺跡・石凝寺跡 | 10. 芝ヶ丘遺跡 |
| 11. 辻子谷川遺跡 | 12. 法水寺遺跡 | 13. 植付遺跡 | 14. 西ノ辻遺跡 | 15. 鬼塚遺跡 |
| 16. 辻虎並古墳群 | 17. 水正寺遺跡 | 18. 芝坊主山遺跡 | 19. 辻子谷古墳群 | 20. 千手寺山遺跡 |
| 21. 神並古墳群 | 22. 正興寺遺跡 | 23. 額田山古墳群 | 24. みかん山古墳群 | 25. 豊浦谷古墳群 |
| 26. 出電井山遺跡 | 27. 皿池古墳群 | 28. 河内遺跡 | 29. 五条山古墳群 | 30. 水走氏館跡 |
| 31. 客坊山寺遺跡 | 32. 山畑古墳群 | 33. 山畑遺跡 | 34. 花草山古墳群 | 35. 五里山古墳群 |
| 36. 上六万山遺跡 | 37. 縄手寺古墳群 | 38. 下六万寺遺跡 | 39. 北鳥池遺跡 | 40. 往生の院金堂跡 |
| 41. 岩滝山遺跡 | 42. 浄土寺古墳群 | 43. 半堂遺跡 | 44. 馬場川遺跡 | 45. 西の口遺跡 |
| 46. 稲葉山遺跡 | 47. 池島古墳 | | | |
- A. 芝山古墳
 B. 大藪古墳
 C. 塚山古墳
 D. 夫婦塚古墳
 E. 大賀世古墳

第1図 遺跡位置図 (S=1/40,000)

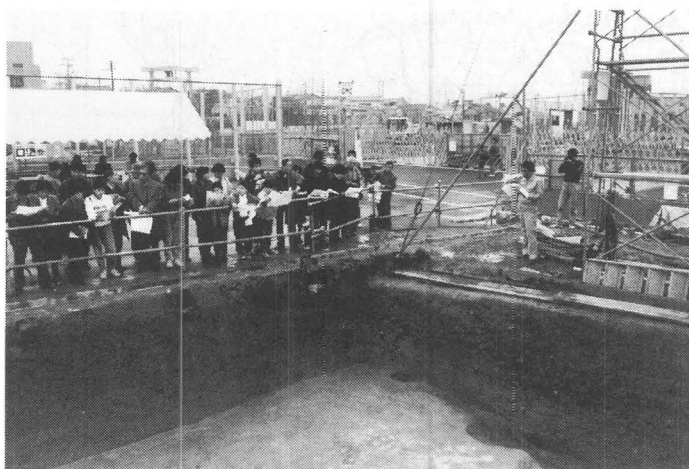
2) 調査にいたる経過

近鉄東大阪線や阪神高速15号東大阪線の開通によって、東大阪市内の開発は近年目ざましく進展している。大阪府下で、大阪市、堺市に次ぐ人口規模を有し、これからの東大阪市の発展が大きく期待されるようになっていく。また、関西国際空港の開港、関西文化学術研究都市の建設など大規模な国家プロジェクトが目白押しである近畿地方において、本市の担うべき役割は今後ますます増大するであろうと思われる。そのような気運が高まる中、両プロジェクトのアクセス道路の整備が急務となった。そこで、一般国道170号(大阪外環状線、東大阪市西石切町)を起点とし、県道奈良生駒線(阪奈道路、奈良市宝来町)を終点とする総延長13.4kmの自動車専用道路が計画された。これが第二阪奈有料道路である。

いっぽう、外環状線以東の道路建設予定地内には、周知の鬼虎川、西ノ辻、神並の遺跡が所在していた。先に実施された近鉄東大阪線や国道308号線の建設・拡幅工事に伴う発掘調査で縄文時代から中世にいたる各時期の遺構、遺物が発見されたため、今回の新道路建設に伴う調査においても同様の成果が予想された。そこで、これら遺跡の取り扱いをめぐって、大阪府道路公社と東大阪市教育委員会との間に協議が重ねられた。その結果、東大阪市教育委員会の指導のもとに、大阪府道路公社の委託を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査ならびに遺物整理を担当、実施することとなった。まず、昭和63年4月18日付をもって上記の三者間で調査に関する基本協定が締結された。この基本協定に基づき、単年度ごとに、大阪府道路公社と財団法人東大阪市文化財協会との間で年間の調査箇所を明示した年度協定書を締結した。昭和63年度については、調査体制と工事工程とを付き合わせて、工事の最優先となる作業坑(山岳トンネル掘削工事に用いる斜坑)ヤード部を含む神並遺跡地区が調査の対象となった。

神並遺跡は、先の近鉄新線などの建設工事に伴う試掘調査によって、昭和56年に発見された新遺跡である。遺跡の発見以来この10年間に15次の発掘調査が実施されている。遺構面は調査

地点により異なるが、縄文時代早期、古墳時代中～後期、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代と巨視的には4つの時期に分けられるようである。大規模な調査が多いため、時期ごとの集落の移動が押さえられ、考古学研究に重要な成果を上げているところとなっている。



第2図 現地説明会風景

II. 調査の経過と方法

1) 調査の経過

〈A地区〉 9月10日、調査開始。10月17日、中世期遺構検出。遺構内の掘り下げを行う。10月28日、中世期遺構の写真測量実施。11月21日、下層の堆積状況を観察するため、サブトレンチを設定、掘り下げ。12月17日、古墳時代の方形ピットが第5層上面で検出される。遺構面精査を行う。平成元年1月18日、古墳時代遺構面の調査が終わる。縄文時代早期包含層の広がりを確認するため14ラインを中心に調査。1月31日、14ライン付近に包含層は遺存しないことを確認。順次、東側へ移る。2月8日、18ライン東側で包含層発見。2月14日、遺物取り上げのため1mグリッドを設定。3月3日、トータル・ステーションによる遺物の出土位置の記録作業開始。包含層は5cm毎に掘り下げ。3月22日、縄文時代包含層の調査終了。A地区の調査を終了する。

〈B地区〉 10月19日、機械掘削開始、順次土層の掘り下げを行う。11月25日、第9層の掘り下げ開始。12月8日、自然河川の写真測量実施。12月9日、調査終了。

〈C地区〉 9月8日、機械掘削開始。9月14日、第3層内より中国製青磁碗(劃花文)が出土。9月28日、中世期遺構面の調査、遺構検出開始。11月1日、第9層の中位面調査中、完形品を含む6世紀代の土器12点が一括出土。併せて有孔円板10点も出土。そのため第9層の土壌を採取開始。11月5日、白玉多数出土。11月10日、SD31の2層内より韃の羽口、鉄滓出土。11月16日、9ラインに設定した土層観察用の畦を撤去していたところ、第7層より子持勾玉出土。11月22日、古墳時代遺構の写真測量。11月24日、調査終了。

〈D地区〉 9月7日、機械掘削開始。10月17日、中世期遺構検出。11月9日、古墳時代遺構検出。11月22日、古墳時代遺構の写真測量。11月25日、調査終了。

〈E地区〉 平成元年1月18日、機械掘削。1月31日、SE5より中国製青磁碗・白磁碗出土。2月6日、SE5の掘削終了し、アースアンカーで測量。同日、調査終了。

〈F地区〉 1月18日、機械掘削。2月2日、遺構検出。2月8日、調査終了。

〈G・H地区〉 12月1日、機械掘削(G地区より)。12月5日、調査終了。

〈I地区〉 12月3日、機械掘削。12月17日、中世期遺構検出。平成元年1月14日、第9層～第9L層内より遺物多数出土。1月31日、自然河川を確認。2月6日、調査終了。

〈J地区〉 12月10日、機械掘削、西側で現代の池を確認。2月4日、検出した遺構の写真測量。測量後、下層確認し、調査終了。

〈K地区〉 11月30日、機械掘削。2月4日、検出遺構の写真測量。2月6日、調査終了。

〈L地区〉 11月25日、機械掘削。11月28日、SE3他検出。12月2日、調査終了。

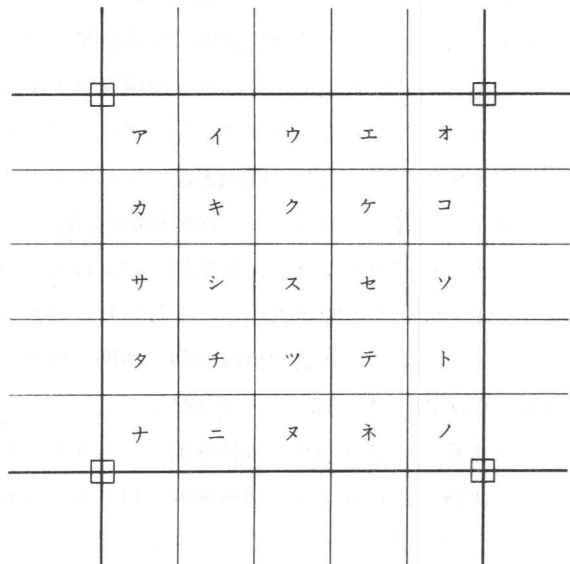
2) 調査方法と調査範囲・地区割

今回の調査では、道路建設予定地内ではなく、その南北に隣接する工事用道路部、ガイドウォール部、仮設備ヤード部、作業坑ヤード部など、埋蔵文化財に支障をきたす建設工事箇所と、以前の調査の掘りのこし部分を調査の範囲とした。東西に細長く伸びるトレンチを数本設定した格好になる。掘りのこし部分については、極力幅を広げ、遺構の確認につとめた。また、それぞれの調査地点は現在の地権者が一筆ごとに異なっているところから、調査は土地の借上げが完了した地点から着手した。そこで調査地点には便宜的にA～Lまでの地区名称を付けている。本書の記述もこの地区ごとに行っている。

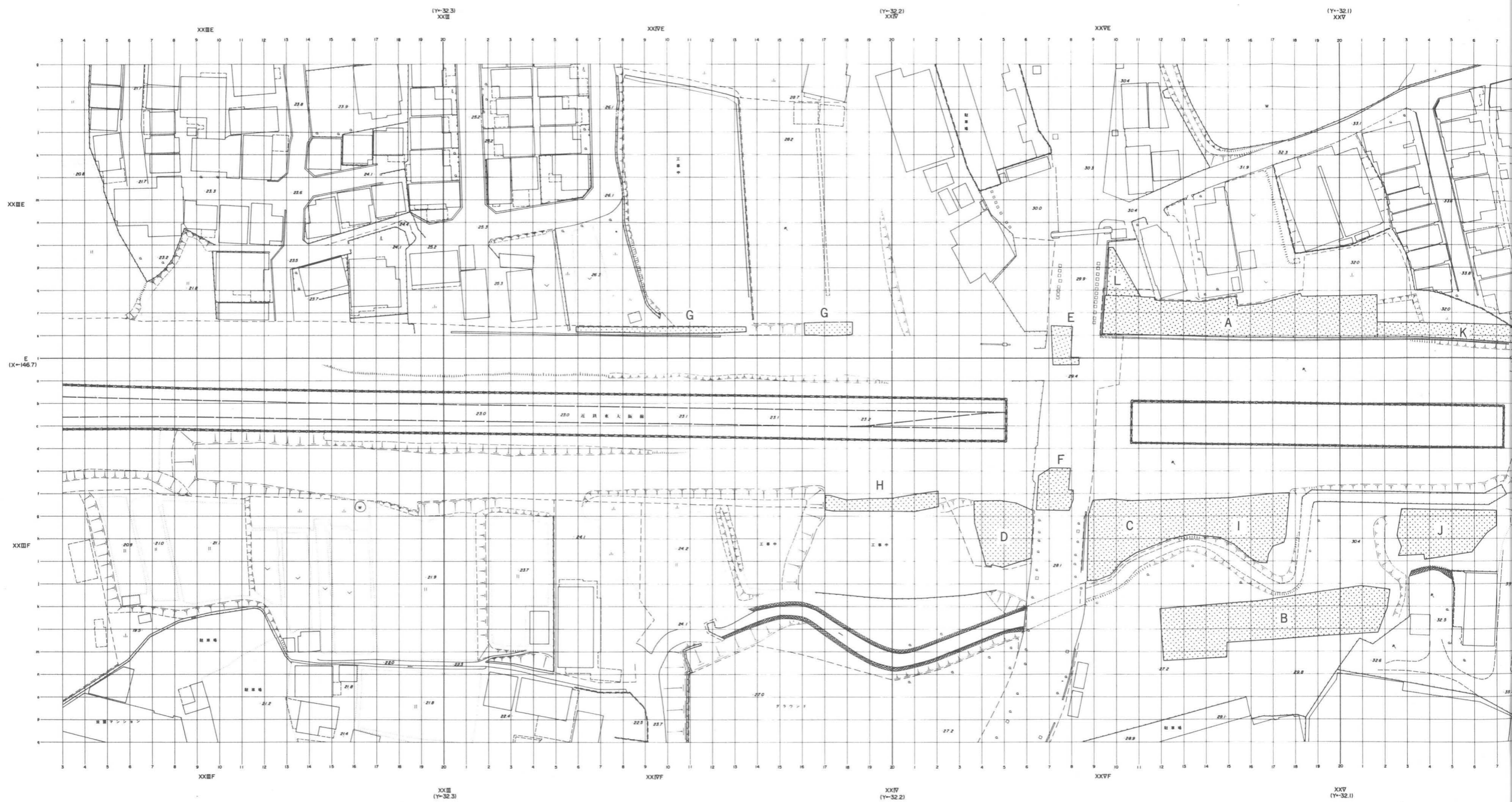
調査方法としては、まず重機で現代の盛土層を除去し、耕土層以下を人力で掘削し、遺構面の精査を行った。遺構の平面実測図作成については、一部を手書きで行ったほか、国際航業株式会社に委託して航空写真測量を実施した。

図面作成や遺物の取り上げの指標となる地区割については、第1～2次調査で採用された国家座標による記号表示を援用した。即ち、建設省告示（昭和43年）による第Ⅶ座標系を利用した。これは原点（0点）を東大阪市川中（ $X = -146.2$ 、 $Y = -34.6$ ）に設定したもので、100m区画を大区画とし、Y軸が西から東に行くに従い、I（ $Y = -34.5$ ）、II（ $Y = -34.4$ ）、III（ $Y = -34.3$ ）、……とし、X軸が北から南に行くに従い、A（ $X = -146.3$ ）、B（ $X = -146.4$ ）、C（ $X = -146.5$ ）、……とした。その南東の交点を地区割名とし、ローマ数字とアルファベット大文字の組合せを用いた。小区画は100mの大区画を5mメッシュで各々20に区分したもので、東西方向を1、2、3、…の数字、南北方向をa、b、c、…のアルファベット小文字で表わした。従って小区画はIA1aのように標記される。なお、遺物の出土状況で下図のように適宜1mメッシュの細区画を併せて用いた。今回の調査地点は大区画でいえば、XXIV E、XXIV F、XXV E、XXV F、XXVI E、XXVI Fの6区画になる。各地区の調査面積は下記のとおりである。

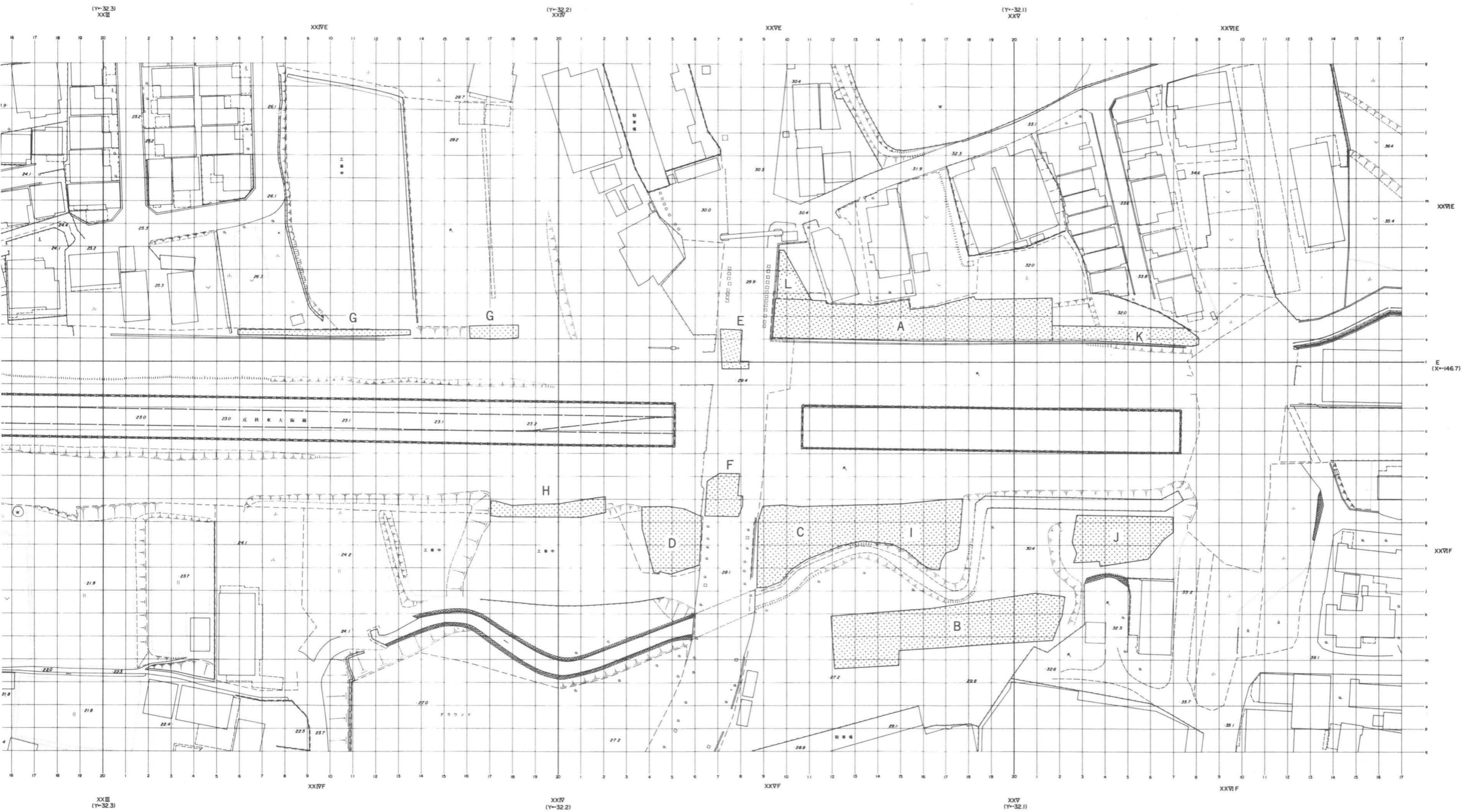
A地区	496m ²	B地区	516m ²
C地区	250m ²	D地区	156m ²
E地区	48m ²	F地区	48m ²
G地区	31m ²	H地区	26m ²
I地区	253m ²	J地区	340m ²
K地区	61m ²	L地区	52m ²
計	2277m ²		



第3図 小区画内の1mメッシュ地区割



第4図 神並遺跡第13次発掘調査地区と地区割 (S=1/1000) ※1目盛=5m

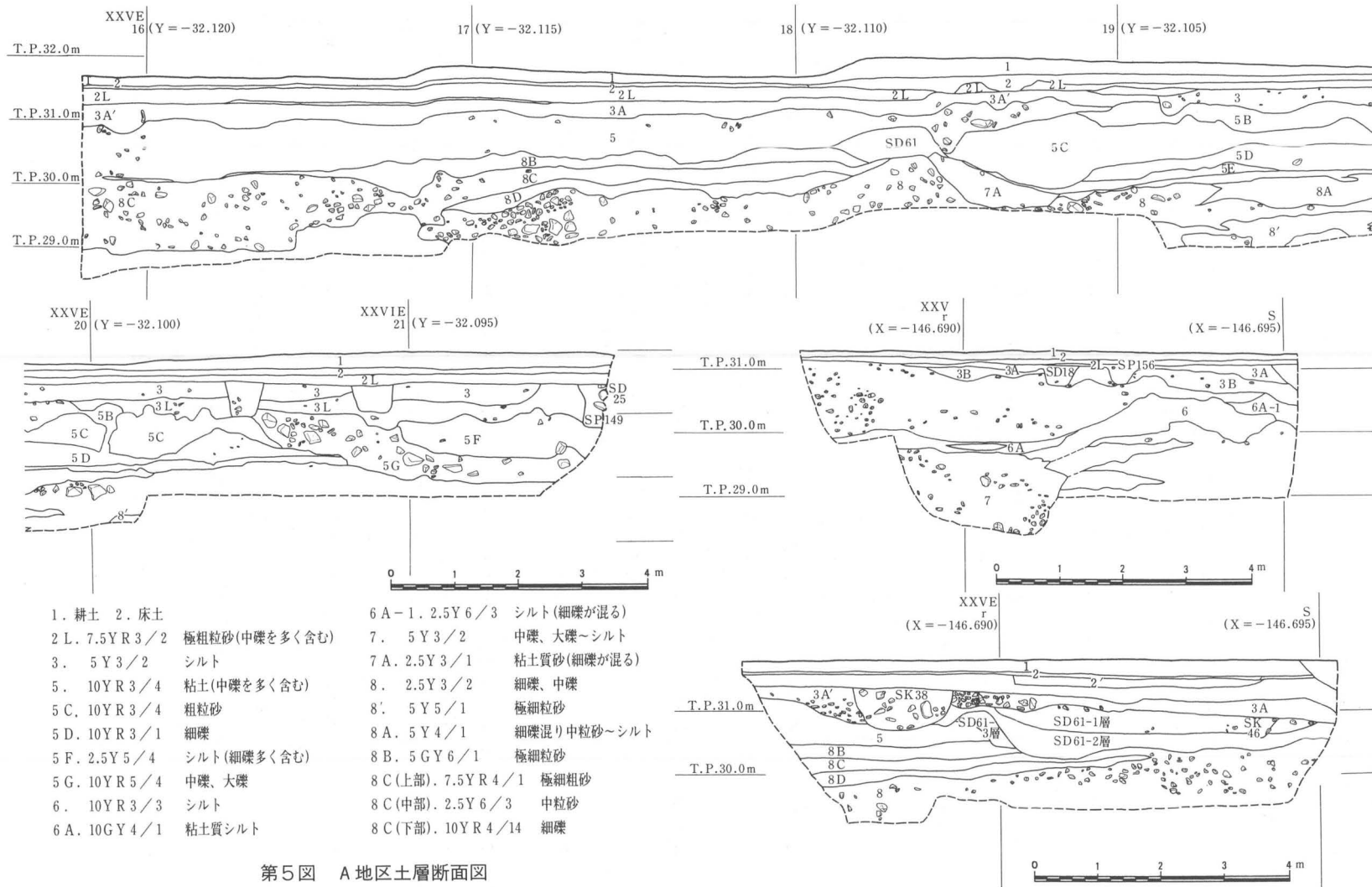


III. 調査の概要

1) A地区の調査

A地区は、調査以前の段階では、東から西へ連なる段々状の水田であった。とくにXXV E 12～13ラインの西側に現代の水田耕作に伴う大きな崖が築かれており、同ライン西側はその折に大きく削平されていた。また同ライン以東部でも、土層は、各旧水田面によって堆積状況が異なっている。ここでは、先の12～13ライン以東部で観察された北側断面での層位を中心として基本層位を記していくことにしたい。

- 第1層 耕土。第2層 床土。第2層下部には黒褐色極粗粒砂が広がっており、これを第2 L層とした。中世期の遺物を含む。
- 第3層 オリーブ黒色シルト。層厚10～40cm。古墳～平安時代の遺物包含層で、この層及びこれを基盤層として堆積した第3 A層（灰色粘質シルト）の上面は中世期の遺構面となっている。第3 B層は黄色シルトに灰色粘質シルトが混じる層で、古墳～奈良時代の遺物を含む。12 r～14 r区のみで検出。
- 第4層 黒褐色シルト質粘土に同色シルトがブロック状に混入。層厚10cm。XXVI E 1 S～2 S区のみで検出。1ライン以東部では地形が北から南への緩傾斜面となっており、第4層はこの斜面に被さる層である。古墳時代の遺物包含層。
- 第5層 暗褐色粘土。中礫を多量に含む。層厚65～75cm。19ライン以西で広く分布し、古墳～奈良時代の遺構面を形成する。第5層下部には第5 A～5 G層まで7層が間層として入る。第5層とともに無遺物層である。
- 第6層 暗褐色シルト。層厚30～60cm。14ライン付近では基盤層となる第8層を覆う。無遺物層。
- 第7層 オリーブ褐色～オリーブ黒色中～大礫。層厚30cm無遺物層。
- 第7 A層 黒褐色細礫混り粘土質砂。層厚57cm。17 r～18 r、17 S～18 S区のみで検出され、第8層の凹部に堆積しているため、検出時の平面プランは溝状を呈していた（図版六参照）。縄文時代早期の遺物包含層。
- 第8層 黒褐色細～中礫。A地区の西側では明褐色に変化する。広く分布し、第7 A層の基盤となる層である。16ラインより西側では無遺物であるが、以東部では、有舌尖頭器2点をはじめとする石器、サヌカイト片が層中から少量出土し、第8層上面では縄文時代早期の押型文土器が数点出土した。層厚10～20cm。第7層下部から第8層上部には等8 A～8 D層の間層が嵌入する。
- 第8層 灰色極細粒砂。層上面は還元されて暗青灰色を呈す。A地区の基盤層。層厚15cm。無遺物層であった。



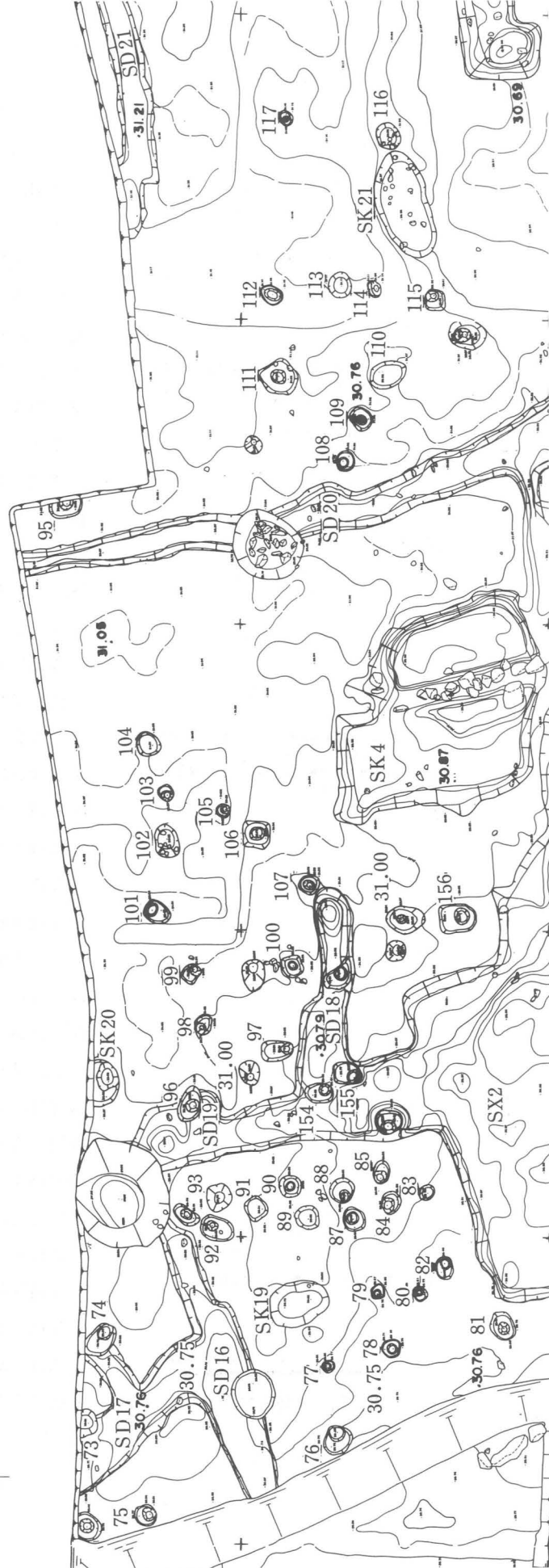
A地区の調査で確認した層位は、基本的に隣接する第1次調査や第2次調査の層位と変わるものではない。敢て相違点を列挙するならば、それらの調査で確認された中世期の包含層が見当たらないことであろう。これは、A地区が先の調査より北側の地点にあたり、水田造成時に大きく削平をうけていることによるものと思われる。このことは古墳時代の包含層がきわめて部分的にしか遺存していないことと符合している。即ち、A地区周辺の本遺跡にあっては、中世期以降の開発が著しく、削平と造成を繰り返しているものと推察されるのである。

第5層以下の土層堆積状況はきわめて不安定な状態を示している。上層の粘土～シルト層が、下層では砂礫層に変化しているのは、縄文時代早期の遺物包含層である第7A層までについていえば、縄文時代から古墳時代にかけて、A地区全体が断続的に土石流状の氾濫に見舞われたあと、ゆるやかに土砂が堆積していったことを表わしていると考えられる。なお、第8層以下の土層は、部分的にトレンチを抜いて調査した。その結果、細～中粒砂と細～中礫の互層堆積を確認した。

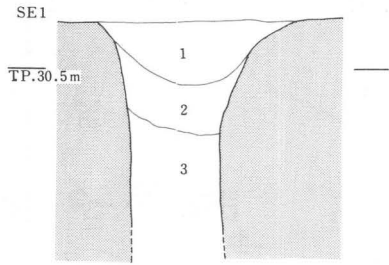
(1) 中世の遺構

柱穴群 (第6・8図)

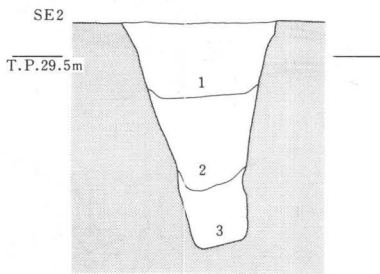
柱穴・ピットは中世期の遺構面においてA地区の広範囲にわたって検出されたが、とくにXXV E 13r～15r、13S～15S区に密集している。これを柱穴群と仮称しておく。規模は径25～45cm、深さ30cm前後を測り、形状は円形または楕円形を呈す。柱穴群の範囲には、掘立柱建物が少なくとも2棟以上存在すると考えられる。



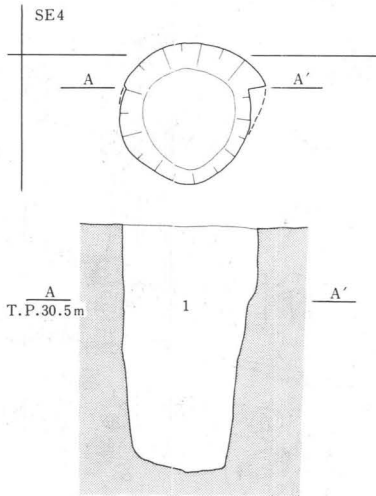
第6図 A地区柱穴群土坑平面図



1. 7.5YR4/2灰褐色細粒砂シルトに10YR3/3暗褐色細礫、N-4灰色細粒砂シルトが混入
2. 10YR3/1黒褐色シルト質粘土に2.5Y7/2灰黄色シルトが混入
3. 10YR3/1黒褐色粘質シルト



1. 7.5GY1/3暗緑灰色粘質シルト(10YR3/3暗褐色細礫、粗粒砂のブロック含む)
2. 5Y3/4暗オリーブ色シルト(10YR3/3暗褐色細礫、粗粒砂のブロック含む)
3. 5Y1/4灰色粘土



1. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土質中細礫



第7図 A地区井戸実測図

SK4 (第6・8図)

A地区中央部(XXV E15S・16S区)で検出した土坑である。規模は、長辺3.69m、短辺3.67m、深さ36cmを測る。土坑北東隅が不定形であるが、本来方形を呈していたと考えられる。土坑内の中央部に拳大から人頭大の礫を一直線上に配置している。埋土は灰色(N4/)粘土質シルト。瓦器椀(4)、土師器皿が出土したが、遺物量は僅少であった。

SX1 (第8図)

A地区北西端(XXV E10r・11r、10S・11S区)で検出した落ちこみ状遺構。一辺5.0m以上、深さ53cmの規模を有する。A地区外の西側に広がる。埋土はSK4と同じ。瓦器椀(1、2)、土師器皿(7)が出土。

SX2 (第6・8図)

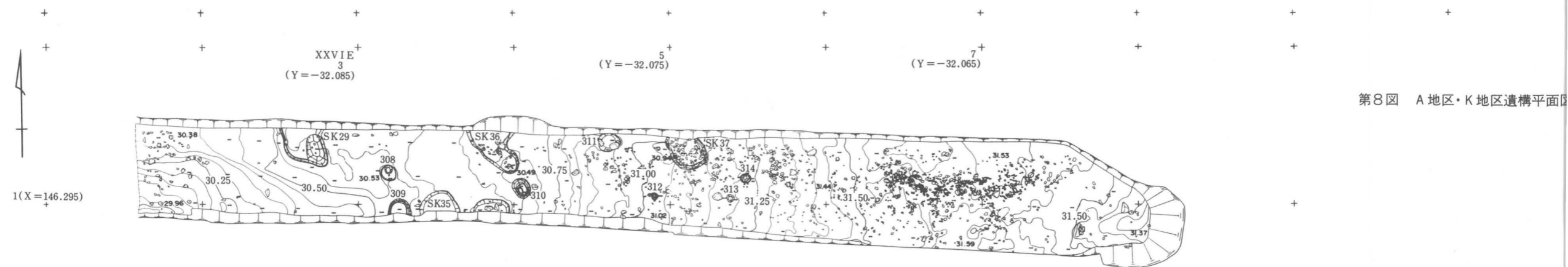
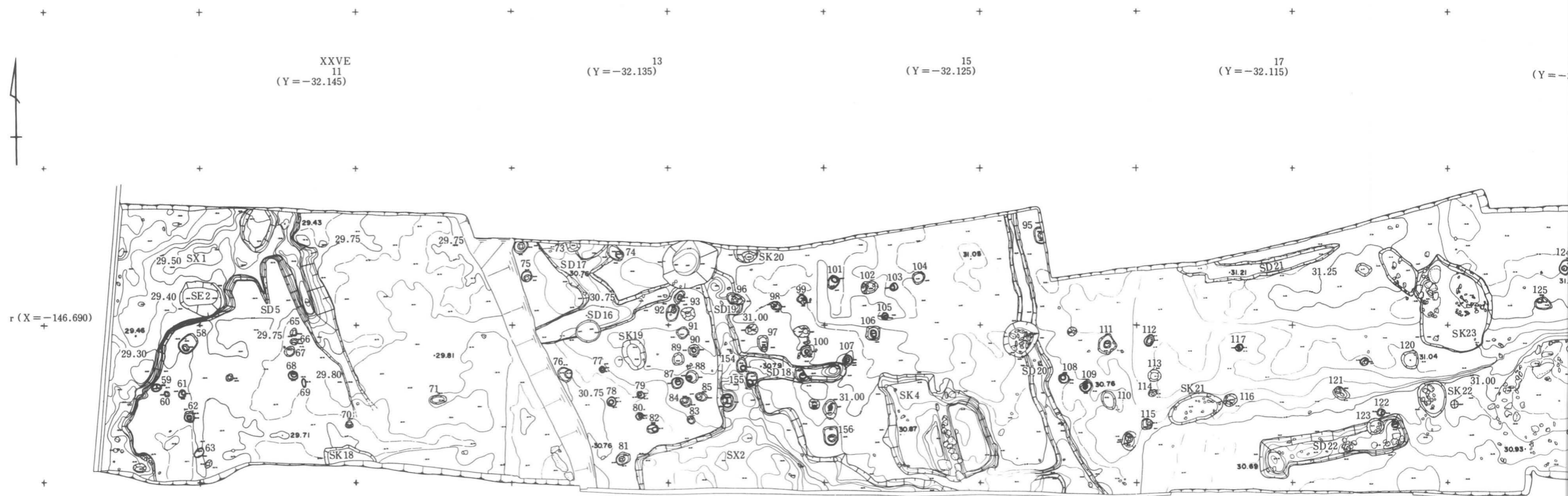
A地区中央やや西寄り(XXV E13S・14S、13t・14t区)で検出した落ちこみ状遺構。不定形で、遺構の北側でSD19と接続し、地区外の南側に続く。一辺5.6m以上、深さ39cmを測る。埋土はSK4と同じ。瓦器椀、土師器皿、須恵器捏鉢の各破片が出土したが、かなり細かく破砕されており、図示しうるものはなかった。

SE1 (第6・7・8図)

A地区西側(XXV E13r・14r区)で検出した井戸である。平面形は楕円形を呈し、井戸内部に井筒などの施設をもたない素掘りとなっている。検出面での規模は長径1.96m、短径1.56mであり、深さは4.02mまで確認したが、湧水が激しく以下の調査は断念した。埋土堆積の状況は、第7図に示すように3層に分層させた。出土遺物は、A地区の中世期の遺構中最も多く、とくに瓦器羽釜の出土が顕著であった。そのほかでは土師器羽釜(10・11)、瓦器椀・片口(8)などがあつた。

SE2 (第7・8図)

A地区西端(XXV E10r・11r区)で検出した素掘りの井戸。不整な楕円形を呈し、検出面での規模は、長径1.33m、短径1.12m、深さ1.80mを測る。内部は3層に分層できた。出土遺物には、瓦器椀(3・5)、須恵器捏



第8图 A地区·K地区遺構平面図



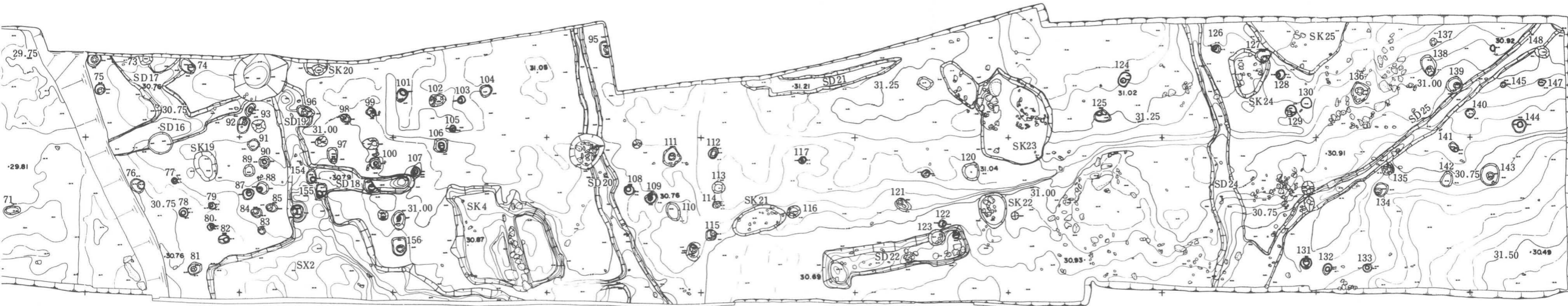
13
(Y = -32.135)

15
(Y = -32.125)

17
(Y = -32.115)

19
(Y = -32.105)

XXVIE
1
(Y = -32.095)

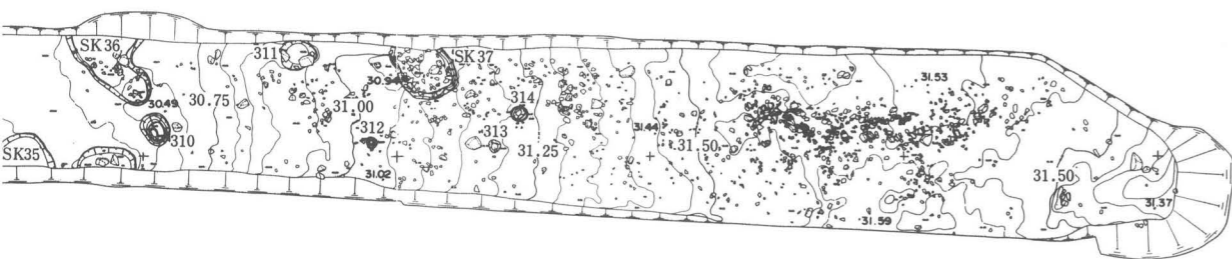


5
(Y = -32.075)

7
(Y = -32.065)



第8图 A地区·K地区遺構平面図



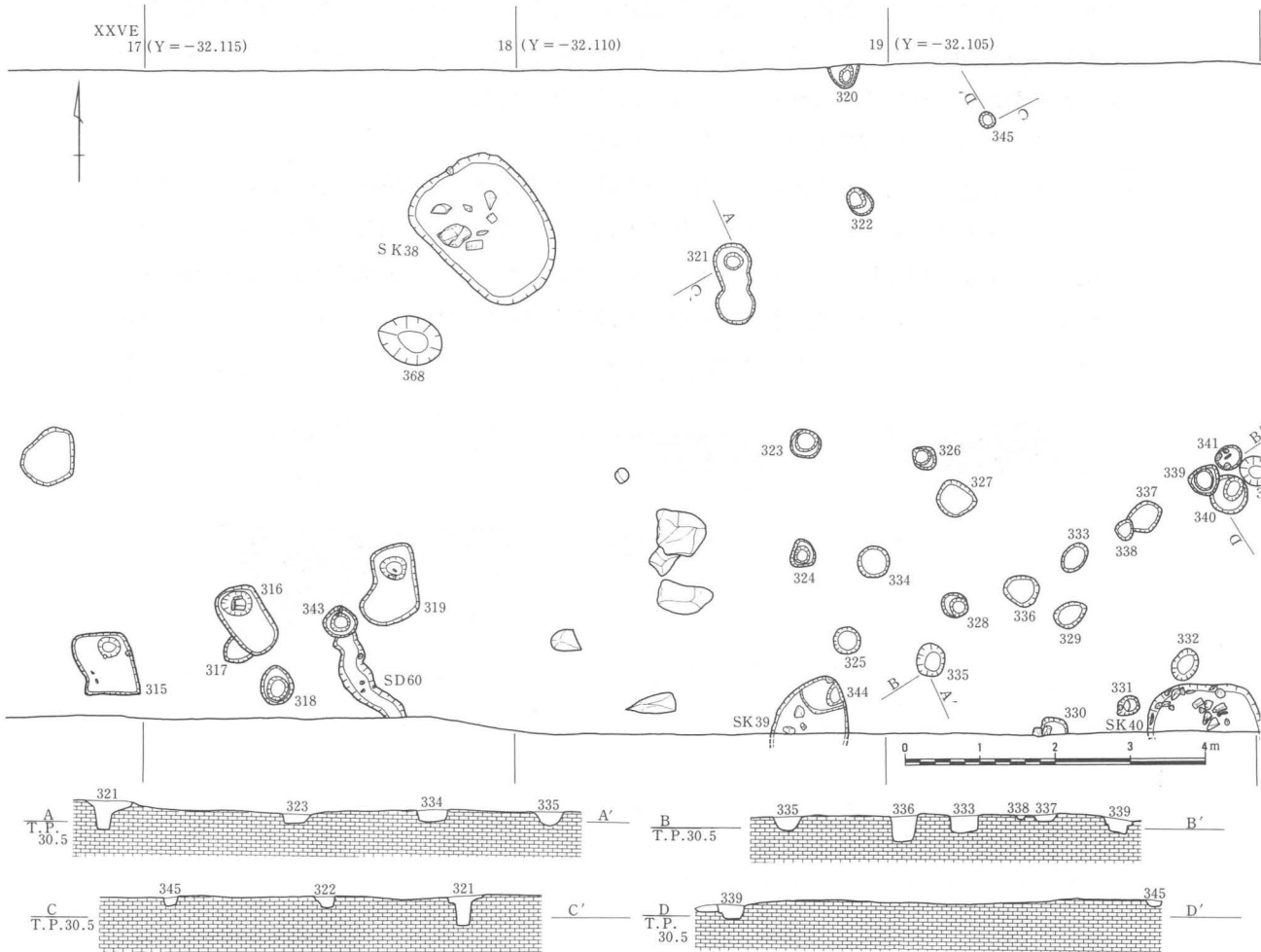
鉢(12)などがあつた。

S E 4 (第7図)

A地区中央部(XXV E 16 S区)で検出した素掘りの井戸。平面形は不整形円形。径1.15m、深さ1.92mを測る。瓦器碗、土師器皿が少量出土。

(2) 古墳時代の遺構(第9図)

XXV E 16ラインからXXVI E 2ラインの間で古墳時代の遺構を検出した。S P 345・S P 321・S P 335・S P 339を四角形の頂点とする部分に、掘立柱建物の存在を予想せしめる。S P 322とS P 333は対応し、S P 335-S P 333-S P 339のピッチは2.1mを測る。S P 335は円形を呈し、径45cm、深さ19cmを測る。S P 343・S P 316・S P 315は不整な隅丸方形を呈するピットで、柱痕跡のピッチは1.9mを測る。S P 316は長径92cm、短径62cm、深さ40cmの規模をもち、柱痕跡の底面には一辺15~20cmの礫が環状に配置されていた。これは根回り石と呼ばれるもので、柱が地中に沈まないように設けられた装置であると思われる。(図版四参照)。



第9図 A地区古墳時代遺構平面図

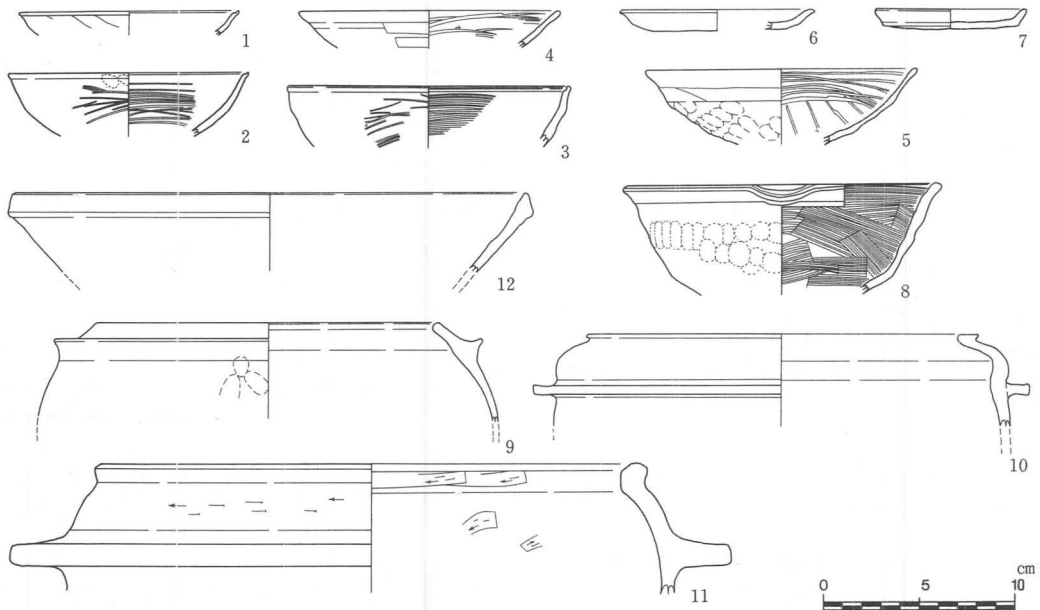
(3) 出土遺物

a) 中世の土器 (第10図、図版十九-1)

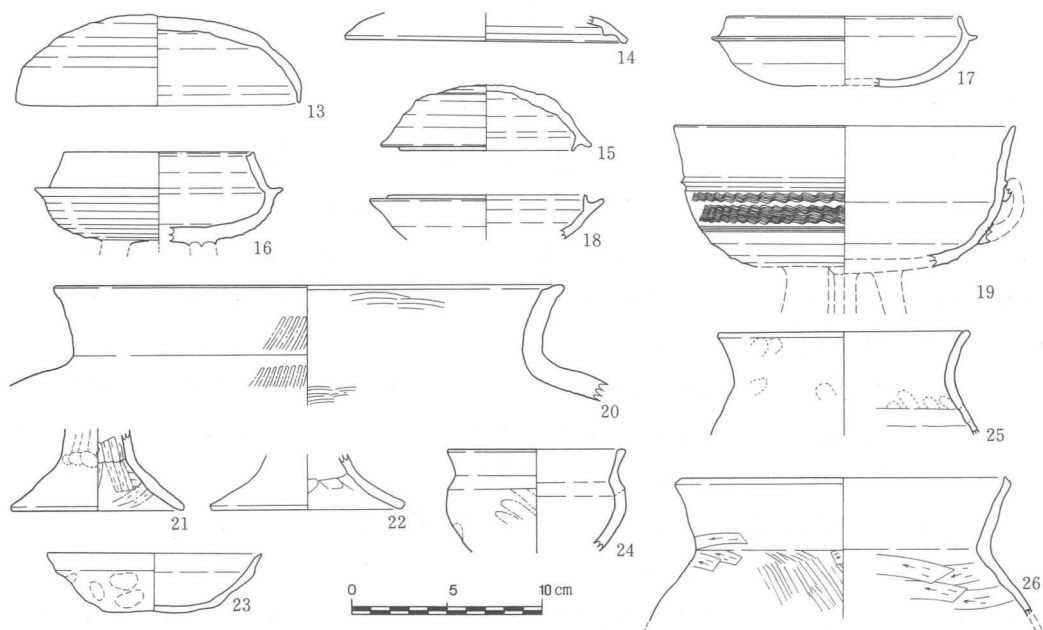
中世期の各遺構内から土器が出土したが、いずれも破片で全体の器形が窮えるものは少ない。1~5は瓦器椀である。3は深い椀形の体部から口縁部で屈曲して外彎気味に開く。口縁端部はゆるく内傾して太い沈線をもつ。器壁は厚い。神並遺跡瓦器椀分類のA1に該当すると思われる。5は和泉型の瓦器椀である。破片であるが見込みには平行線状の暗文が施されている。瓦器椀分類のB₂₋₂に該当する。8は瓦器片口鉢である。底部から屈曲後、口縁部までなだらかに続く体部をもつ。体部外面は指頭痕を残す。内面は細かなハケメ調整を施す。SE1出土。9は瓦器羽釜である。三脚付羽釜の体部片である。菅原氏の土釜分類・編年の河内J型a'に該当する。6・7は土師器皿である。6は平底から口縁部までなだらかに外上方へ開く。7は平底で口縁部との境が強い稜となって残る。6は神並遺跡土師器皿分類のb₂、7はb₅に該当。10・11・260・261は土師器の羽釜である。10・261は菅原氏の河内J型bに該当。11の口縁部は外折して玉縁状を呈す。菅原氏の河内B型に属するとともに、森島氏の土師器羽釜分類・編年のD類V~VI期に該当すると考えられる。260は図示しえなかったが、口縁端部を内側に折り返すのが特徴的で、菅原氏の大和B1型、森島氏のA類に相当すると思われる。

b) 古墳~奈良・平安時代の土器 (第11・12図)

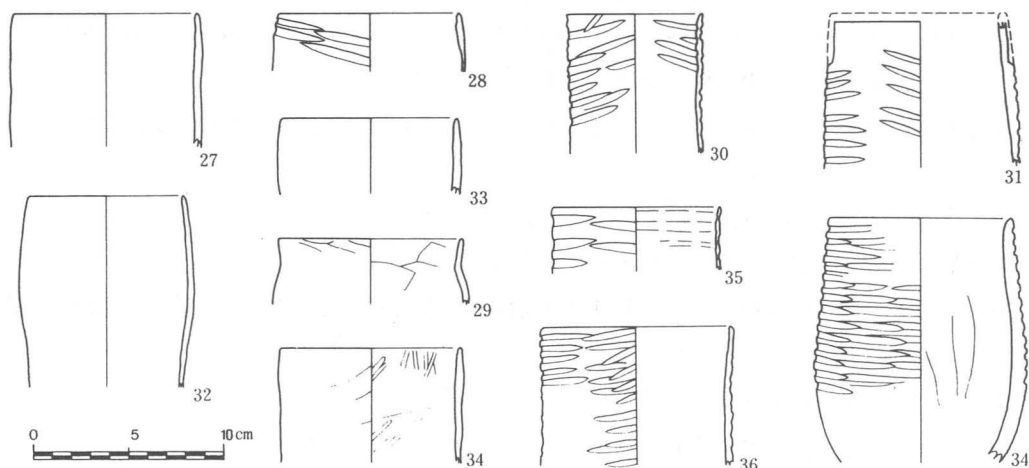
中世期の遺構や包含層から古墳~奈良・平安時代の土器が、古墳時代の柱穴群から当該期の土器がそれぞれ出土している。しかし、柱穴群出土土器は小細片で図化に耐えなかった。そこで前者の分を第11図に掲げている。SX2に接続するSD19では、遺構の性格上、古墳時代の土器を多く包含していた。須恵器高杯(16)、土師器高杯(21・22)・甕(25)がそれである。A地



第10図 A地区中世土器実測図



第11図 A地区古墳時代土器実測図



第12図 A地区・I地区製塩土器実測図

区で出土した須恵器は古墳時代中期末から終末期までの時期差が認められる。23の土師器杯は第3層から出土した。口縁部を強くヨコナデ調整し、体部以下は未調整のまま残すe手法に拠っている。薬師寺西僧房床面土器に併行する時期と考えられる。

製塩土器(第12図・図版二〇)は、29・31がSX 2、262がSD 19から、27・28・30・31が包含層から出土した。才原氏の分類では、A～Fの6タイプのうちAとDの2タイプが確認された。これは、本遺跡で今まで発見されている古墳時代製塩土器の型式の分布状況と符合する。

c) 縄文土器・石器(図版二一・二二)

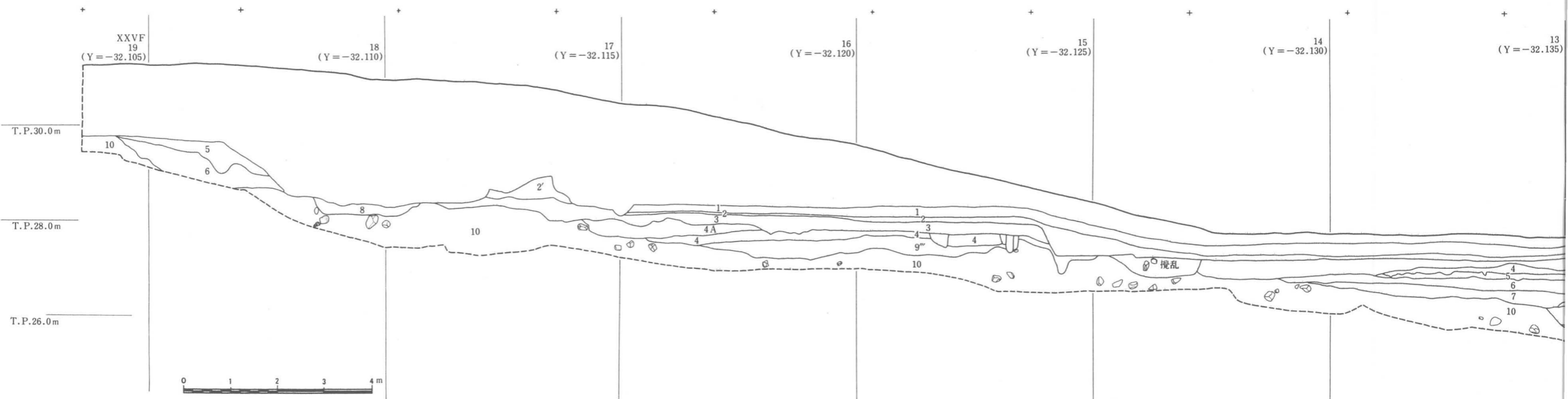
A地区第7A層中から早期の押型文土器が一括出土した。土器はネガティブ楕円文を主体とする神宮寺式のみであった。第7A層の下部にあたる第8層からは有舌尖頭器を2点確認した。A地区上層、B～D地区では中期から晩期にかけての土器が微量発見されている。

2) B地区の調査

B地区は昭和55年頃まで、地区の東側一帯に灌漑用の溜池があり、溜池の西側は段々状の2枚の水田があった。その後、溜池と水田は埋め立てられて石切劔箭神社の臨時駐車場として、利用されていた。また、従来の遺跡地図(『東大阪市埋蔵文化財包蔵地・指定文化財位置図』、東大阪市教育委員会発行、1990年10月作成(改訂版))をみると、B地区は神並遺跡の南端に位置しており、遺跡の範囲を考える上で恰好の調査となった。まず層位を記しておきたい。

- 第1層 耕土。第2層 床土。XXV F 15ラインより西側では第2層の下部に暗緑灰色シルト質細砂が約40cm堆積していた(第2 L層)。これは2段の造成が行われる以前の水田の耕土層と思われる。
- 第3層 灰黄褐色砂混りシルト。層厚50cm。層の上面は酸化して赤褐色となっていた。旧耕作土。近代の陶器片出土。
- 第4層 黄褐色細粒砂。中世期の遺物を少量含む。層厚25cm。上面は中世末期から近世の遺構面となり、足跡が検出された。
- 第5層 オリーブ灰色細粒砂。XXV F 19 l 区と13 l・14 l、13m・14m区のみで検出。層厚65cm。中世期の遺物を微量含む。
- 第6層 灰色粗粒砂混り粘土。極めて軟質の粘土で上面には踏みこんだ跡がみられた。層厚57cm。無遺物。
- 第7層 暗褐色粗粒砂混り粘土。層厚25cm。無遺物。
- 第8層 灰色砂混り粘土。層厚28cm。無遺物。
- 第9層 中世期の遺物包含層。土層の断面観察から以下の通り3層に分層できたが、遺物の取り上げは一括して行った。
- 第9上層 緑黒色砂混り粘土。層厚58cm。
- 第9中層 暗緑灰色砂混り粘土。層厚50cm。
- 第9下層 緑黒色シルト質粘土。層厚57cm。
- 第10層 黄褐色～青灰色細～巨礫。B地区の基盤層。地山。層厚90cm以上。

層位は以上であるが、B地区においては、第9層で中世期の遺物がまとまって出土した以外、出土遺物は極く微量であった。また土層の色や質から、第5層以下が自然河川の堆積層であることが判明した。XXV F 19 l 区からXXVI F 1 K区にかけて自然河川の南岸を検出した。ただし、XXVI F 1 K以东は前述の溜池造成時に破壊されていた。この自然河川はB地区の北側に現存する鬼虎川の旧河道に相当すると考えられる。B地区東側の河川南岸部の肩口に堆積した土層(第8層)から少量の中世期の遺物とともに、古墳時代後期の土器片が数点出土したことから、この河川が当該期以降機能していたと思われる。B地区の中央から東側はほとんど遺物はなく、河川の南側に集落が営まれた可能性は薄いと思われる。このことから、この自然河川が神並遺跡の南限を表わしている蓋然性は高いと考えられる。



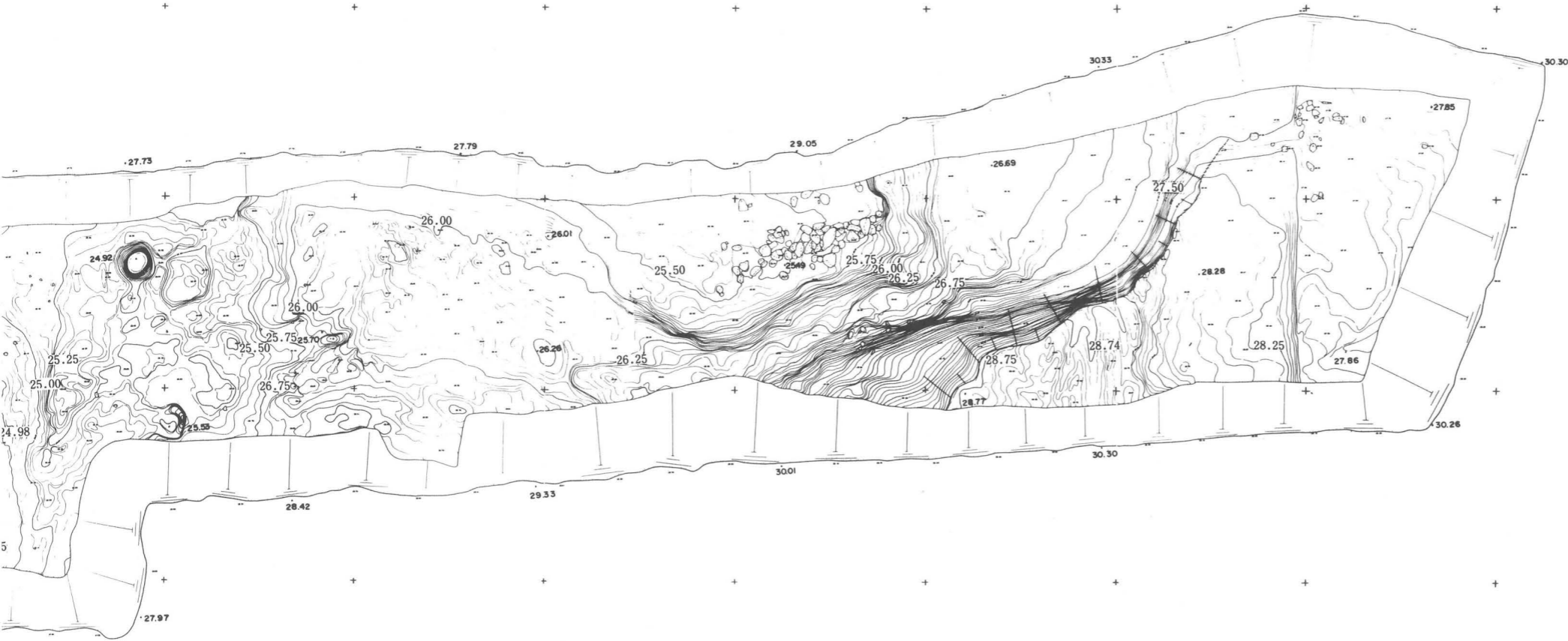
第13图 B地区遺構平面図 土層断面図

15
(Y = -32.125)

17
(Y = -32.115)

19
(Y = -32.105)

XXVIE
1
(Y = -32.095)



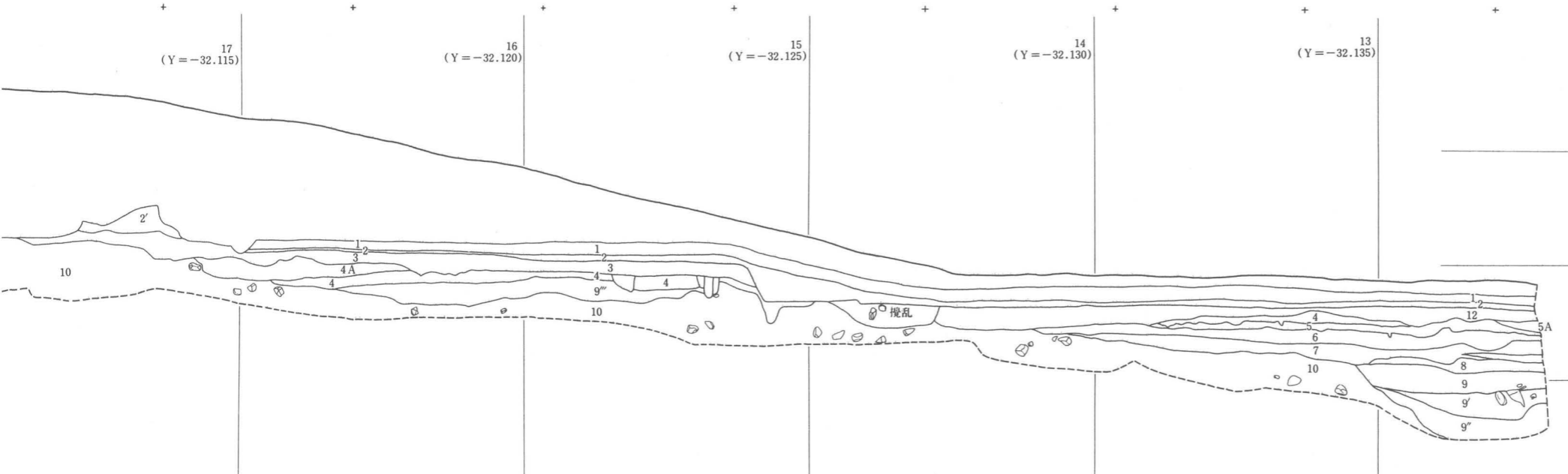
17
(Y = -32.115)

16
(Y = -32.120)

15
(Y = -32.125)

14
(Y = -32.130)

13
(Y = -32.135)



- 1. 耕土 2. 床土
- 2 L. 7.5Y 4 / 1 シルト質細粒砂
- 3. 10YR 4 / 2 砂混りシルト
- 4. 2.5Y 5 / 6 細粒砂
- 4 A. 5 Y 4 / 2 粗粒砂
- 5. 10YR 5 / 2 細粒砂
- 5 A. 7.5Y 4 / 3 シルト質細粒砂
- 6. 7.5Y 4 / 1 粘土(粗粒砂が混る)
- 7. 10YR 3 / 3 粘土(粗粒砂が混る)
- 8. 5 Y 4 / 1 砂混り粘土
- 8'. 10BG 6 / 1 粘土
- 9'. 10Y 5 / 2 細粒砂(細礫が混る)
- 9 (上部). 10GY 2 / 1 砂混粘土
- 9 (中部). N 3 砂混粘土
- 9 (下部). 10GY 2 / 1 シルト質粘土
- 10. 2.5Y 5 / 3 } 細-巨礫
- 10BG 5 / 1 }

第13図 B地区遺構平面図 土層断面図

出土遺物（第14図、P.46 第37図）

前述したように、B地区では第9層内から中世の遺物が一括出土した以外は、ほとんど遺物がないため、第14図には第9層出土土器を図示している。

土師器の皿は最も出土量が多い。口径が8cm前後の小皿と10cm以上の中皿に分れる。14cmを超える大皿は僅少であった。底部から口縁部への屈曲の度合により、2種の分類を試みた。

I. 屈曲が強く、底部と口縁部との境に突出する強い稜がつくもの。

II. 屈曲が弱く、底部から口縁部までなだらかに続くもの。

さらに、口縁端部の調整で次の2種の分類が可能である。

イ. 口縁端部をヨコナデ調整するために、端部が内彎するもの。

ロ. 口縁端部には明瞭なヨコナデがみられず、端部がそのまま外上方へ開くもの。

この組み合わせにより、図示したものを分類すると次のようになる。

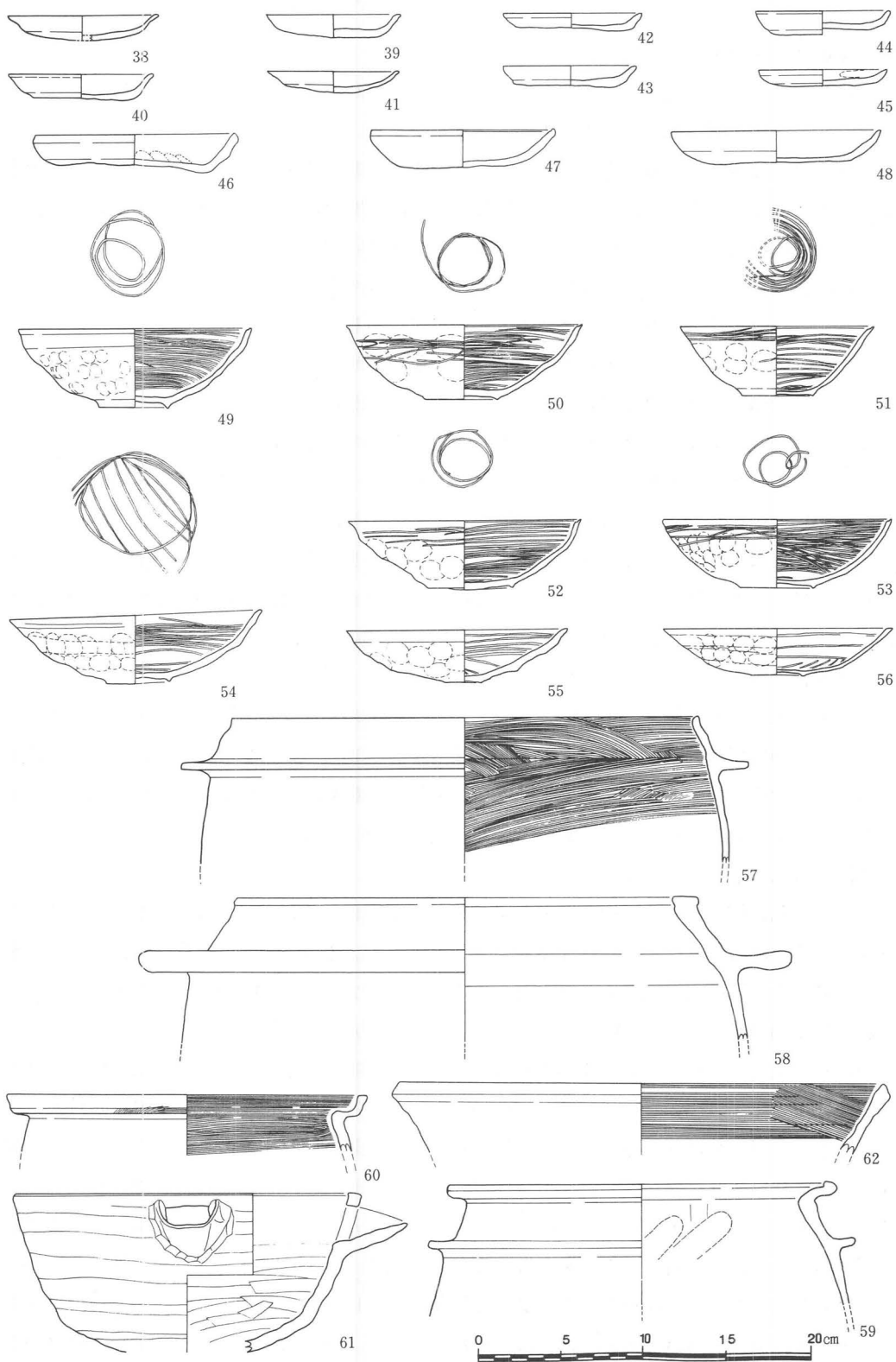
I-イ……40・42・44、I-ロ……43・46、II-イ……45・47、II-ロ……39・41・48

これらの形態を神並遺跡土師器皿分類に適合させると、Iはb5に、II-イはb2・b3に、II-ロはb4に相当すると考えられる。I・II、イ・ロとも底部は大きく、土師器皿分類のaやcに該当するものは確認されなかった。今回分類した土師器皿は大概13世紀代のものと思われるが、II-イで端部を広くヨコナデ調整するもの(45)は2段のヨコナデが施されたとみられ、13世紀の中で古い段階の位置付けが可能となろう。

57~59は土師器の羽釜である。59は鐙が狭く、菅原氏の土釜分類・編年の大和B1型のe、森島氏の土師器羽釜分類・編年でA類VI期に該当する。58は広い鐙をもち、口縁端部に平坦面をつくる。菅原氏分類の河内J型のa、森島氏分類のD類V期に該当する。57は口縁部~体部、鐙部ともに器壁を薄く仕上げている。胎土も精良で色調は灰白色を呈す。型式は不明ながら、形態的には瓦器の三脚付羽釜に似ている。

49~56は瓦器碗である。量的には大和型が和泉型を凌駕している。49は大和型で、底部から口縁部までなだらかに広がる。口縁端部で少し外彎する。体部は浅く、高台は断面が三角形を呈す。見込みには同心円文状の暗文が施される。器高が少し低め(4.6cm)であることから、神並遺跡瓦器碗分類のA₂₋₂に該当すると考えられる。一方、51も大和型に属するが、口径11.8cm、器高4.1cmと小ぶりになる。体部内面のミガキ調整は粗く16条である。高台は微隆起線状で、瓦器碗分類のA₄に該当する。54は和泉型の瓦器碗である。底部から屈曲後、凹凸面の激しい体部をもち、口縁部は外上方に伸びる。体部外面には3条の稜線状の微隆起がみられ、微隆起間には無数の指頭痕を残している。この指頭痕は成形段階で型押を行った痕跡である可能性が考えられる。高台の輪環は小さく、断面は三角形を呈する。口縁部外面には2条のミガキ調整が認められる。以上の特徴から、瓦器碗分類のB₂₋₁に該当すると思われる。

38は瓦器皿である。丸味を帯びる平底から屈曲して、口縁部に続く。口縁端部は外方を向き、丸く納める。60は瓦器鍋である。体部はわずかに内彎し、口縁部で直角に張り出し、口縁端面は平坦。内面にはハケメ調整を残す。京都大学農学部遺跡B E 33出土遺物に類例がある。



第14图 B地区出土土器实测图

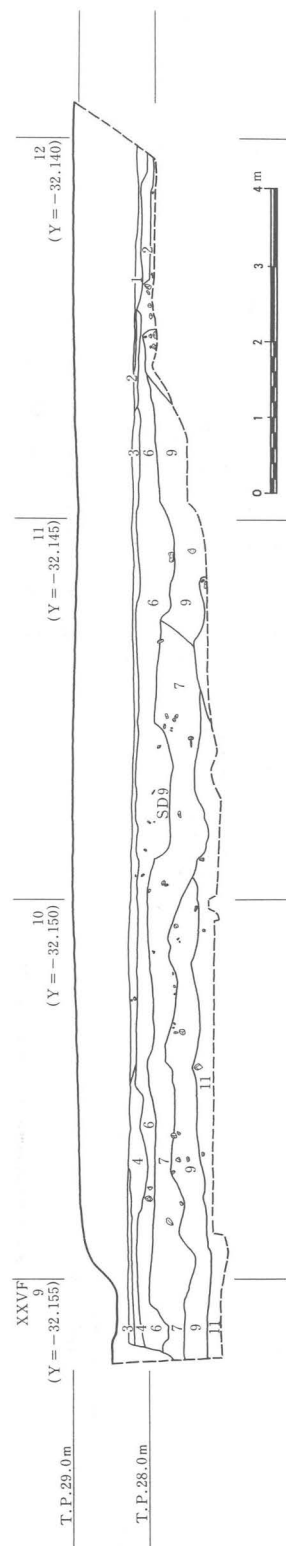
3) C地区の調査

C地区は、調査以前の状況は、鬼虎川に向かって傾斜する地形に対して、上段、下段の2枚の水田が造作されていた。従って水田造作にあたって切土と盛土を交互に行っており、土層の堆積状況は様ではない。ここでは、上段の西側を中心に層位を記しておく。

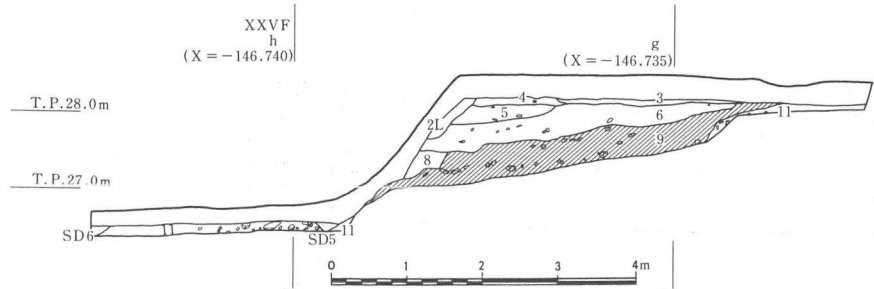
- 第1層 耕土。第2層 床土。
- 第3層 褐灰色砂質シルト。層厚22cm。中世から近世近代の遺物を少量含む。劃花文青磁碗（第18図63）が出土した。
- 第4層 緑灰色シルト質細粒砂。層厚13cm。中世から近世の遺物を少量含む。
- 第5層 褐色シルト質細粒砂。層厚12cm。中世期の遺物を中量含む。上面は近世期の遺構面となる。鋤跡で溝状を呈する遺構や、ピットを検出した。
- 第6層 暗灰黄色シルト質細粒砂。層厚15～50cm。中世期の遺物包含層。
- 第7層 暗オリーブ褐色粗粒砂混りシルト。層厚30～50cm。奈良時代から中世期の遺物を中量に含む。上面は中世期の遺構面となる。
- 第8層 明黄褐色シルトと暗オリーブ褐色細礫の互層。炭を含む。層厚45cm。上段と下段の崖面でわずかに遺在していた。
- 第9層 暗灰色砂混り粘土。層厚20～40cm。古墳時代中期末から後期にかけての遺物包含層。
- 第10層 灰オリーブ色シルトとオリーブ褐色シルト質細粒砂の混合土。層厚17～30cm。古墳時代の遺物を少量含む。
- 第11層 暗赤褐色細～中礫。C地区の基盤層、地山。古墳時代中後期の遺構面。層厚35cm以上。

さて、上述したように、C地区では、中世期から現代まで、地形的にかかなりの削平をうけていた。とくに上段と下段の各々東側では

- | | |
|------------------------|-------|
| 1. 耕土 | 2. 床土 |
| 3. 10YR4/1 砂質シルト | |
| 4. 7.5GY1/6 シルト質細粒砂 | |
| 6. 2.5Y4/2 シルト質細粒砂 | |
| 7. 2.5Y3/3 シルト(粗粒砂が混る) | |
| 9. N3 砂混り粘土 | |
| 11. 5YR3/6 細礫～中礫 | |



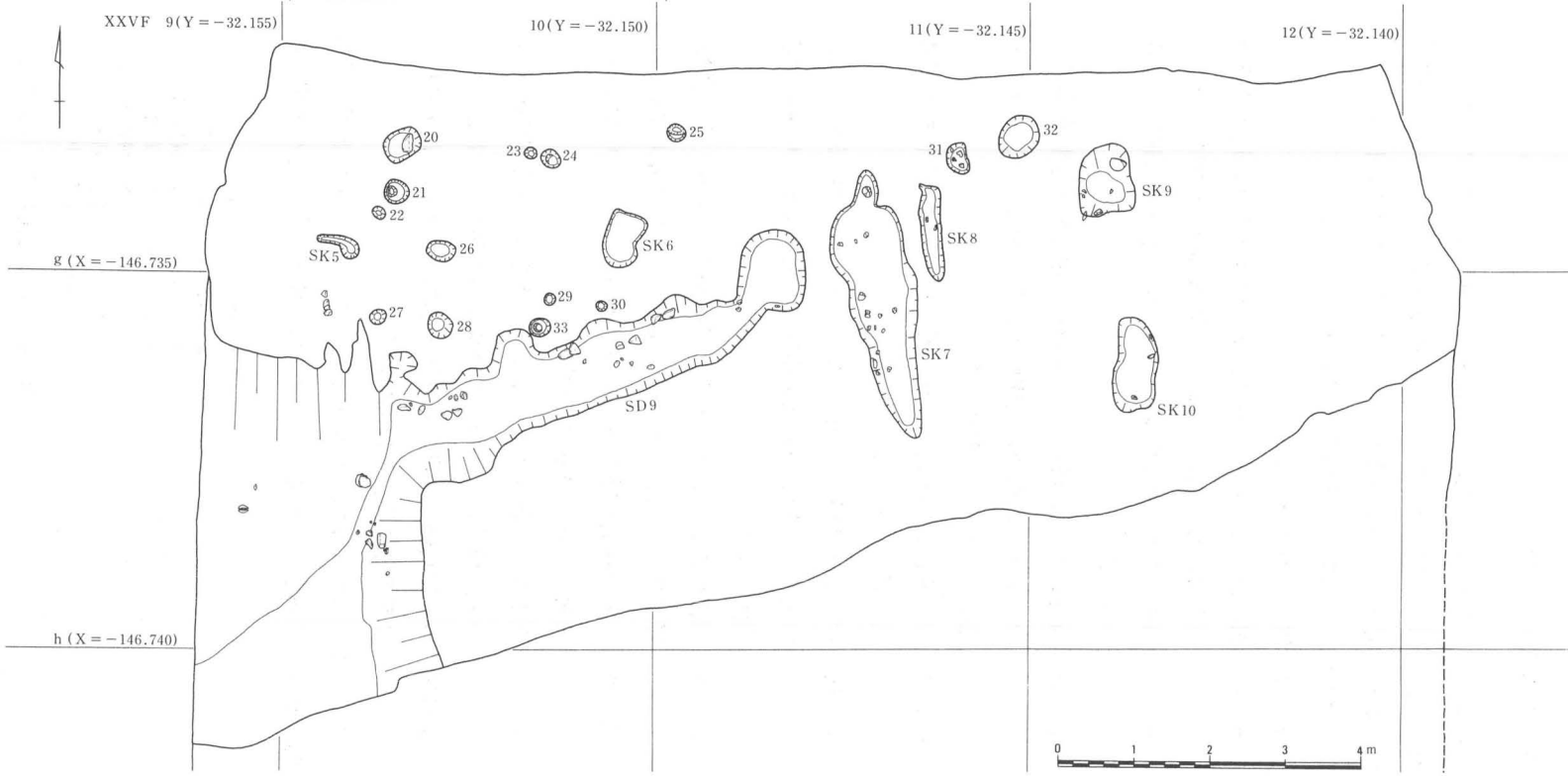
第15図 C地区東西ライン断面図→



- | | | | |
|-----------------|-------------|-----------------|---------|
| 1. 耕土 | 2. 床土 | 9. N 3 | 砂混り粘土 |
| 3. 10Y R 4 / 1 | 砂質シルト | 10. 5 Y 4 / 2 | シルト |
| 4. 7.5G Y 1 / 6 | シルト質細粒砂 | 2.5Y 4 / 4 | シルト質細粒砂 |
| 5. 7.5Y R 4 / 4 | シルト質細粒砂 | 11. 5 Y R 3 / 6 | 細礫-中礫 |
| 6. 2.5Y 4 / 2 | シルト質細粒砂 | 12. 5 Y 6 / 6 | シルト |
| 7. 2.5Y 3 / 3 | シルト(粗粒砂が混る) | 5 Y 4 / 2 | 細礫 |
| 8. 10Y R 6 / 6 | シルト | | |
| 2.5Y 3 / 3 | 細礫 | | |
- }の混合土
 }の混合土
 }の互層

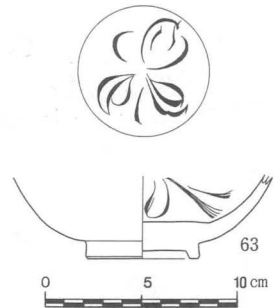
←第16図 C地区南北ライン断面図

↓第17図 C地区中世遺構平面図



耕土層を除去すると、地山層が露出する状態であった(第16図参照)。従ってその周辺では、地山層上面で、近世、古墳時代の各時期の遺構が重複して検出されることになった。

また、北から南への地山面を追求する過程で、C地区の大部分が鬼虎川の蛇行部分に包括されることが判明した(第20図参照)。これは蛇行する鬼虎川の旧河道であり、その北岸部にあたる。この点については後述する。



第18図 C地区出土
青磁碗実測図

(1) 中世の遺構(第17図)

第7層上面で中世期に属すると思われる遺構を検出した。それらにはピットや土坑、溝がある。ただかなり削平をうけており、遺構の遺存状況は悪く、密度も散慢である。そのため、出土遺物は大概瓦器碗や土師器皿の小片で、量的にも僅少であった。

S K 6

C地区西側(XXV F 10 g区)で検出。不整な方形を呈する。長辺0.74m、短辺0.51m、深さ7cmを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘質シルトであった。

S K 7

C地区中央(XXV F 11 g・11 h区)で検出。溝状を呈する土坑である。本来は南に延びていたと推測される。規模は長辺3.57m、短辺1.23m、深さ4cmである。土坑内部には拳大の礫がみられたが、集積状況に規則性は認められない。埋土はS K 6と同じ。

S K 9

C地区東側(XXV F 12 g区)で検出。不整な方形を呈する。長辺0.98m、短辺0.77m、深さ12cm。埋土はS K 6と同じ。

S K 10

C地区東側やや南寄り(XXV F 12 h)で検出。長楕円形を呈し、長辺1.27m、短辺0.61m、深さ12cmを測る。埋土はS K 6と同じ。

S D 9

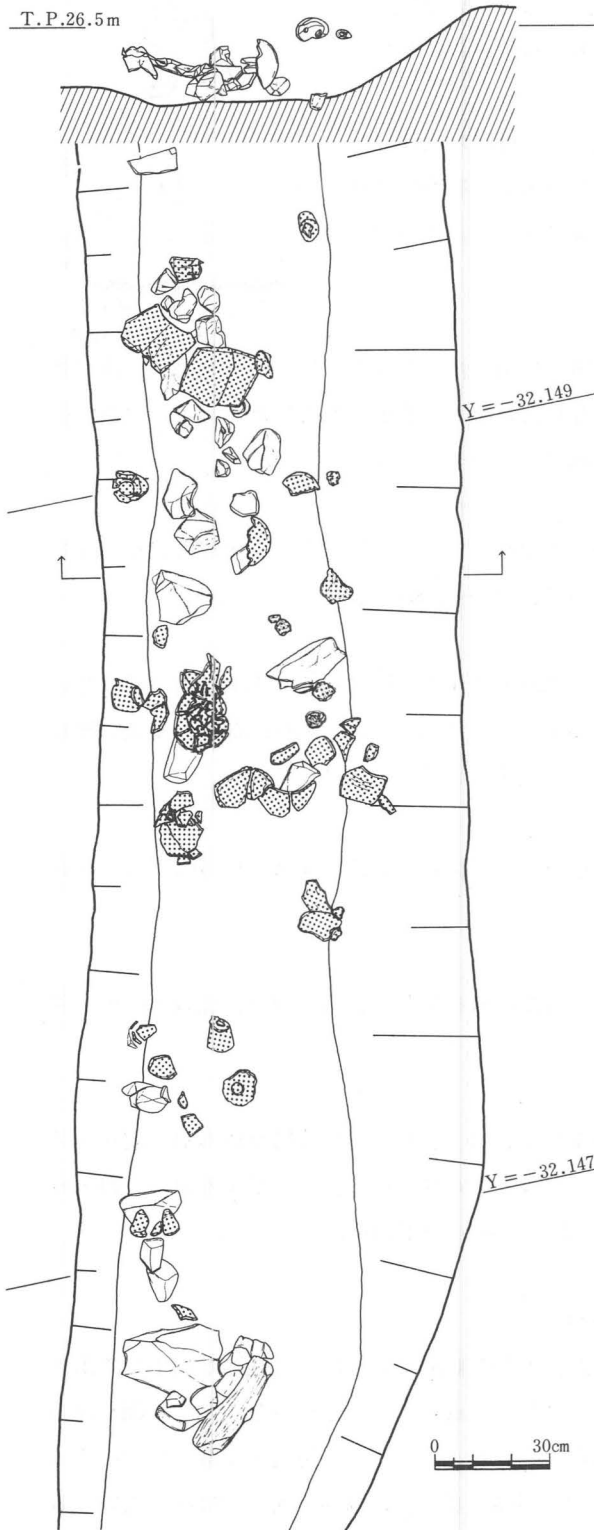
C地区中央から西南端にかけて検出(XXV F 10 h、11 g、11 h区)。遺構が西南端に向かって拡散するところから、人為的に掘削されたものとは考えられない。溝状を呈する箇所幅1m、深さ19cmを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト質細粒砂であった。

(2) 古墳時代の遺物包含層と遺構

遺物包含層(第16図・第20図網かけ部・第23・24図)

第9層はC地区の上段で広く分布していたが、とくにXXV F 12 h区では遺物が集中して出土した。そこで遺物の取り上げを第3図(P.6)に従い1mメッシュで行った。とくに網かけの部分は、自然河川の傾斜が緩く、平坦面を形作っていた。そこから、滑石製模造品やミニチュア土器が多量に出土し、土師器は供膳形態を示す高杯が多く、口縁部を人為的に打ち欠いた壺も認められた。これらのことから、網かけの地点は、水辺の祭祀を行ったあと、その折使用さ

T.P.26.5m



第19図 S D 31内遺物出土状況実測図
(アミ目は土器・土製品を示す)

れた道具が廃棄された場所であると考えられる。なお、当該の地点において、土坑状の掘りこみを確認するため精査したがその痕跡は認められなかった。

S D 31 (第19・20図)

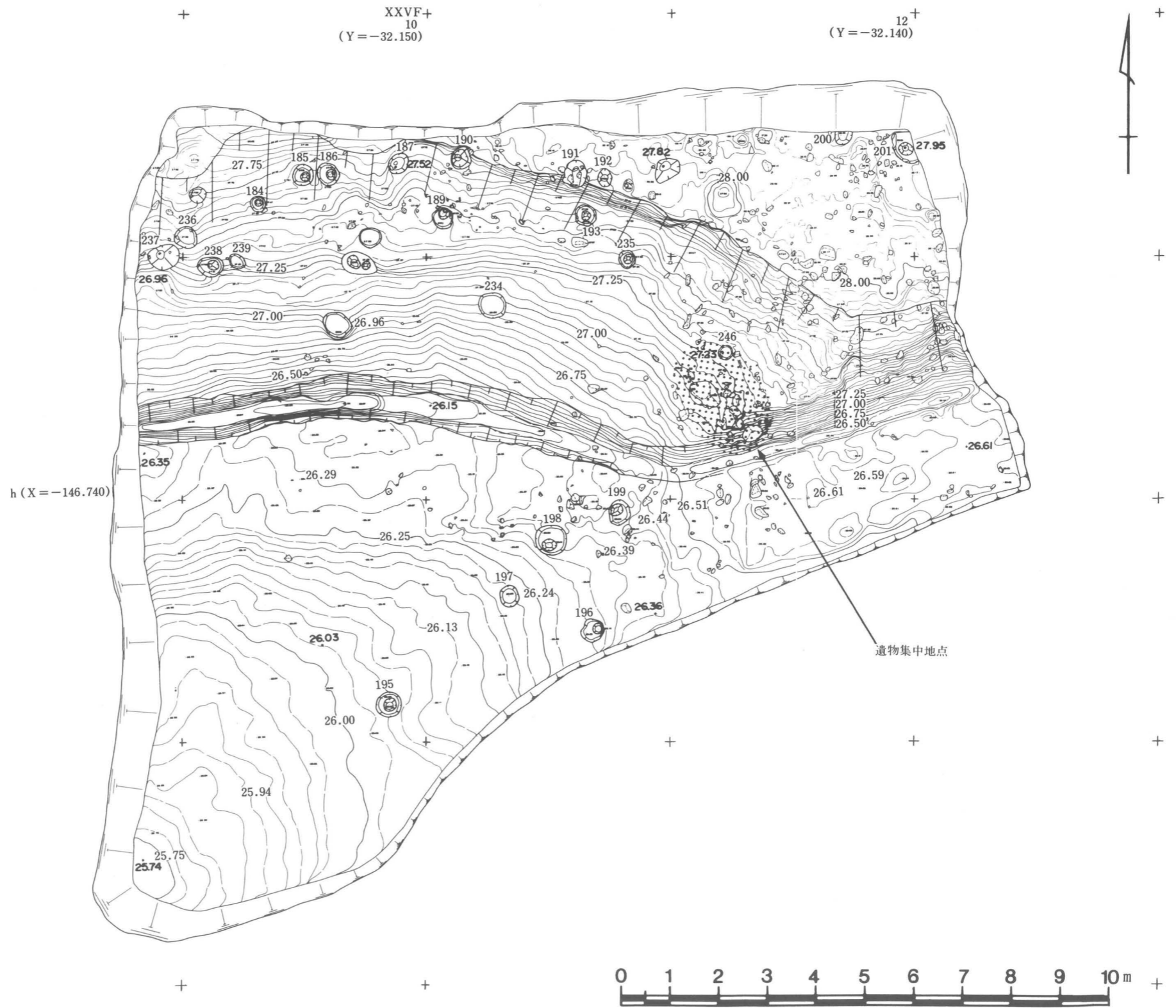
C地区中央部から西側にかけて検出 (X XV F 9 h ~ 12 h 区)。幅0.97m、深さ43cmを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は大きく2層に分けることができた。1層は第9層を主体として同色の細礫が混じる層で、2層はオリブ褐色~黄灰色シルト質細粒砂であった。土質の差からみて、2層は溝の堆積土と考えられる。遺物の出土状況は、1層では古墳時代の土器細片が中量確認されたにすぎなかったが、2層の上部では土器がまとまって出土し、下部から底面近くにかけては第2表(P.40)や第3表(P.42)に掲げたように、鞆の羽口や鉄滓などの鍛冶関係の遺物が一括出土した。このため、溝の底面を精査したが、焼化を受けた痕跡は認められなかった。従って、鍛冶関係遺物は集落で使用されたのち、この溝に廃棄されたと思われる。

ピット群

全域にピットが検出されたが、とくに、自然河川の肩口からS D 31までの地域に多い。掘立柱建物を構成するとは思われないが、規模が径40cm前後、深さ25cm前後としっかりした構造であることから、自然河川の洪水を防禦する柵的な施設などの機能が考えられる。

自然河川

河川の蛇行部北岸を確認した。C地区で河川肩口と最深部との比高差は2.2mを測った。



第20图 C地区古墳時代遺構平面図

(3) 出土遺物

a) 中世の土器 (第21図)

前項で記したように、中世期の遺構から出土した遺物が僅少であるため、包含層の出土土器を図示した。

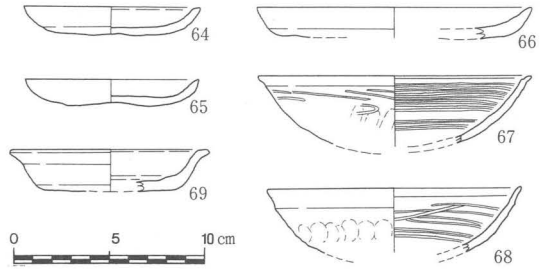
64、65、66は土師器の皿である。66は器壁が厚く、平底の底部から口縁部が屈曲して外上方へ直線的に伸びる。いずれも第6層より出土。

69は須恵器皿である。平城宮器種分類の皿Eに相当すると思われる。平底と斜め上方に開く口縁部からなる小型の皿で口縁端部を施釉陶器と同じく外に引き出されるのが特徴である。第7層より出土。67の瓦器碗は第6層より出土。

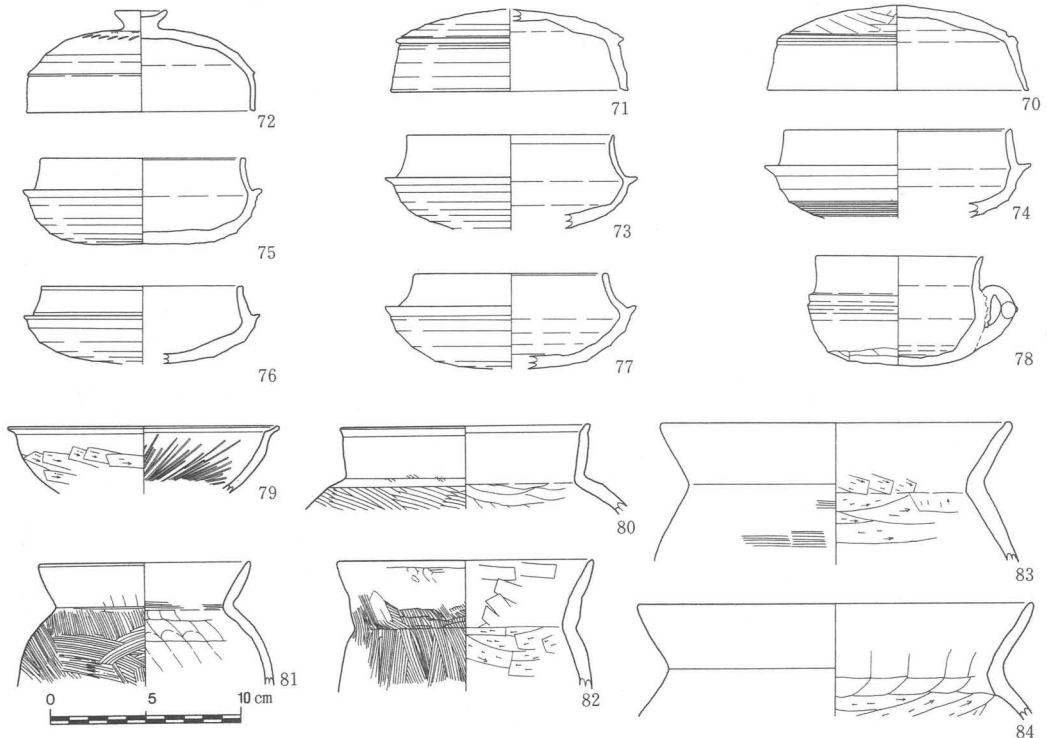
b) 古墳時代の土器

S D 31出土土器 (第22図)

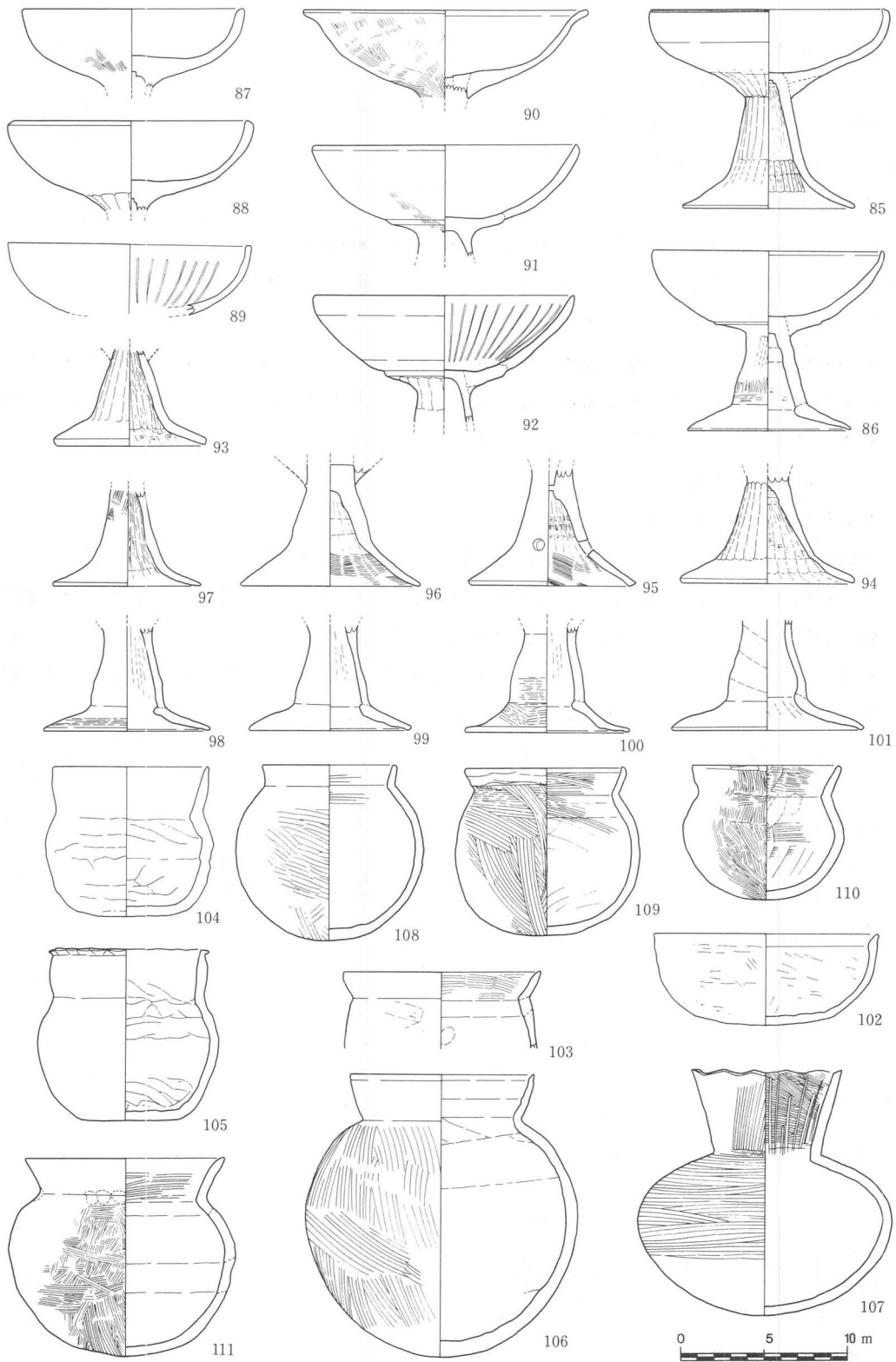
土師器杯・壺・甕、須恵器蓋・杯・高杯・把手付碗などが出土した。図示しているのはいずれも2層内からの土器である。70~72は須恵器の蓋である。71の天井部と口縁部とを分ける稜は鋭く突出している。70は焼成が甘く瓦質土器的である。天井部のヘラケズリは手持ちによる。73~77は須恵器の杯である。ヘラケズリの方向は逆時計回りが多い。74の底部外面にはカキ目（かきめ）が施されている。78は把手付碗である。凸線が2条めぐり、鋭い稜を持つ。



第21図 C地区中世土器実測図



第22図 C地区S D 31出土土器実測図



第23図 C地区古墳時代土師器実測図

79は土師器の杯である。皿状の体部にわずかに外反する口縁部がつく。口縁端部は外上方につまみ上げ、受口状を呈す。口縁部内面は平滑に仕上げられて広い面をなす。体部内面には放射状の暗文を施す。体部外面はヘラケズリをそのまま残す。80は壺である。体部に短く直立する口縁部がつく。81~84は甕である。口縁部が「く」の字状に大きく外反するものと外反の屈曲が弱いものがある。生駒西麓産の土器が多いなかで、82は淡黄色(2.5Y 8/3)を呈し、長石などの砂粒を多く含み他地域産と考えられる。

第9層出土土器(第23・24図)

先に述べたように、第9層内から出土した土器は遺物集中区(第20図)において一括性の高い遺物となっている。そこで、第23・24図には集中区の土器を図示しておいた。

土師器には、高杯、鉢、壺、甕がある。

高杯 20個体出土した。一括土器中最も多い。杯部と脚部とが各破損した状態で出土したため、接合作業を試みたが、完形品にならなかった。杯部は次の2型式に大別できた。

A. 杯底部に稜をもたないもの。(87~90)

B. 杯底部は稜をなすもの。(91~92)

Aは杯部が緩やかに屈曲して口縁部へ続くもので、口縁部の形態から2種類に細分出来る。

A₁ 屈曲後内彎して口縁部が直立気味に立つもの。(87~89)

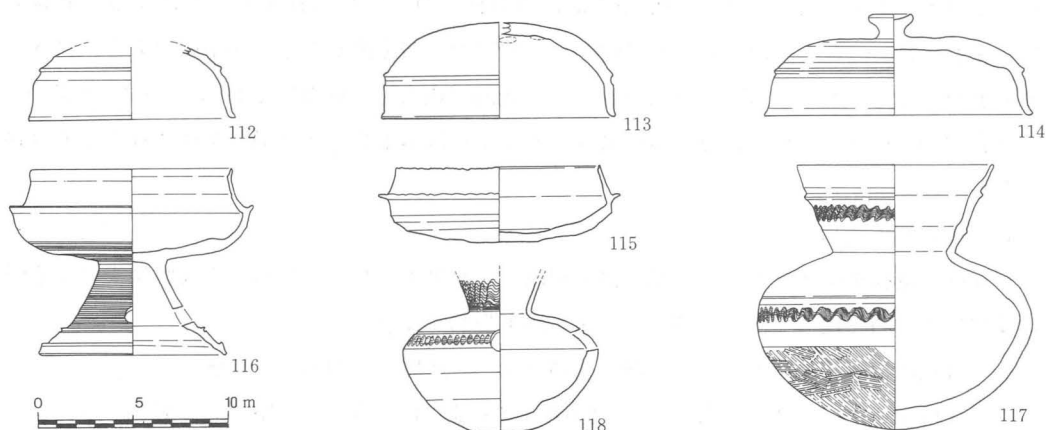
A₂ 底部から屈曲して外上方へ開いた後、外反するもの。(90)

高杯脚部は裾部の屈曲の度合によって2型式に分類できた。

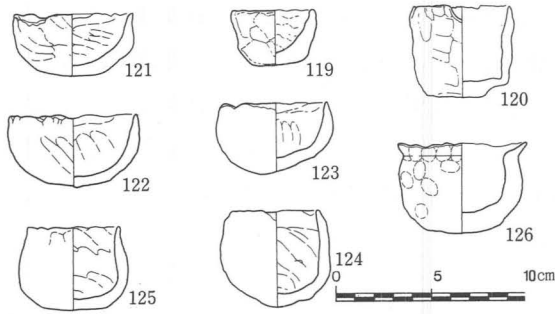
A. 裾部がゆるやかに広がって開くもの。(93~97)

B. 裾部が屈曲して開くために脚筒部と裾部の境界が明瞭な段をなすもの。(98~101) これは筒部と裾部とを分割して成形、接合しているため、筒胴部がふくらみ、裾部内面に突起を残している。

以上の杯部と脚部の組み合わせは、85・86に見られるように杯部A-脚部A、杯部B-脚部Bとなる。86の場合、杯部-脚筒部-脚裾部の3分割成形技法をとったと考えられる。



第24図 C地区古墳時代須恵器実測図



第25図 C地区ミニチュア土器実測図

壺も甕も小型～中型品で大型品は見られない。その他では杯(102)や鉢(103)がある。須恵器には蓋、杯、高杯、罍、罍型壺があるが、量的には多いものではない。

蓋(112～114) S D31出土例と比べて、天井部は丸く仕上げられているのが特徴である。

杯(115) 立ち上がりは短い、底部は扁平で、ていねいなヘラケズリが施されている。口縁部と受部に鋸歯状の打ち欠きが見られる。

高杯(116) 杯底部から脚部の外面にカキ目が施されている。器壁は薄くつくられている。

罍(118) 頸部には櫛描き波状文を施す。体部中央には2本の凹線によって区画された間に櫛描き列点文を巡した文様帯をもつ。

壺(117) 胴の張る体部にラップ状に広く開く口頸部をもつ。頸部には2本の凸線によって区画された中に櫛描き波状文を、体部中央には2本の凹線の間に櫛描き波状文が施される。体部下半には平行タタキが見られる。

さて、遺物集中区ではミニチュア土器が10個体出土している(第25図119～126、377・378)。これは土師器の範疇に属するものであるが、祭祀専用器具として製作、使用されたところから便宜上独立して取り扱うこととする。

今回出土したミニチュア土器中、最小は119で口径4.1cm、器高2.9cmを測る。121・122のように、ヘラ状工具で器面を平滑に整えたものがあるが、そのほかは小さな粘土塊から直接手捏ねにより成形している。そのため指頭圧痕が内外面に無造作に遺存することになる。形状では、碗形(121・122)、鉢形(126)に擬せられるほかは何を摸したものか不明である。口縁部の形態をみると、わずかに内彎または直立する傾向が窺える。底部は平底(120・377・378)と丸底(119・121～126)に分れる。底部に木葉または木葉状のヘラ描きが印されたものは存しなかった。

c) 滑石製模造品

C地区の遺物集中区において多量の滑石製模造品が出土した。これらを大場磐雄氏による呼称及び形式分類に従って、その個数を示すと以下の如くなる。

有孔円板・不整板形品——33個 剣形品——20個 勾玉——12個

子持勾玉——1個 白玉——2529個(総重量224.2g) 不明——5個

分類にあたっては、欠損品など全体の形状を窺い知ることのできないものについてもできる

壺 平底のもの(104・105)、丸底で短い口頸部がつくもの(106・108・109)、長く外上方へ開く口頸部をもつもの(107)などがみられる。107は大きく張り出す胴部をもち、色調は明赤褐色(2.5Y R 5/6)を呈している。口縁部は波状に打ち欠いている。

甕、その他 小型の甕(110・111)があ

だけ上記の区分に従って品種の認定を行ったが、最終的に残ったものを不明品とした。

これらの滑石製模造品は子持勾玉を除き、すべて第9層内から出土したものである。また5mメッシュの地区割では例外的に極微量検出したXXV F11h区を除けば、他は12h区の遺物集中区で発見したものである。時期的には前述の伴出した土器の年代観から、5世紀末から6世紀初頭の時期に措くことができる。全個点数については、現地で製品を発見して以来、12h区周辺の第9層の土壌を土嚢に採取し、屋内で洗滌作業を行って得た数値である。

さて、従来「滑石」製模造品とされる石製品の岩種については、狭義の滑石のみではなく、緑泥石などを包摂することが明らかになっている。第IV章として、本遺跡の滑石製品と池島遺跡(福万寺地区)のそれとを比較し、化学分析を行った報文を掲載しているので参照されたい。また、有孔円板類、剣形品、勾玉類の個々の計測値については第1表(P.34)をご覧ください。製品の色調については、当初『標準土色帖』に準拠して色名を認識しようとしたが、現物と色片がかなり異なるため、協議した結果、肉眼で識別した色名を使用することにした。ただし、表面が風化したものが多いため、色調の違いが必ずしも原石(岩種)の違いを意味するものではないことを記しておきたい。なお、今回出土した滑石製模造品にあつては、欠損品は発見したが、未製品になるものは確認するに至らなかった。

有孔円板・不整板形品(第26図)

有孔円板とは円形に面取りした板状の石製品で、中央に単孔または双孔を穿つものをいう。形状が円形でなく不整な方形を呈するものを「不整板形品」と呼ぶことにし、有孔円板とともにこの項で一括して取り扱う。

第1表を参照していただきたい。今、穿孔方向に直交するものを「長さ」とし、平行するものを「幅」とすれば、今回出土した有孔円板類は規模の上からは1.9~2.2cmを測る小型品と、2.6~3.4cmの大型品の2つに大別できる。同縁部が損傷しているものが数多くみられる反面、同辺を未研磨のまま残していると考えられる円板類があるところから、形状が楕円形や長楕円形を呈するのが通例となっている。133のように同縁部を研磨、面取りして正円に近く仕上げているものは稀である。石材の岩種は、緑泥石を主体とする緑色片岩系の岩石や、133や142のように、肉眼で良質の滑石と観察できるもの、或いはその中間的なものの3つに分類できる。穿孔は、139のように途中で別の位置に穿ち直しているものがあり、製作工程の段階で穿孔が最終に近い段階で行われていたことがわかる。

剣形品(第27図)

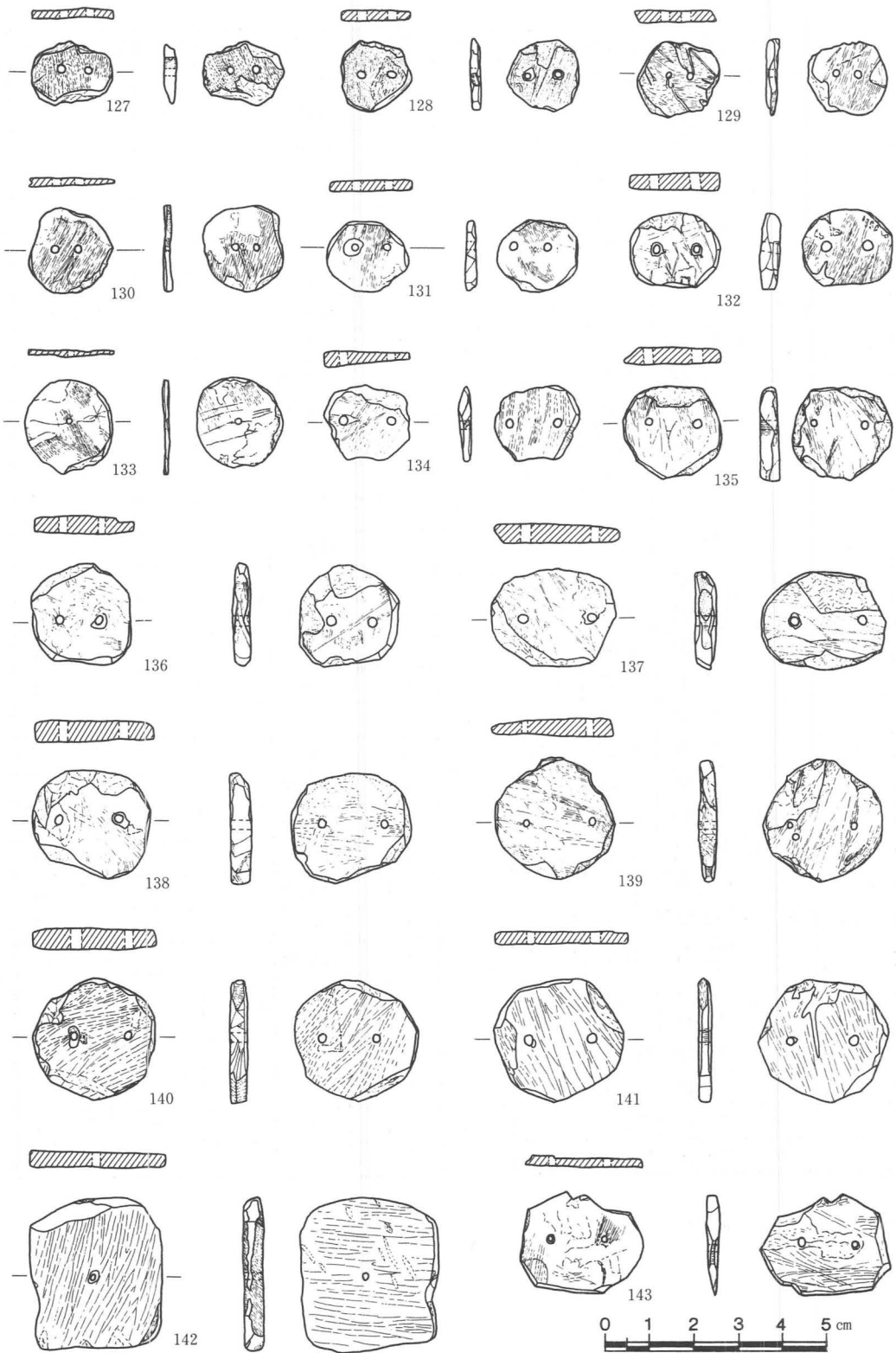
細長い四角形の長辺の一端が尖り単孔を穿つ石製品を剣形品とした。周縁は多く欠損しており全体の形状を窺い得るものは少ない。形状のプロポーションからは、A、菱形ないし涙滴形を呈するもの。(144、146、156、160など) B、逆三角形を呈するもの。(153、158、159など)の2タイプが想定しうるものの、不整形を呈するものも多い。先端は丸味を帯びるものがある。断面はほとんど扁平なため、他の論考や報告書にみられるように鎬の有無による分類は不能である。その中で150は片面に鎬を有し、他面は平滑に仕上げる唯一の例である。

第1表 C地区滑石製模造品計測表

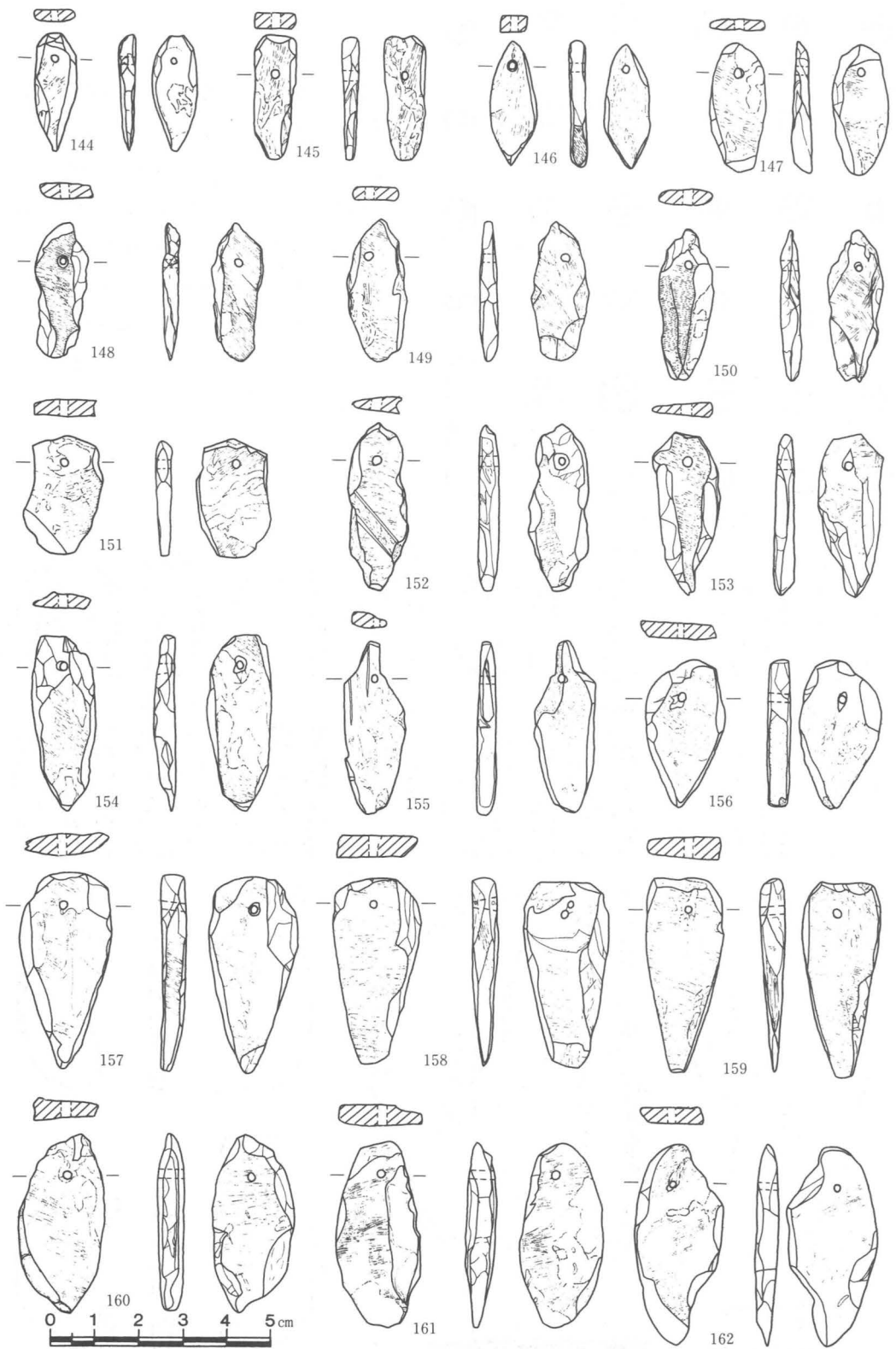
N O .	種類	長(cm)	幅(cm)	孔径(cm)		重量(g)	色	出土地区	備考
127	有孔円板	1.57	1.95	0.17	0.18	1.6	緑黒色	XXVF12h	T-2
128	〃	1.69	1.66	0.17	0.18	1.2	緑灰色	〃	T-18
129	〃	1.78	1.89	0.15	0.14	1.7	緑黒色	XXVF12h ^h	T-13
130	〃	1.95	1.90	0.15	0.16	1.6	灰緑色	〃	T-10
131	〃	1.60	1.91	0.15	0.14	1.7	緑灰色	XXVF11h	T-16
132	〃	1.66	2.01	0.21	0.20	2.9	〃	XXVF12h	T-18
133	〃	2.01	2.01	0.12	-	1.6	灰黒色 透明	〃	〃
134	〃	1.69	1.96	0.15	0.16	2.0	緑灰色	XXVF12h ^h	T-14
135	〃	2.18	2.27	0.13	0.15	3.8	〃	XXVF11h	T-16
136	〃	2.29	2.21	0.13	0.13	4.1	〃	XXVF12h ^h	T-4
137	〃	2.27	2.81	0.19	0.17	5.4	〃	XXVF12h ^h	T-10
138	〃	2.33	2.69	0.21	0.22	5.9	白緑色	〃	〃
139	〃	2.76	2.73	0.16	0.15	4.6	灰緑色	〃	T-13
140	〃	2.69	2.84	0.18	0.17	5.9	緑黒色	〃	T-14
141	〃	2.74	2.89	0.17	0.16	4.9	〃	〃	T-10
142	不整形板	3.49	3.06	0.10	-	11.0	灰色	XXVF12h	T-18
143	〃	2.15	2.86	0.18	0.18	3.3	灰緑色	〃	T-19
144	剣形品	2.73	0.96	0.15		1.3	緑灰色	〃	T-18
145	〃	2.81	0.92	0.18		1.6	〃	XXVF12h	T-12
146	〃	2.93	1.08	0.14		1.9	緑黒色	〃	〃
147	〃	2.96	1.21	0.21		2.2	〃	〃	T-10
148	〃	3.06	1.17	0.15		1.6	緑灰色	〃	T-12
149	〃	3.24	1.23	0.16		2.5	緑黒色	XXVF12h ^h	T-7
150	〃	3.45	1.27	0.19		2.5	灰緑色	XXVF12h ^h	T-10
151	〃	4.49	1.20	0.17		5.3	緑黒色	〃	〃
152	〃	3.75	1.25	0.19		3.0		〃	〃
153	〃	2.64	1.58	0.20		2.4	緑灰色	〃	T-12
154	〃	3.68	1.32	0.20		2.8	〃	〃	〃
155	〃	3.95	1.43	0.19		3.3	〃	XXVF12h	T-18
156	〃	4.15	1.78	0.16		5.4	白緑色	XXVF12h ^h	T-10
157	〃	4.26	1.98	0.18		7.0	灰緑色	XXVF12h	T-18
158	〃	4.42	1.77	0.17		5.3	緑黒色	XXVF12h ^h	T-10
159	〃	3.96	1.77	0.19		5.7	〃	〃	〃
160	〃	3.32	1.78	0.18		4.5	灰緑色	XXVF12h	T-18
161	〃	3.88	1.33	0.19		3.1	〃	XXVF12h ^h	T-12
162	〃	4.42	2.05	0.22		6.7	〃	XXVF12h	T-18
163	勾玉	2.14	1.27	0.19		2.1	緑黒色	XXVF12h ^h	T-11
164	〃	2.38	1.10	0.19		2.8	緑灰色	XXVF12h	T-18
165	〃	2.51	1.29	0.19		2.2	灰緑色	〃	〃

No.	種類	長(cm)	幅(cm)	孔径(cm)		重量(g)	色	出土地区	備考
166	勾玉	2.45	1.30	0.23		3.3	緑黒色	XXVF12h ⁹	T-10
167	〃	2.60	1.42	0.22		3.3	緑灰色	XXVF12h ⁹	T-5
168	〃	2.96	1.25	0.17		3.3	緑黒色	XXVF12h	T-18
169	〃	2.92	1.29	0.15		2.4	緑灰色	〃	〃
170	〃	2.99	1.27	0.18		3.2	灰緑色	〃	T-2
171	〃	3.55	1.67	0.14		4.7	灰緑色	XXVF12h ⁹	T-15
172	〃	3.64	1.73	0.21		7.5	緑灰色	XXVF12h	T-17
173	子持勾玉	8.42	3.68	0.77		63.9	緑灰色		7層
297	有孔円板	*1.44	*1.83	0.16	*0.15	0.9	灰緑色		T-12
298	〃	1.64	2.02	0.14	0.12	1.8	灰黒色		T-10
299	〃	1.86	1.77	0.18	0.16	1.8	緑灰色		T-12
300	〃	1.97	2.13	0.15	0.17	2.2	〃		T-2
301	〃	2.01	1.94	0.17	0.16	1.6	〃		T-8
302	〃	2.01	2.02	0.31	0.17	2.2	〃		T-18
303	〃	1.69	2.29	0.14	0.12	2.5	緑黒色		〃
304	〃	1.90	2.01	0.18	0.20	2.6	緑灰色		〃
305	〃	1.92	2.36	0.21	-	3.5	白緑色		〃
306	〃	2.32	2.22	0.18	-	3.2	緑黒色		T-1
307	〃	*2.33	*2.43	0.21	0.22	4.4	灰緑色		T-3
308	〃	*2.23	2.33	0.17	0.19	4.2	〃		T-18
309	〃	*2.61	2.65	0.22	-	4.1	白緑色		T-12
310	〃	2.51	2.45	0.16	-	3.4	灰色		T-17
311	剣形品	*2.88	0.78	*0.16		1.1	緑黒色		T-12
312	勾玉	*2.42	1.05	*0.17		1.5	緑灰色		T-16
313	〃	3.38	1.29	0.21		4.4	緑黒色		T-6
314	不整形板	*2.36	1.91	*0.16		4.9	緑灰色		T-10
315	〃	*3.64	2.85	*0.22		1.3	白緑色		T-18
316	〃	*3.11	2.55	0.19		3.7	緑黒色		T-9
317	不明	*1.72	0.85	0.15		0.7	〃		T-13
318	〃	*1.32	*1.27	*0.16		0.6	〃		T-12
319	〃	*2.41	1.38			2.1	〃		T-13
320	〃	*1.19	*0.39			0.3	〃		T-12
321	〃	*0.86	*0.68			1.0	〃		T-12

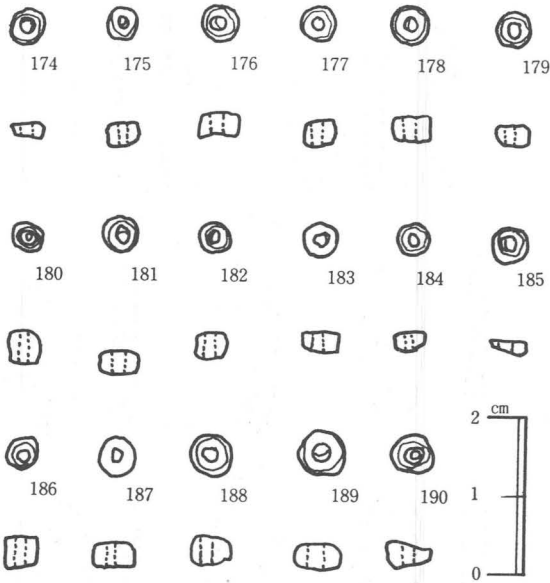
備考は取り上げ番号。*は現存長を示す。



第26图 有孔円板・不整形板実測図



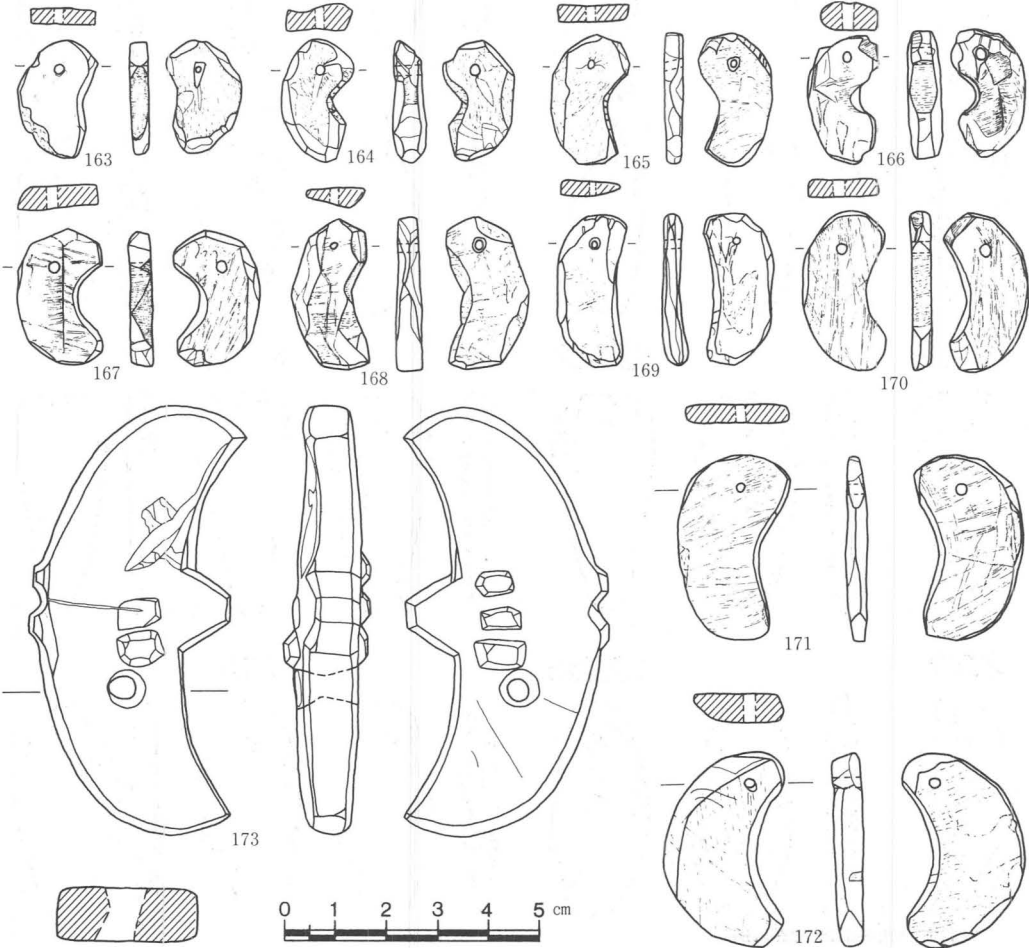
第27图 箭形品实测图



第28図 白玉実測図

勾玉 (第29図)

繭形の製品の一側面が弧状をなし、頭部に単孔を有するものを勾玉とした。しかし、169のように、弧の屈曲度が弱く半月形を呈するものもある。断面は薄く扁平なものが多いが、164・168の肉厚なもの、166の厚く片面の中央に稜をもつものもみられた。研磨は全面に施されるが、169のように片面に形割痕をそのまま残すものが認められた。



第29図 勾玉・子持勾玉実測図

子持勾玉 (第29図173)

腹部に台形の突起を、両側面に一部欠損しているが3個の長方形突起を配したものとみられる。背部には2段の突起を造り出し、その間を弧状に凹めている。各面にみられる突起物は子が退化したものと考えられる。形状は板状を呈し、断面は扁平でレンズ状の膨らみをもたない。小野真一氏による子持勾玉の型式分類で第7型式(藤原宮式-7世紀後半-)に属し、最も後出する型式の一つに位置付けられる。C地区のgライン層観察用の畔上、XXV F 11 g区第7層から出土した。本勾玉の年代観と第7層出土土器のそれとは矛盾しない。

白玉 (第28図)

円形を呈し径4mm前後で竹管を薄く輪切りにしたような小玉を白玉とした。滑石製模造品中最も量が多いため、図示したのはごく一部にとどまる。総数2529個中、最小は径3mm、最大は径8mmを測る。形状をみると、側面を研磨するためその胴部中央に稜をもち算盤玉に類似したもの、側厚が1mm前後とごく薄いもの、形割時での端面上下切断の際不揃いになったものなどのバリエーションがみられる。色調では、①緑灰~灰緑色のグループ(85.6%)、②灰白~緑白色のグループ(7.9%)、③緑黒色のグループ(6.5%)の3つに大別できた。②のグループは第IV章の報文中で「滑石のみで構成される岩種」に相当するものと考えられる。

池島遺跡で出土した白玉と比較すると、神並例は全体的に小型で、端面、側面とも最終的な研磨が施されたものが多いことがわかる。

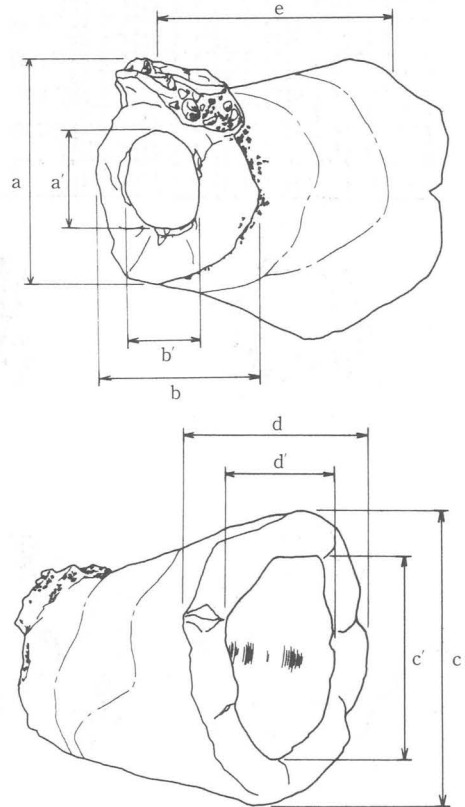
d) 鍛冶関係遺物

鞆の羽口 (第30~32図、第2表)

I地区の第9~10層内から出土した5点を除けば、全てC地区のS D 31の堆積層から出土した。

まず、鞆の羽口の注量を計測するために、第30図に示すように、種々の計測点を設けた。a、bは先端部を2方向から計測した外径、a'、b'はその内径、c、dは裾端部を2方向から計測した外径、c'、d'はその内径、eは羽口の長さ、f 1、f 2は先端部、裾端部の各々器厚を表わしている。その結果を第2表にまとめた。(※は現存値を示す)なお第31・32・49図で網目の部分は焼化して黒色~赤褐色に変化した部分を表わす。

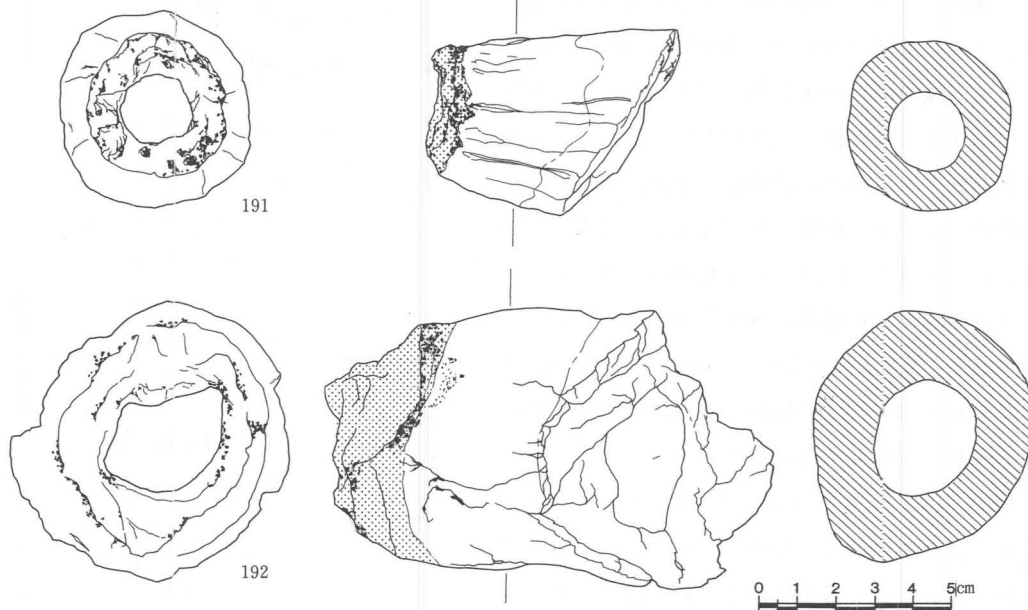
規模では、最小が191、最大が196となる。従ってあくまで現存値での比較となるが、191と196の長さ(e)では、後者は前者の約2倍となる。ところが、先端部の内径(a'、b')を比較すると、



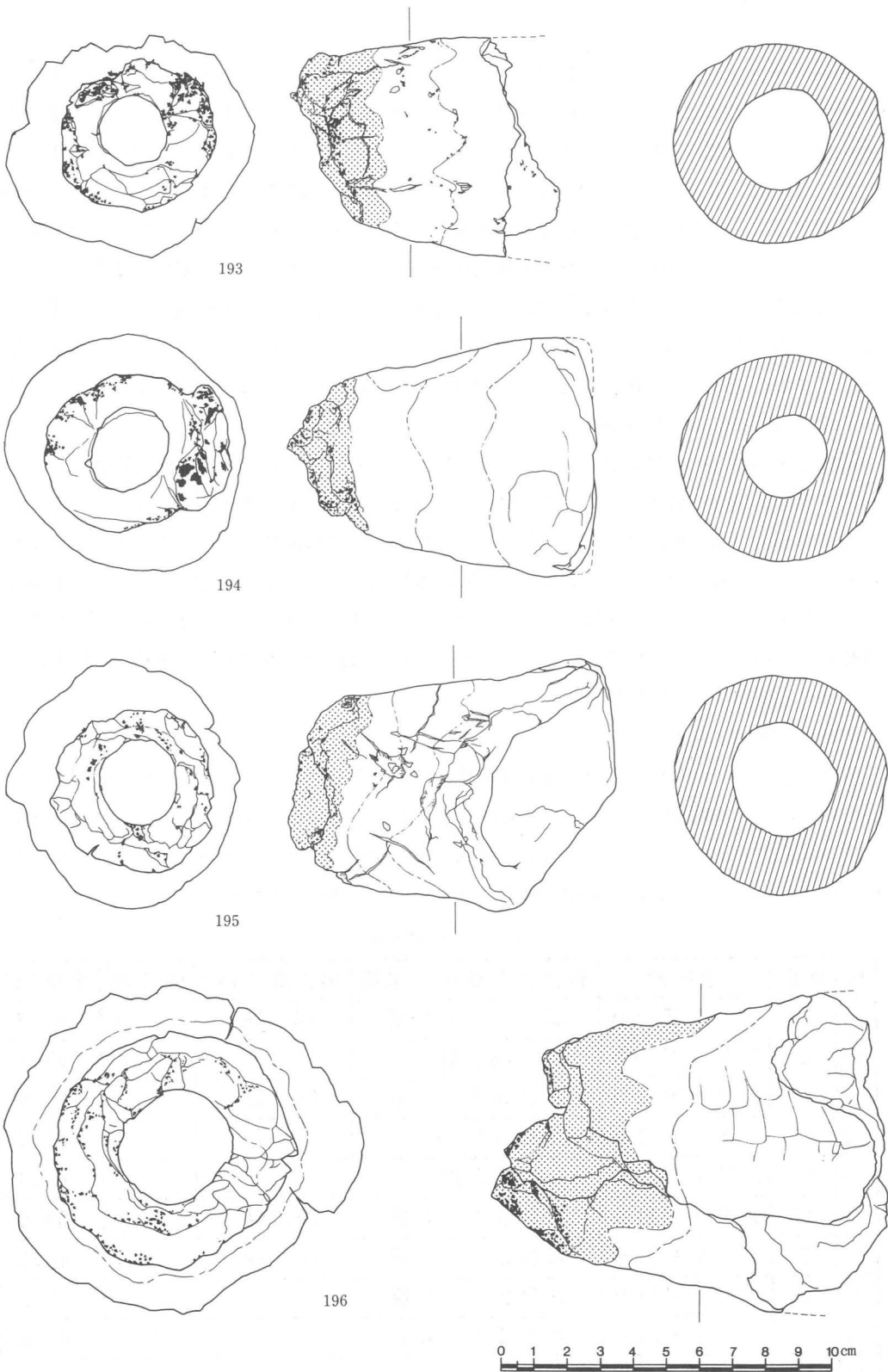
第30図 フィゴの羽口計測位置

第2表 フイゴの羽口計測表

No.	a	b	c	d	e	f ₁	f ₂	地区	地区割	層位	T.P	備考
	a	b	c	d								
191	2.85	2.85	5.93	5.34	8.66	1.04	1.24	C	XXVF11h	SD31 2層		272
	1.61	1.56	3.61	3.51								
322	5.52	5.26	7.38	7.38	8.05	1.34	1.49	C	XXVF12h	"	23.452	
	2.31	2.19	3.85	4.10								
323	5.74	5.38	10.44	10.25	9.61	2.11	2.39	C	XXVF10h	SD31 底面	25.241	
	2.43	2.44	6.12	5.81								
324	-	-	-	-	-	1.44	1.51	C	"	"		6分割
	-	-	-	-								
192	5.14	5.38	8.14	8.29	12.80	1.50	2.02	C	"	"	25.200	274
	2.40	2.30	3.55	3.91								
194	5.55	5.58	7.18	7.00	9.07	1.90	1.79	C	XXVF11h	SD31 2層	28.513	115
	2.33	2.12	4.66	4.91								
193	4.65	4.75	7.47	7.51	8.22	1.73	1.65	C	XXVF10h	SD31	23.261	113
	1.63	1.72	3.56	3.11								
195	5.17	4.96	8.08	7.98	10.05	1.62	1.58	C	"	SD31 1層	25.660	114
	2.24	2.15	5.93	5.83								
325	5.17	4.90	7.46	7.41	9.01	1.61	1.57	C	XXVF12h	SD31 2層	28.481	112
	2.36	2.49	5.59	5.22								
326	4.78	4.49	6.81	6.79	8.34	1.53	1.74	C	XXVF10h	SD31		111
	1.78	1.77	2.43	2.24								
196	6.53	5.89	11.05	11.17	13.05	1.88	2.46	C	"	SD31 底面	28.282	116
	3.06	2.96	7.74	7.86								
327	4.91	4.58	7.12	6.53	8.30	1.21	1.35	C	"	"	28.229	
	2.32	2.44	4.61	4.02								
328	-	-	-	-	-	1.65	-	I	XXVF17h	9層		2分割
	-	-	-	-								
329	5.74	5.55	9.72	9.94	8.25	2.02	2.23	I	XXVF 17~18g	10層		
	2.06	1.92	3.07	2.93								
330	-	-	-	-	-	1.48	1.52	I	XXVF17h	12層上面		2分割
	-	-	-	-								
245	4.78	4.68	6.85	6.75	8.68	1.61	1.35	I	XXVF 17~18g	10層上面		275
	2.55	2.27	4.04	4.06								
244	3.78	3.59	6.28	6.08	8.32	1.07	1.09	I	XXVF17h	10層		273
	2.19	1.87	4.36	3.90								
331	4.87	4.62	7.83	7.38	8.90	1.54	1.92	(NT) K				
	2.02	1.85	4.54	4.20								
332	5.93	5.59	8.37	7.91	6.48	2.15	2.23	(NT) K-29		溝D 2層		黒褐色土
	2.39	2.44	3.60	3.89								
333	5.82	5.62	8.10	5.66	9.89	2.38	1.48	(NT) K-30				
	1.76	1.86	3.25	3.19								
334	4.92	5.18	7.16	7.00	8.07	2.17	1.98	(NT) K-30		溝C区		黒褐色粘土 腐葉じり
	2.25	2.22	3.04	2.81								
335	4.59	4.60	8.49	8.66	10.92	1.71	1.72	(NT) K-29		溝D 2層		黒褐色土
	1.81	1.91	5.74	5.91								
336	5.09	4.72	7.40	7.17	7.18	1.38	1.66	(NT) K		溝E地区		黒褐色粘土 腐葉じり
	1.99	2.07	2.65	2.66								



第31図 フイゴの羽口実測図



第32図 フィゴの羽口実測図

C地区の羽口は1.6~2.3cmの間に収斂している。これは羽口と接続する鍛冶炉の構造鞆自体の送风量、羽口の製品としての規格性を考える上で興味深いデータである。形状は、先端却から喇叭状に大きく開いて裾端部に続くものと考えられるが、192や196は先端部からそのまま開かず、裾部で一度屈曲してから大きく開いている。今回の出土例と縄手遺跡出土例(331~336)とを比べると、神並例の法量にかなり大小関係がみられるのに対し、縄手例は例えば先端部外径でいえば、約4~5cmの間に収まる傾向がある。また、神並例では裾端部が遺存しているのが2例ある。これらの相違点は鍛冶炉や鞆の操業に関して、その機能や用途の異同に求められると考えられる。胎土は全点とも雲母や角閃石、石英、長石を多量に含む、生駒西麓産と思われる。また、先端部の焼化痕の範囲は、羽口の装着位置や角度を反映している。

鉄滓 (図版三五上、第3表)

鉄滓も鞆羽口と同様にSD31からの出土が顕著である。ただし、古墳時代の遺物包含層である第9層や、現代の耕作土である第2層からも発見されている。第3表をご覧ください。現地での調査では、地区割や出土位置によってブロック別に取り上げたため、表に示すような内容になった。破片数は46片を数え、総重量は397.2gである。個々の法量は、径1cm未満のものから6cmを測るものまで多様であった。溶解にアメ状となり黒色化したものは少量で多くは多孔質となっている。大型の破片である338・339・341は鍛冶工程の炉内で鞆口下の床中に溜まるとされる椀形滓の可能性がある。

炉壁片 (図版三五下)

鉄滓と類似しているが、炉の壁面が操業時に鉄分と混じり合ったと考えられるものを炉壁片とした。従って外観は焼土に鉄分の付着がみられることになる。破片数は4片を数え、総重量は39.5gである。法量は長径2.5~4cmを測る。出土位置は第19層とSD31である。これら炉壁片の存在からC地区の周辺で鍛冶の操業が行われたことが推察される。

第3表 鉄滓一覧表

No	地区	地区割	層位または出土遺構	出土高さ(m)	破片数	重量(g)
337	C	XXVF11h	SD31-2層	26.338	9	58.2
338	C	XXVF9h	第9層	-	4	57.2
339	C	XXVF11h	SD31-2層	26.561	1	75.6
340	C	XXVF11h	SD31	-	3	41.9
341	C	XXVF9h	第2層	-	1	41.4
342	C	XXVF11h	SD31-2層	26.344	2	20.0
343	C	XXVF11h	SD31-2層	26.629	5	44.1
344	C	XXVF11h	SD31-2層	-	2	17.6
345	C	XXVF11h	SD31-2層	-	19	41.2
合計					46	397.2

4) D地区の調査

D地区には、調査の直前まで矩形に区画された1面の水田が存在していた。水田になる以前の地形は西流する鬼虎川に向かって南側に大きく傾斜する面を形成していた。まず、基本層位を明らかにしておきたい。

第1層 耕土。第2層 床土。第1層、第2層とも現在の耕作土である。第2層下部には、耕作に伴う地上げや、水田の平坦面を得るために谷川岸端部の土留めによる客土層（第2L層=灰黄褐色シルト質細粒砂）の存在が認められた。

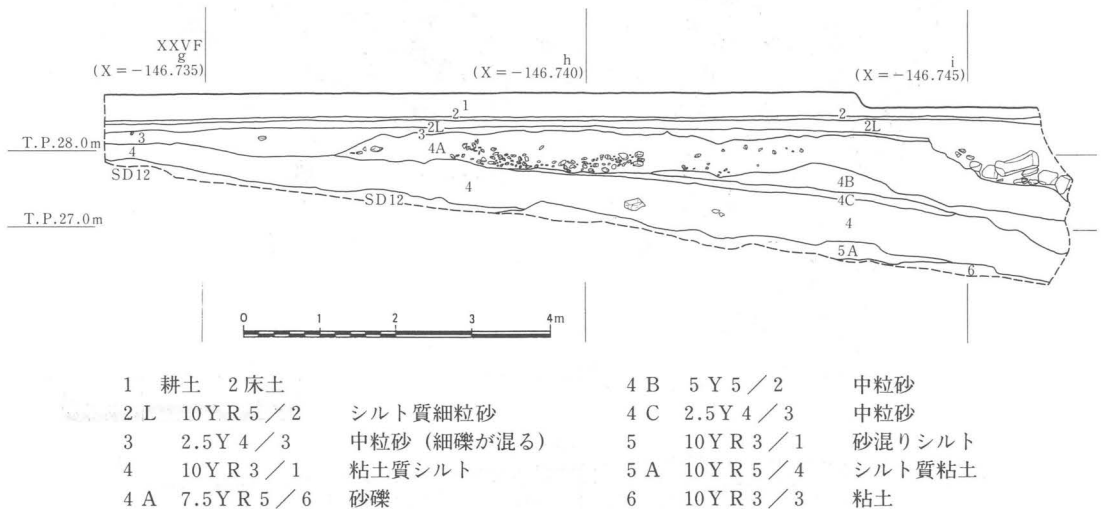
第3層 オリーブ褐色細礫混り中粒砂。中世期の堆積層による凹凸面を整地した層。中世期の遺物とともに、近～現代の陶器片が出土。

第4層 黒褐色粘土質シルト。平安時代後期から室町時代までの遺物包含層。層厚40~50cm。第3層下部から第4層上部までには3層の間層があり、各々第4A層(明褐色砂礫)、第4B層(灰オリーブ色中粒砂)、第4C層(オリーブ褐色中粒砂)とした。いずれも砂層を主体とし、出土土器による堆積の時期差は認められない。

第5層 黒褐色(10Y R 3/1)砂混りシルト。炭化物が混入する。D地区南側にはこの層を基盤として、第5A層(にぶい黄褐色シルト質粘土)が堆積。第5層、第5A層とも古墳時代後期の遺物包含層。第5層、第5A層上面は、中世期の遺構面をなす。

第6層 暗褐色粘土。地山層。ただし東側にいくにしたがい、粘土からシルト、砂礫層に変化していた。古墳時代後期の掘立柱建物は、この段丘面を形成する礫層を基盤層としている。

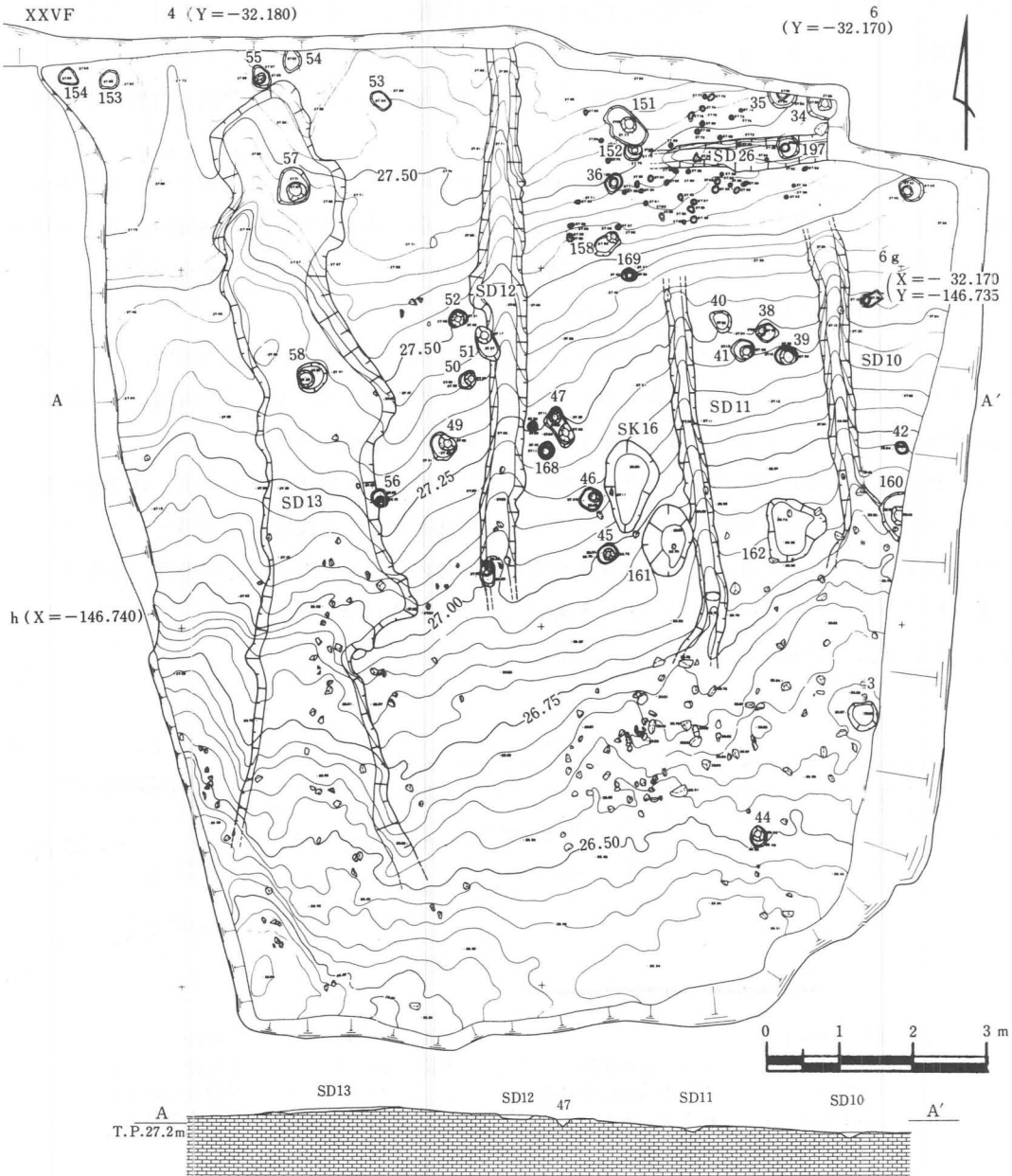
以上D地区の層位を記述したが、調査地北側は、南側の急斜面のために、中世期以降大きく削平されている状況が認められた。また本来的な遺物包含層は第5層のみであって、とくに第4A~4C層は、鬼虎川の氾濫による二次堆積層と考えられた。



第33図 D地区土層断面図

(1) 中世の遺構 (第34図)

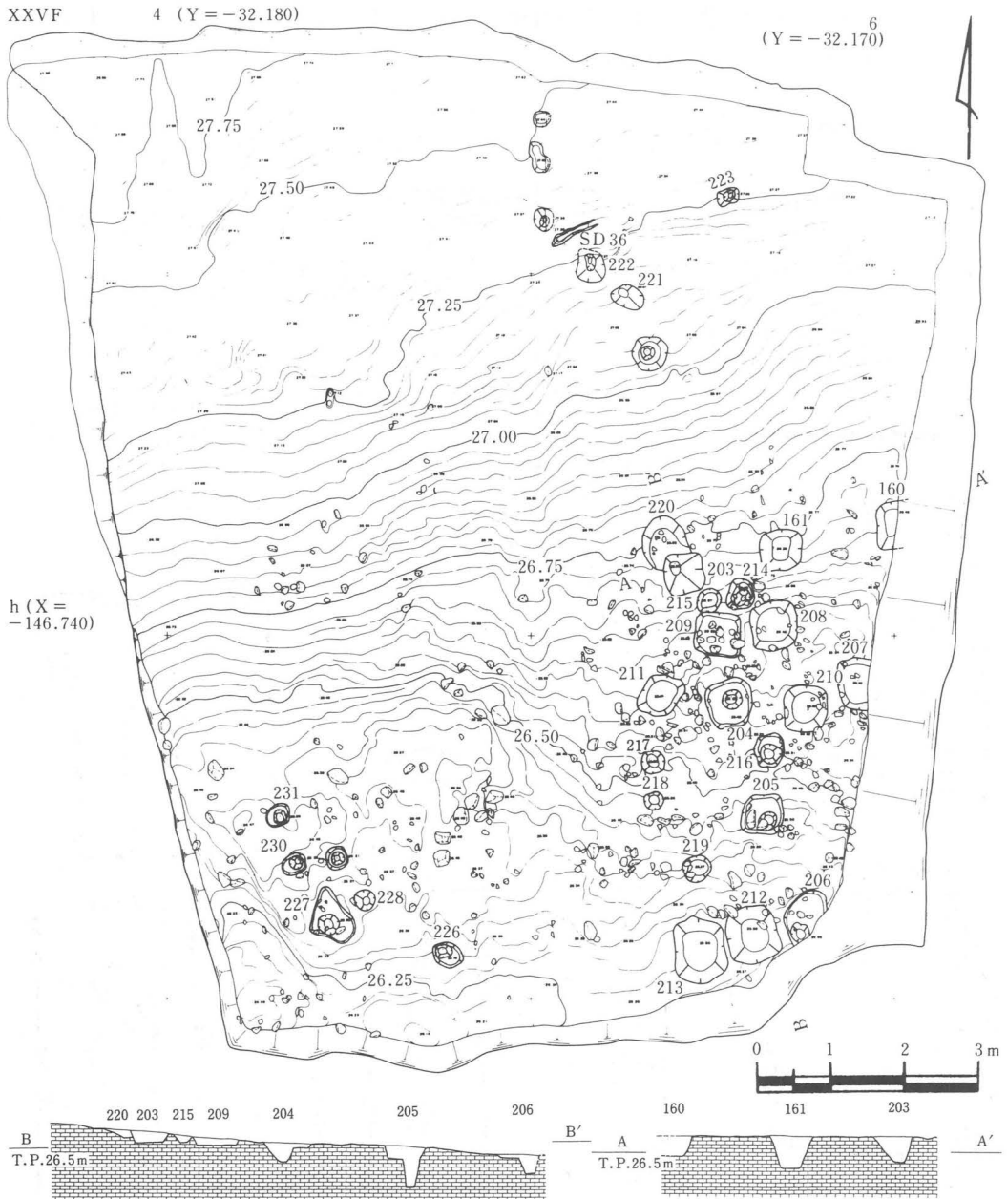
溝5条とピットを検出した。SD10～SD13はレベル差から北から南へ走る溝である。SD10は幅35～56cm、深さ11cm。SD11は幅32cm、深さ7cm。SD12は幅52cm、深さ11cm。SD13は幅1.84～1.94m、深さ10cm。瓦器椀(197・198)が出土。これらの溝群はD地区の南を流れる自然河川に伴うものである。SD26の周辺にある小ピットは杭穴状。XXVF6g区で検出したSP35は長径42cm、深さ27cmを測り、底面には扁平な礫を根石としている(図版十二)。



第34図 D地区中世遺構平面図

(2) 古墳時代の遺構 (第35図)

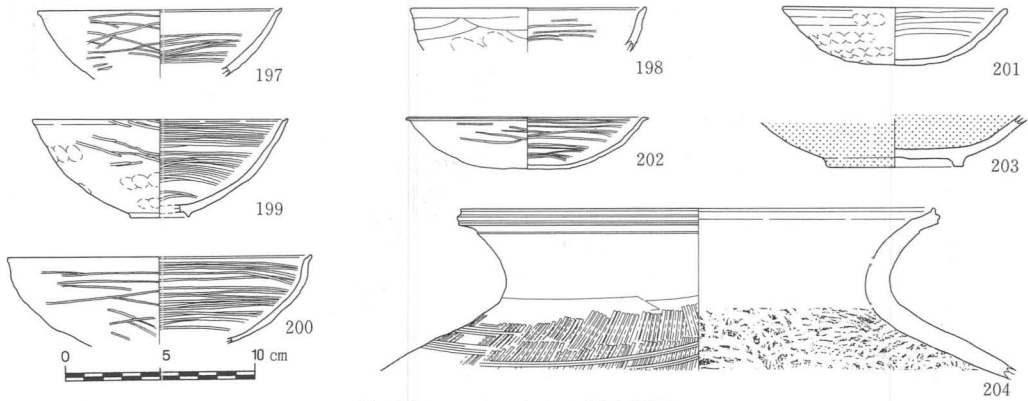
方形を呈する柱穴を検出した。とくに南東部 (XXV F 6 h・6 i 区) に集中。SP160—SP162—SP206 を結ぶラインに掘立柱建物の存在が予想される。SP160—SP161—SP162 のピッチは1.3m、SP162—SP204—SP205—SP206 のピッチは1.8m を測る。SP204 は隅丸の方形で柱掘形は68cm、柱痕跡は26cm、深さ26cm を測る。南東部の柱穴群は緩やかな斜面に立地している。遺構は上を被る包含層から古墳時代後期に措定される。



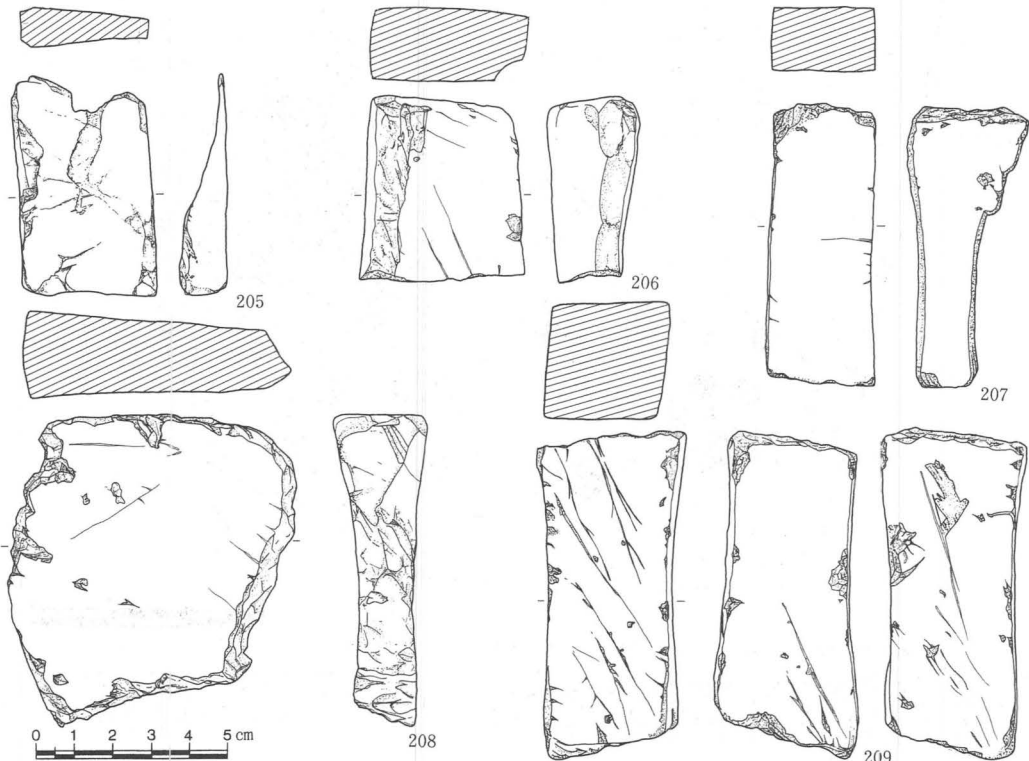
第35図 D地区古墳時代遺構平面図

(3) 出土遺物 (第36・37図)

中世期の遺構からは遺物がほとんど出土せず、わずかにS D13から出土した瓦器碗を2点図示したにとどまった(197・198)。197は体部上半の外面を粗くミガキ調整し、内面は緻密なミガキ調整を施している。神並遺跡瓦器型式分類でA 2-1に相当する。198はA 3に相当。199～203は第4層出土土器である。逆台形の高台をもつ黒色土器碗B類(203)から器変が低く体部内面のミガキ調整が粗い瓦器碗A 5類(202)までかなりの時間幅をもつ。古墳時代の包含層である第5 A層からは須恵器甕(204)、土師器竈(381)・羽釜(352)が出土した。また第4層からは砥石が2点出土している(205・207)。



第36図 D地区出土土器実測図



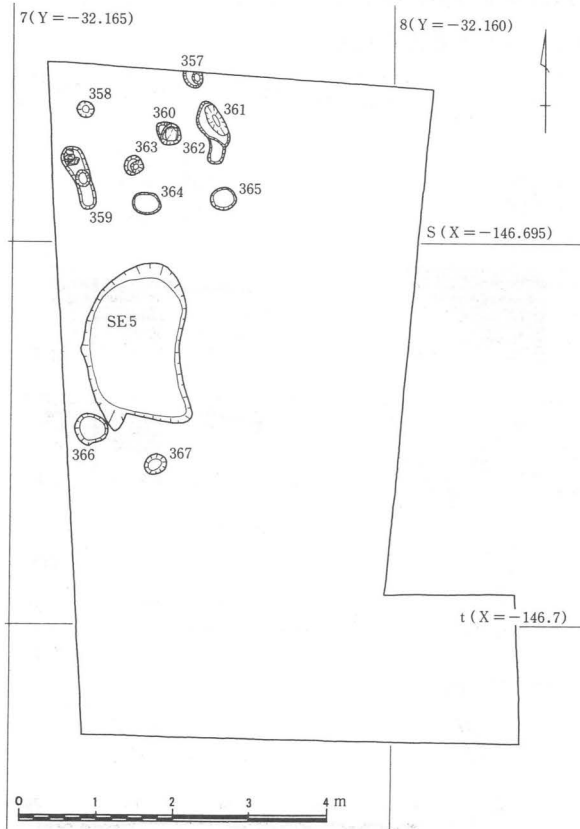
第37図 B・D地区出土砥石実測図

5) E地区の調査

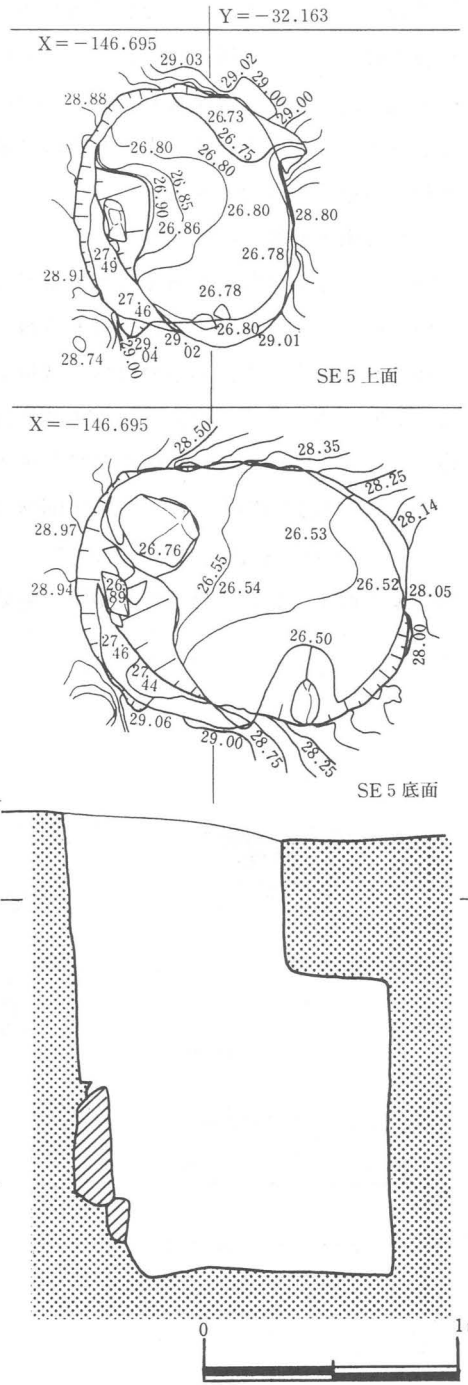
E・F地区は市道若宮東西線から石切劔箭神社に向かう通称石切参道の現道部分である。E地区では道路のアスファルト部分を機械で除去すると本遺跡の基盤層である黄褐色シルト質粘土が露出した。その上面で検出したのが、第38図に示した遺構である。これらは、A～D地区の調査成果から考えると、大きく古墳時代と中世期の2時期の遺構が重視していることになるため、遺物の検出は慎重を期して行った。その結果、ピット群、SE5を含め全て中世期の遺構に該当することが判明した。

SE5 (第39図)

遺構検出時の規模は長径2.1m、短径1.8mを測った(第39図上)が、その後遺構を掘削すると遺



第38図 E地区遺構平面図

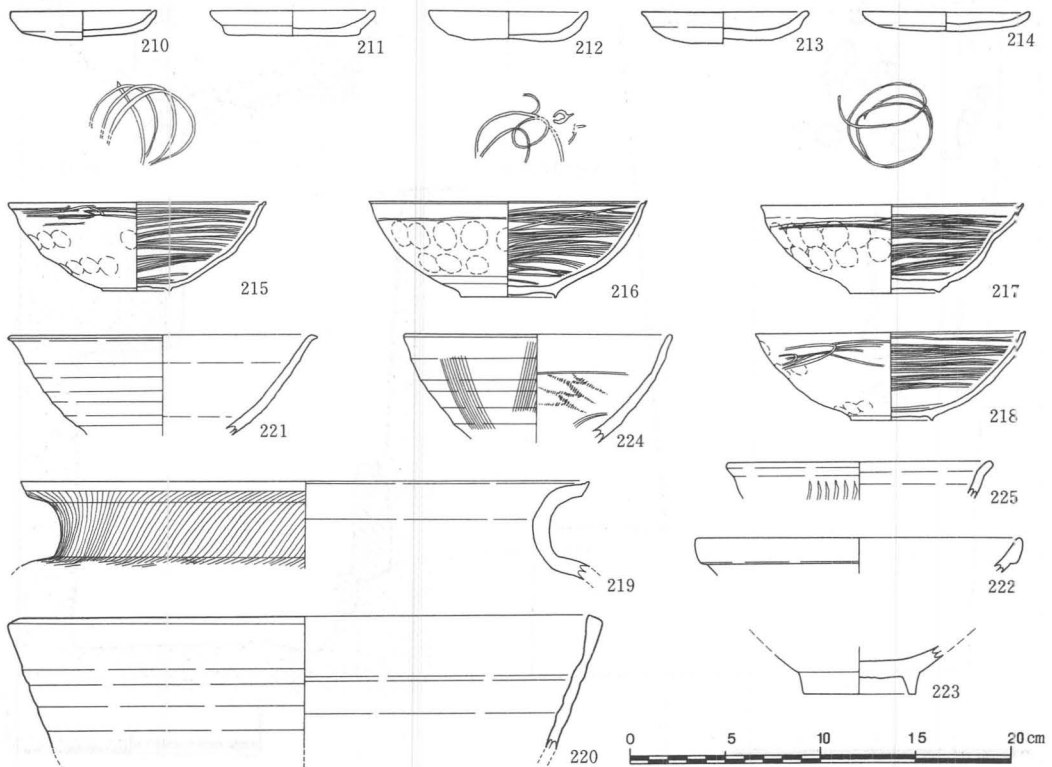


第39図 SE5実測図

構の中位面から下部にかけて袋状を呈することが判明した。下部での規模は長径2.7m、短径2.2mを測る。検出面から底面までの深さは3.7mであった。遺構内の土層は5層に分層できた。1層は2.5Y 3 / 3 オリーブ褐色粘質シルトに粗礫を含む層で層厚35cm。2層が10Y R 2 / 2 黒褐色砂質シルトに細礫を含む層で層厚20cm。3層は10Y R 3 / 3 暗褐色粘質シルトに細礫を含む層で層厚36cm。4層は10Y R 3 / 3 暗褐色粘土混り細粒砂。層厚23cm。5層は5 G 3 / 1 暗緑灰色砂混り粘土で層厚1.5m以上。土層の色調や土質の違いから、1～4層が井戸の埋土、5層が堆積土と考えられる。出土遺物は質量とも豊富で、土師器皿、瓦器椀、中国製白磁碗、青磁碗、須恵器捏鉢などがあった。

SE5出土土器 (第40図)

210～214は土師器皿である。出土量では211の平底で、口縁部と底部の境が厚く、突出する強い稜がつくタイプが最も多い。神並遺跡の土師器皿分類でb 5に相当。瓦器椀 (215～218) は大和型が主体を占め、和泉型は極く微量である。217は完形品で、口径14.1cm、器高4.7cmを測る。器壁が薄く、体部内面のミガキ調整はやや粗い。高台が低いのが特徴的である。瓦器椀分類A 3に相当。中国製輸入陶磁器は各種のものが出土している。森田、横田氏分類編年によると、221は白磁碗Ⅷ類一、222は白磁碗Ⅳ類、223は白磁碗Ⅴ類、224は同安窯系青磁碗Ⅰ類1-6、にそれぞれ相当すると思われる。224は体部外面に細かなクシ目を施すもの。以上の土器の編年観からSE5は13世紀中頃に廃絶したものと考えられる。



第40図 SE5出土遺物実測図

6) F地区の調査

E地区と同じく石切参道の現道部分である。機械による掘削でアスファルトや盛土を除去すると、やはり基盤層が現出した。東側は電気、水道、ガスの埋設管のため攪乱されていた。

検出した遺構は、溝、土坑、ピットである。(第41図)出土遺物から全て中世期に属すると考えられ、古墳時代の遺構は認められなかった。また各遺構内からの出土遺物は極微量で、かろうじて瓦器椀や土師器皿の細片を確認したのみであった。図示しうる資料はない。同様な状態であったE地区で検出したSE5の年代観からこれらの遺構は13世紀代に築かれたものと考えられる。

S K 45

不整な方形を呈する。長辺に1 m、短辺0.6 m、深さ11 cmを測る。

S D 68

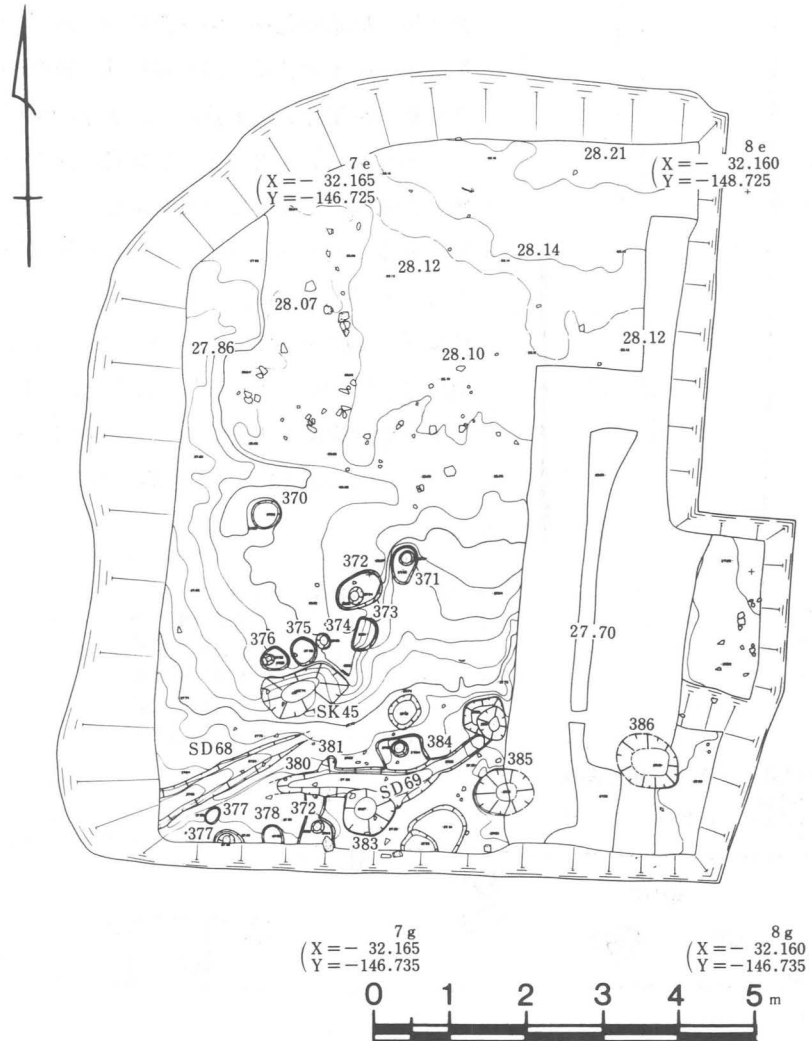
最大幅46 cm、深さ12 cmを測る。底面のレベル差から北東から南西に向かって流れていたものである。

S D 69

幅20~51 cm、深さ13 cm。北東から南西に向かい、後西へ流れていたと考えられる。

S P 372

楕円形を呈する。長径66 cm、短径46 cm、深さ15 cm。柱痕跡は21 cmを測る。



第41図 F地区遺構平面図

7) G地区の調査

G・H地区は、先年実施された近鉄東大阪線建設に伴う調査の掘り残し部分を対象として調査を実施した。調査は機械と人力を併用して行い、遺構の検出、遺物の取り上げにつとめた。近鉄東大阪線と北側に接した部分をG地区、南側をH地区とした。(第4図参照)

まずG地区の層位を確認しておきたい。

第0層 盛土。第1層 耕土。第2層 床土。

第3層 褐灰色粘土混り粗粒砂。層厚35cm。

第4層 極暗褐色粘土混り粗粒砂。層厚40cm。

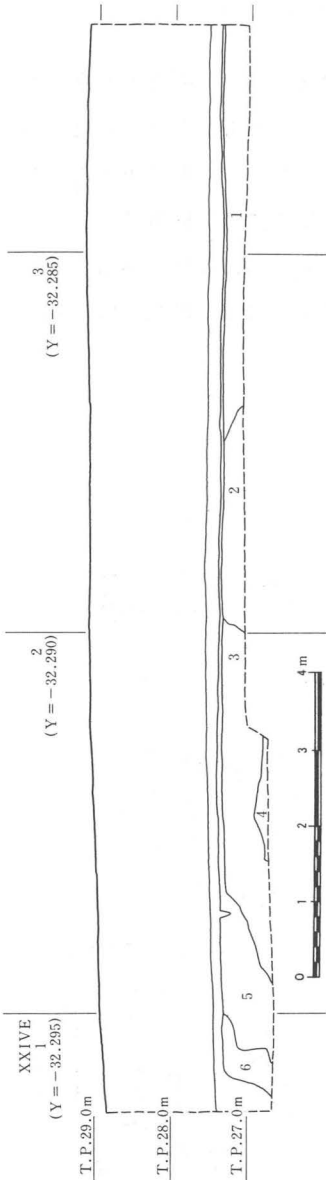
第5層 暗赤褐色粘土混り粗粒砂。層厚20cm。

第6層 暗褐色シルト質粘土。層厚30cm以上。

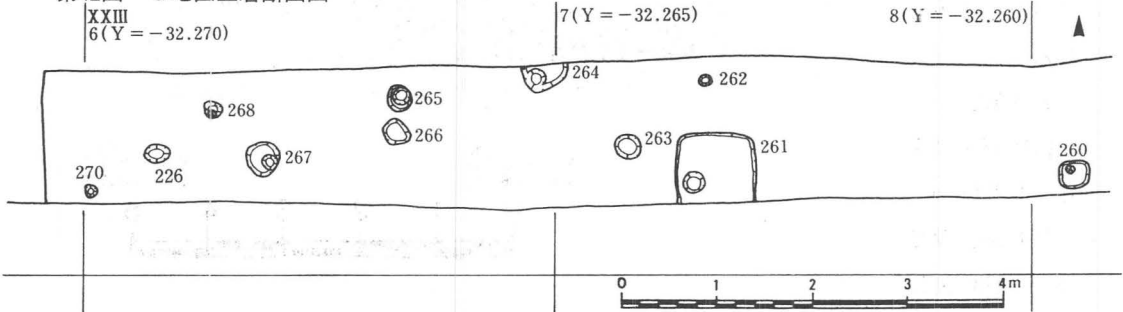
上記のうち、第4層～第5層は自然河川の堆積層である。第6層は各地区の基盤層である黄褐色シルト質粘土に対応し、地山層である。堅く締まっており、自然河川の影響で土色に変化したものと考えられる。

G地区のXXV E 6 S～8 S区ではピットを検出した。検出した地域は、第0層～第2層を除去すると、すぐ第6層が露出し、その上面で遺構が検出された。ピット内から出土した器細片から、S P 260、262～270が中世期、S P 261が古墳時代の所産と考えられる。

- | | | |
|----------------|-------|---------|
| 0. 盛土 | 1. 耕土 | 2. 床土 |
| 2. 7.5Y 4/3 | | 細礫混り中粒砂 |
| 3. 5 Y R 4/1 | | 粘土混り粗粒砂 |
| 4. 7.5 Y R 2/3 | | 粘土混り粗粒砂 |
| 5. 5 Y R 3/6 | | 粘土混り粗粒砂 |
| 6. 7.5 Y R 3/3 | | シルト質粘土 |



第42図 G地区土層断面図



第43図 G地区遺構平面図

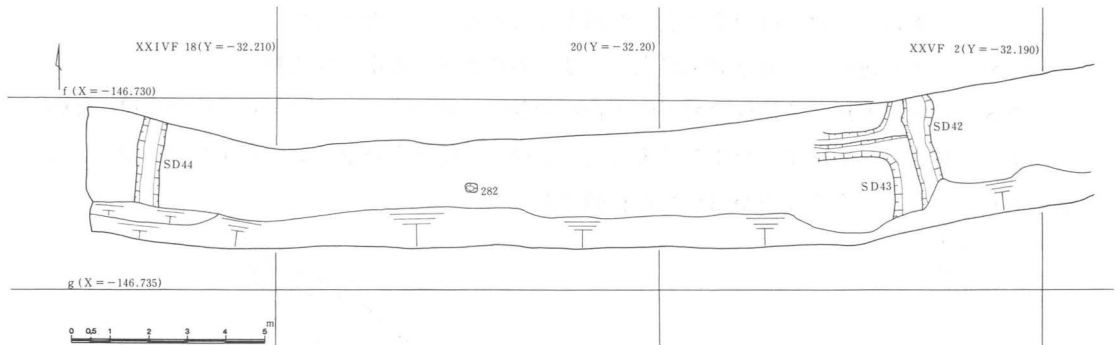
S D 267はほぼ正円形を呈し、規模は径32cm、深さ25cmを測る。柱痕跡は15cm。埋土は柱痕跡が暗灰色 (N 3 /) 粘土、柱掘形が第 6 層に暗灰色粘土 (N 3 /) が混じる土であった。S P 261は方形を呈し、現存長で長辺80cm、短辺72cm、深さ21cmを測る。柱痕跡は23cm。埋土は柱痕跡が褐灰色 (10Y R 4 / 1) 粘土、柱掘形が明黄褐色 (2.5Y 7 / 6) 砂混りシルトに褐灰色 (10Y R 4 / 1) 粘土が混じる土であった。

8) H地区の調査

先に述べたように、H地区が近鉄東大阪線の南に接する細長いトレンチであったために、D地区で検出した遺構面の広がりを確認することができた。そこで層位はD地区の層序を基本とし援用した。

遺構は、D地区第6層相当層上面で確認した。第6層のレベルは東端と西端とでは約0.5mの比高差があった。遺構は全て中世期の所産である。

S D 42は幅61cm、深さ14cmを測る。北から南へ流れる。埋土は灰オリーブ色 (7.5Y 4 / 2) シルト質細粒であった。第2次調査で検出したS D 73の延長部である。S D 43は平面でT字形を呈し、規模は幅70~85cm、深さ45cmを測る。断面V字形の深い溝である。北から南へと、東から西への流れとがある。西側の溝中央に幅5cmの畝状の高まりがあった。埋土はオリーブ褐色 (2.5Y 4 / 3) シルト質細粒砂である。S D 44は幅58cm、深さ6cmの浅い溝で、北から南への流れ。埋土はS D 43と同じであった。



第44図 H地区遺構平面図

9) I地区の調査

鬼虎川右岸、C地区の延長部をI地区とした。I地区は、調査着手前の状況では、C地区と同様、上段、下段の2枚の水田が造作されていた。C地区と比べると、上段、下段の境となる崖面が高く、かなり削平されていた。層位については、C地区のを基本層序とし、それを採用した。

第1層 耕土。第2層 床土。

第3層 オリーブ黒色細～中礫。層厚45cm以上。無遺物。近代以降の鬼虎川の旧河道に該当。上層は暗褐色粘土で、旧河道を平坦にするための客土。上・下層ともかなり脆弱で、湧水が激しいため、底面を確認したのち、すぐ埋め戻した。

第4層・第5層 未確認。削平されて遺存していないものと思われる。

第6層 暗灰黄色シルト質細粒砂。層厚46cm。中世期の遺物を含む。

第7層 未確認。

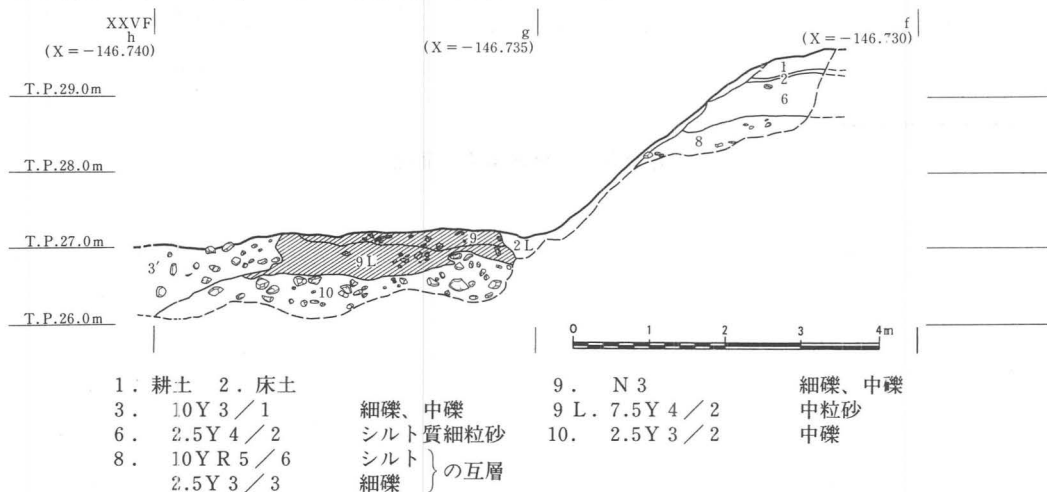
第8層 黄褐色シルトと暗オリーブ褐色細礫の互層。炭化物を多量に含む。層厚25cm。古墳時代～奈良時代の遺物を少量含む。上面は中世期の遺構面を形成。

第9層 暗灰色砂混粘土。層厚20cm。古墳時代後期の遺物包含層。ただし、C地区の第9層と比べると遺物の出土量は多くない。

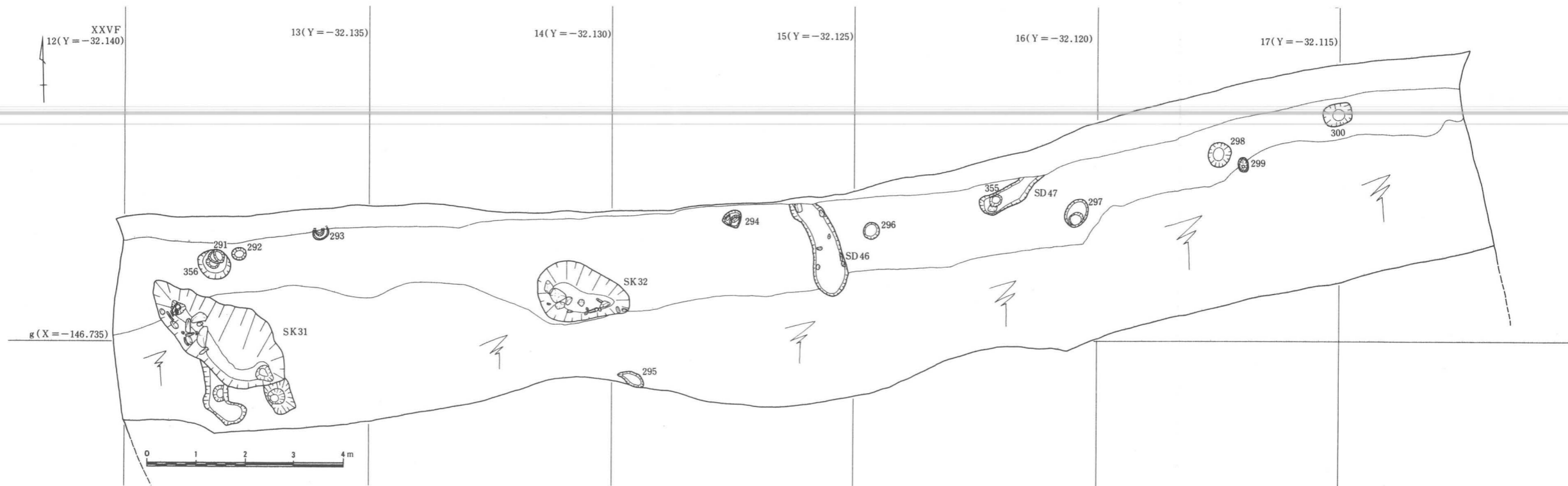
第9L層 灰オリーブ色中粒砂。層厚40cm。古墳時代後期の遺物を中量含む。第9層の基盤層になるが、層中より遺物が出土したため、9L層とした。

第10層 黒褐色中礫。層厚30cm以上。I地区の基盤層、地山。無遺物。

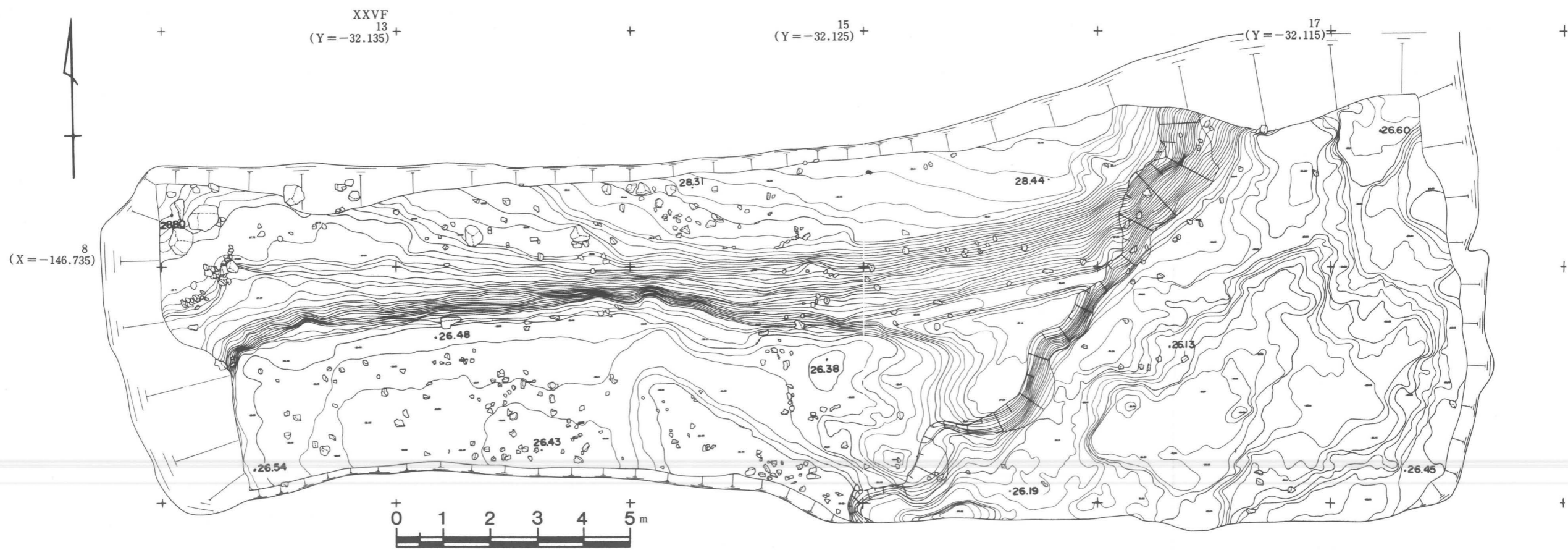
I地区はC地区と比べて後世の削平の度合いが大きく、第45図に示した土層については、XXV F16ライン付近のみで確認したにとどまった。上段、下段とも15ライン以西部では、第1、2層を掘り下げると、すぐ地山が露出する状態であった。



第45図 I地区土層断面図



第46図 I地区中世遺構平面図



第47図 I地区古墳時代自然河川平面図

(1) 中世の遺構 (第46図)

I 地区の上段部 (XXV F g ライン以北) で検出した。上段部の16ライン付近では、中世期の包含層 (第6層) が遺存し、遺構面が第8層であること、微量ながら瓦器碗片が遺構内から出土したことから中世期の遺構と判断した。出土遺物から大概13世紀代の所産と考えられた。

S K 31

I 地区西端 (XXV F 13 g 区) で検出。傾斜面につくられた土坑で、不定形を呈す。長辺3.37 m、短辺1.56 m、深さ30 cmを測る。埋土は6層に細礫を含む土層である。

S K 32

I 地区中央やや西寄り (XXV F 14 g・15 g 区) で検出。楕円形を呈する。長径2.47 m、短径1.59 m、深さ11 cmを測る。埋土はS K 31と同じ。

S D 46

I 地区中央部 (XXV F 15 g 区) で検出。幅60 cm、深さ20 cmを測る。

S D 47

I 地区中央やや東寄り (XXV F 16 g 区) で検出。幅43 cm、深さ13 cmを測る。S D 46、47ともレベル差から北から南へ流れていたものと思われる。埋土はS K 31と同じ。

(2) 自然河川 (第47図)

鬼虎川の旧河道部、北岸を検出した。第47図に示したように、この河川の遺構面はXXV F 16 g 区のみで認められるにすぎない。16 i 区西端でI地区に入り、南西から北東へ走る。C地区で検出した自然河川につながり、大きく蛇行していることがわかる。

(3) 古墳時代の遺物

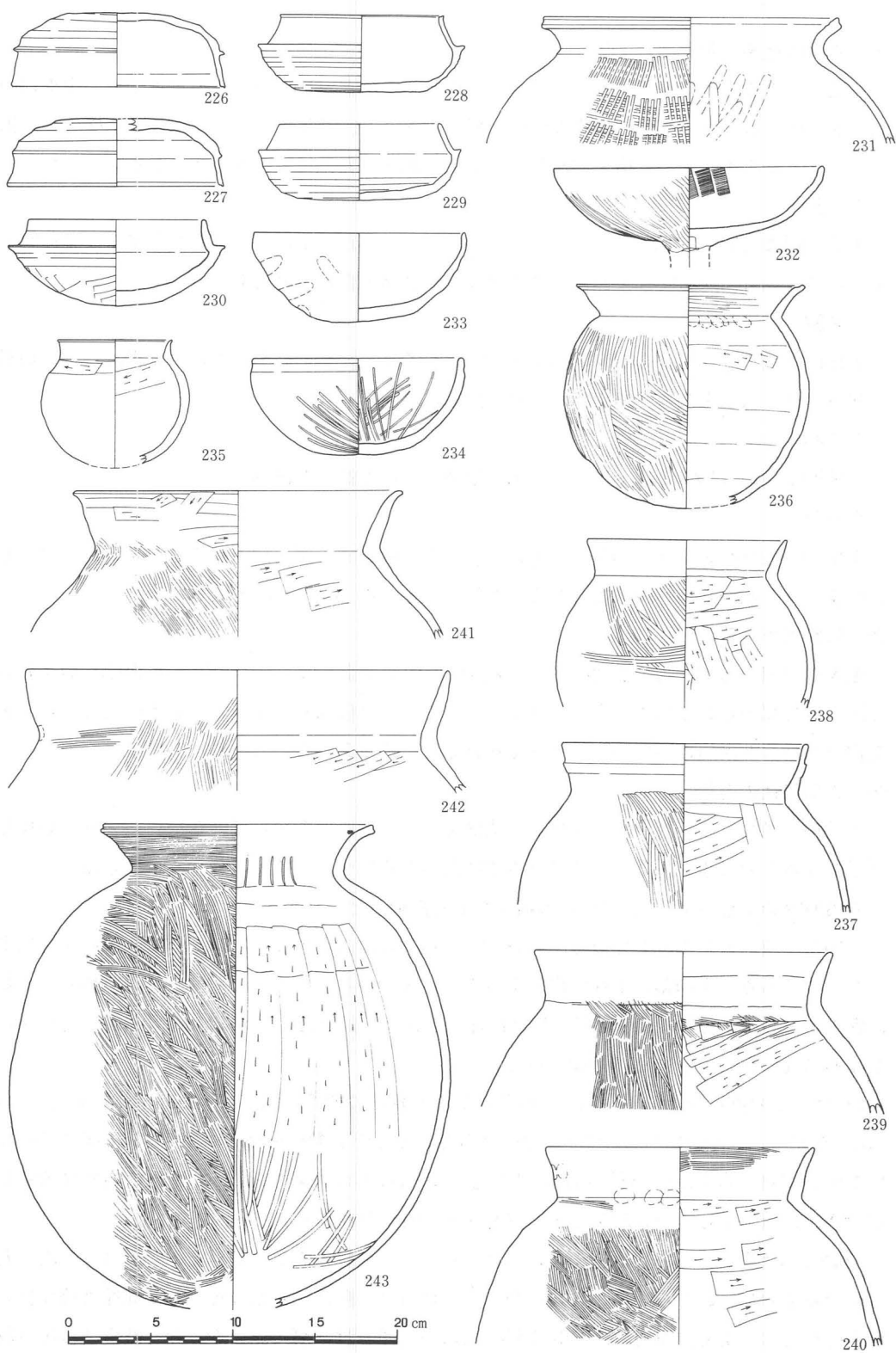
中世期の遺物は第8層上面で検出した遺構や包含層の中に含まれていたが、いずれも細片で、図示しうるものはなかった。ここでは古墳時代の遺物について述べていくことにしたい。

古墳時代の土器 (第48図。P.17の第12図も参照のこと)

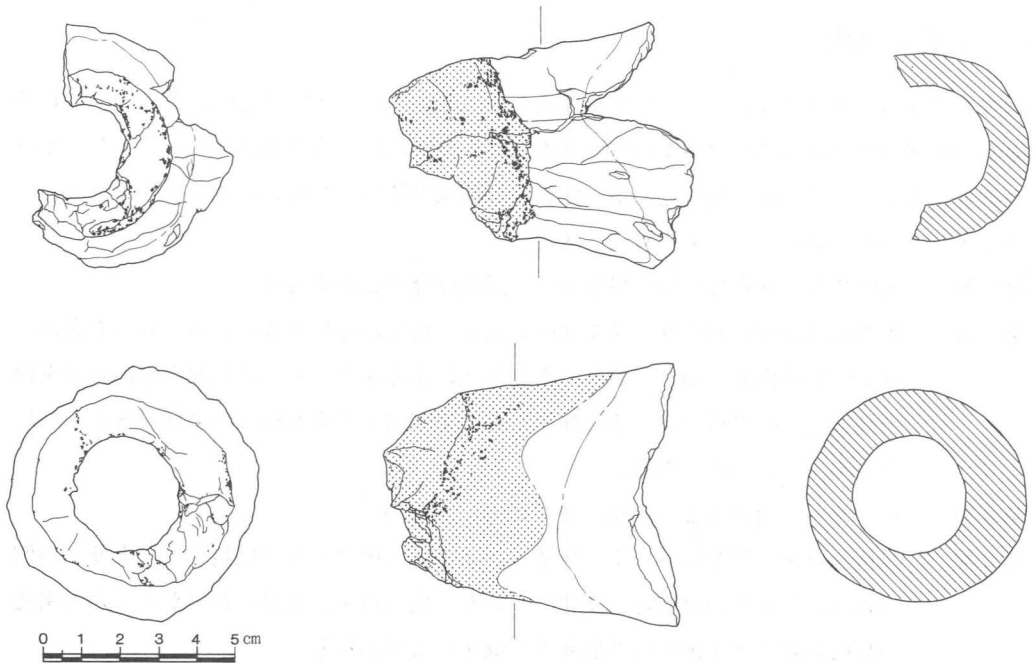
土師器、須恵器が出土している。第48図に図示したのはいずれも第9層、第9 L層から出土したものである。土師器はI地区出土土器の主体を占める。とくにC地区と比べて甕の出土量が顕著であった。そのため、口縁部片と体部片の接合を試みたが、243の甕を除いて、完形ないし完形に近く復元できたものはなかった。

235は小型の直口壺である。球形の体部に短く直線的に開く口頸部がつく。口径7.0 cm、器高7.6 cmを測る。233・234は鉢である。233は内外面ともナデ調整を施す。234は口縁部にていねいなナデ調整を施すため、浅い凹線がめぐる。232は高杯の杯部である。C地区の高杯杯部の分類でA、に該当する。口縁端部は強く内彎する。外面は粗いハケメ調整を施す。

236~243は甕である。口縁部先端の形態から2つに分けることができる。一方は、先端を丸く納めるもので、237~242がこれに該当する。他方は、断面が角頭形を呈し、先端外側に狭い面をもつものである。236、243が相当する。237は二重口縁の甕であるが、頸部外面には緩い段状の突起が認められるのみである。形態的には退化した形を示しているといえる。頸部と体部



第48図 I 地区古墳時代土器実測図



第49図 フィゴの羽口実測図

との接合時にへら状工具で内面を圈状にナデ調整するため、平滑面を形成している。また口縁部内面はていねいなナデ調整が施され、外面の段状突起の上面と下面とでは極端に器厚が異っている。236は小型の甕で、底部に二次的な穿孔がある。体部外面は粗いハケメ調整(4本/cm)が全面に施される。243は大型の甕である。浅黄橙色(10Y R 8/4)を呈し、胎土中に2~4mm大の長石を多量に含んでいる。焼成は不良。卵形の体部に短く外反する口頸部がつく。体部外面には細かなハケメ調整(7本/cm)が全面に施されている。土師器では、このほか甌や竈(図版四一の1, 372・373)が出土している。

須恵器は量的に少ない。226・227は蓋である。ともに天井部は扁平である。226は天井部の3/4を回転へらケズリ(時計回り)で調整する。口縁部とを分ける稜は鋭く突出している。228~230は杯である。228は底部が平坦な杯で、底部は回転へらケズリ調整のあと、回転ナデ調整でケズリ痕を消している。立ち上がりは1.9cmを測る。230の底部は受部先端から丸く仕上げられ、半球状を呈す。底部の丸味は土器の成形時から意識的になされたものと思われる。へらケズリ調整は回転でなく手持ちによる。231と370(図版四〇)は甕である。370は大型の甕で、口径24.0cm、器高42.0cmを測る。

製塩土器は第8層と第9層内から出土した。(P.17第12図-32, 34~37, 図版二〇-263)。才原氏の分類ではAタイプとDタイプとがみられた。器壁の厚い奈良時代の製塩土器は認められなかった。

甕の羽口が5点出土している(第48図、P.40第2表参照)。いずれも胎土中に長石、雲母、角閃石を含み、生駒西麓産であることを示している。

10) J地区の調査

調査着手前のJ地区は埋め立てられた荒蕪地となっていたが、2)で述べたように、昭和55年撮影の航空写真や地形図を参照すると、B地区とJ地区に跨って溜池が存在していた。そのため調査に先立ってその範囲を確定した。作業には機械を使用し、約5mまで掘り下げた。

第1層 盛土、耕土。 第2層 床土。

第3層 褐灰色シルト質細粒砂。層厚15cm。近代以降の遺物を含む。

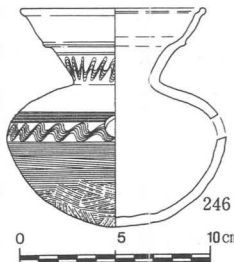
第4層 黄褐色粘土混り細粒砂。層厚20cm。近世～近代の遺物を含む、第4層の上面は、近現代の遺構面となっており、南北方向に走る溝を7条、調査地南端沿いに東西方向に走る暗渠状の溝1条を検出した。第50図の須恵器跡は暗渠状の溝(SD51)から出土したものである。

第5層 灰オリーブ色粘土混り細礫。層厚30cm。無遺物。

第6層 緑灰色粘土。層厚55cm以上。無遺物。J地区の中央では黄褐色粘土であり、西側に移るにしたがい緑灰色に変化していた。他の地区の土層の状況からこの黄褐色～緑灰色粘土がJ地区の基盤層を形成すると思われる。

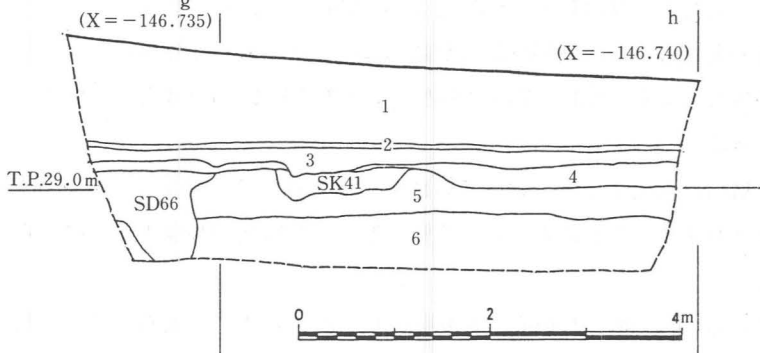
第5層上面で、沼地状の遺構2ヶ所と、足跡15個、小溝4条、土坑状の掘りこみ1ヶ所を検出した(第52図)。これらの遺構からは全く遺物が出土せず、時期については不確定な要素が多いが、B地区、C・I地区の調査結果からして、中世期に措定できるとと思われる。

沼地状遺構は、東西2ヶ所の遺構を確認した。西の沼地状遺構は、現存長で一辺8m以上、深さ77cmを測る。J地区の中央では階段状の落ちこみとなっていた。埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細礫であった。底面には拳大の礫が散布していたが、人為的な規則性は認められなかった。



第50図 S D 51出土線
XXVF
g

足跡は沼地状遺構以外の平坦面で検出された。長楕円形を呈す。最大は長径22cm、短径13cm、深さ7cm。最小は長径8cm、短径6cm、深さ4cm。



- | | | | |
|-------|------------|---------|----|
| 1. | 耕土 | 2. | 床土 |
| 3. | 10Y R 4/1 | シルト質細粒砂 | |
| 4. | 2.5 Y 5/3 | 粘土質細粒砂 | |
| 5. | 5 Y 4/2 | 粘土混り細礫 | |
| 6. | 10 G Y 6/1 | 粘土 | |
| SK41. | 2.5 Y 3/3 | 細礫 | |
| SD66. | 2.5 Y 3/3 | 細礫 | |

第51図 J地区土層断面図

XXVIF
4
(Y=-32.080)

6
(Y=-32.070)



第52图 J地区遗构平面图

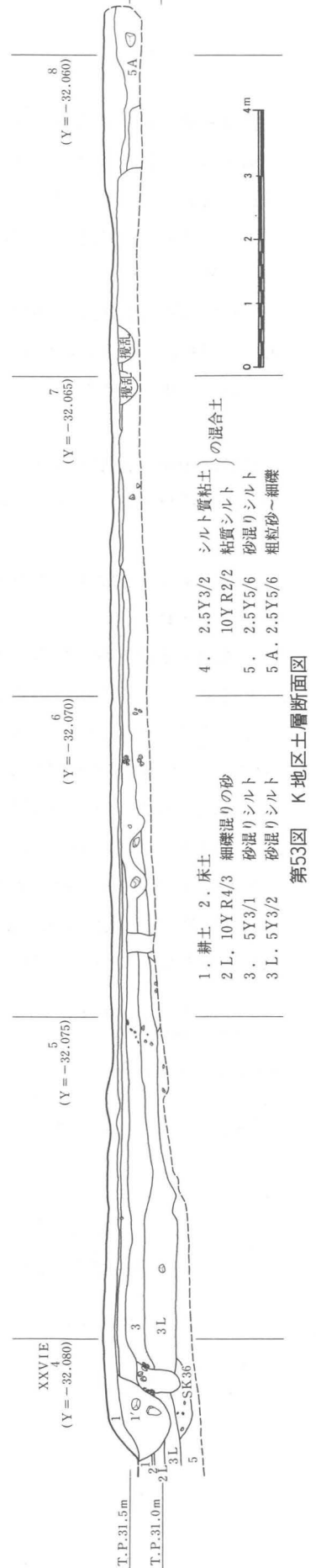
11) K地区の調査

K地区はA地区の東に隣接するトレンチである。調査以前は東西に2段の水田がみられた。層位は基本的にA地区のそれと大きく相違しないため、A地区を基本として、K地区の層位を述べていくことにする。

- 第1層 耕土。 第2層 床土。
- 第2 L層 にぶい黄褐色細礫混り中粒砂。層厚10cm。XXVI E 2 S～4 S区でのみ検出。古墳時代から近世までの遺物を少量含む。
- 第3層 オリーブ黒色砂質シルトに細礫が混じる層。炭化物微量に含む。層厚12cm。古墳時代～平安時代の遺物を中量含む。
- 第3 L層 オリーブ黒色砂混りシルト。層厚40cm。奈良～平安時代の遺物包含層。第3層下部に介在し、A地区ではみられないために第3 L層とした。
- 第4層 黒褐色シルト質粘土と黒褐色粘質シルトの混合土。K地区西端 (XXVI E 2 S～3 S区)、A地区との境界付近にのみ分布。層厚16cm。古墳時代後期の遺物包含層。なお、旧地形は南へ緩傾斜面をもち、第5層上面に層厚6cmの暗褐色砂混りシルトが堆積していた。ほぼK地区全域に分布し、層内から奈良～平安時代の遺物が少量出土したため、これを第4 A層とした。第4 A層上面は中世紀の遺構面を形成する。
- 第5層 黄褐色砂混りシルト。層厚30cm以上。K地区の基盤層、地山。無遺物。上面は奈良～平安時代の遺構面を形成。K地区東端 (XXVI 8 S区) で、黄褐色粗粒砂～細礫の層が、これを第5 A層として掘り下げたが、無遺物であった。

(I) 検出した遺構

K地区では、まず第4層上面で、径25cm前後、深さ22cm前後の柱穴を16個検出した。柱穴内からは無遺物であったが、基盤となる第4 A層の出土遺物の年代観からすれば、平安時代以降ということになるが、大概中世期の所産と考えておきたい。



奈良～平安時代の遺構（P.13～14 第8図）

第4 A層を掘り下げ後に検出された遺構である。遺構内からは遺物の出土が僅少であったが、奈良時代の土師器片が認められ、遺構面を覆う第4 A層の出土遺物から、これらの遺構の時期を奈良～平安時代に措定した。

S K 29

K地区西側（XXVI E 3 S区）で検出。調査区北側に続くが、不整な方形を呈すると考えられる。長辺1.24m、短辺1.16m、深さ31cmを測る。埋土は第3 L層に細礫が混じる土層であった。土坑内から獣骨片が出土。

S K 37

K地区中央（XXVI E 6 S区）で検出。中央が畝状に盛り上がる土坑である。平面は楕円形を呈す。規模は長径1.15m、短径1.06m、深さ16cmを測る。埋土は第3層である。

S P 311

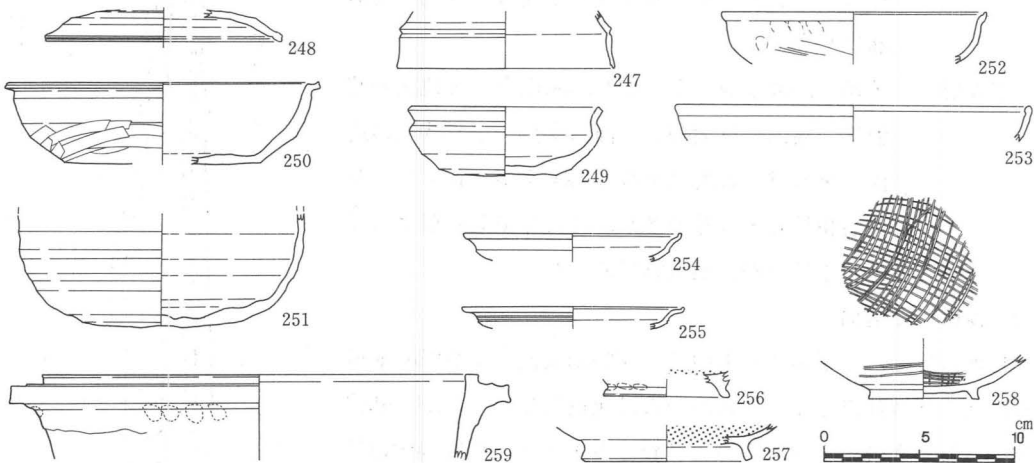
K地区中央（XXVI E 5 S区）で検出。楕円形を呈する。径70cm、深さ39cmを測る。

(2) 出土遺物

遺構内の土器が細片であったため、包含層内のものを図示した。257の黒色土器碗底部片が第4 A層出土で、その他は第3層または第3 L層出土土器である。

253～255は土師器の皿である。253は口縁端部を内方に肥厚させ、内側に弱い稜がつく。254～255は、口縁部が水平気味に外反（端部を内方に肥厚させる皿で、10～11世紀末に位置付けられるものである。259の土器羽釜は直立する口縁端部直下に鏝をめぐらすもので、菅原氏の土釜分類で摂津C 2型に該当する。奈良時代の杯(252)も第3層から出土している。

249・250は須恵器の杯である。249は内彎して屈曲する体部に短く外方に開くに縁部がつく。口縁部形態は、平城宮分類の壺Eや鉢Dは酷似する。平安時代前期に属すると思われる。250は深い碗形を呈している。口縁端部が外折して外側に稜をなす。



第54図 K地区出土土器実測図

12) L地区の調査

A地区北側、石切参道に面した箇所をL地区とした。層位は基本的にはA地区西側（下段）のそれに準拠したが、若干の異同がある。

第1層 耕土。 第2層 床土。

第3層 灰褐色粗粒砂混り細粒砂。層厚20cm。A地区では第2L層とした層である。近世の遺物を少量含む。

第4層 未確認。

第5A層 暗褐色粗粒砂～細礫。層厚15cm。無遺物。

第5層 極暗褐色シルト質粘土。層厚20cm。無遺物。

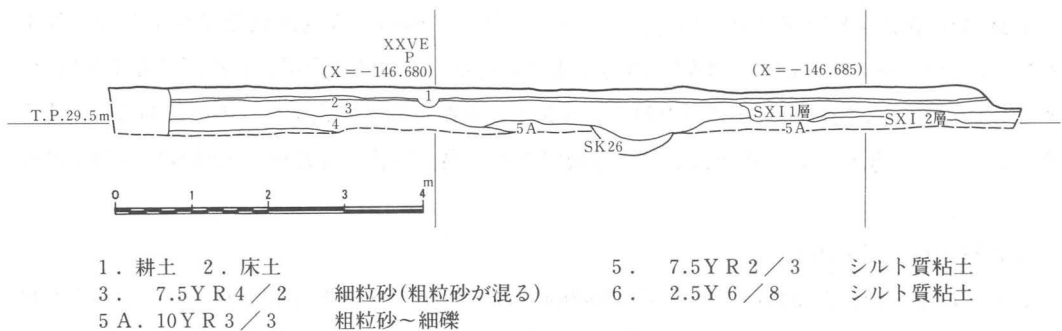
第6層 明黄褐色シルト質粘土。層厚5cm以上。K地区の基盤層、地山。

第5層と第5A層の上面は中世期の遺構面を形成する。5層、5A層ともに無遺物であったが、検出した遺構より瓦器碗の細片が出土しているため、それ以前の段階で堆積した層と考えられる。とりわけ第5層は縄文時代早期の集石土坑を検出した第11次調査地からみて、尾根の延長上にあたる箇所に堆積しており、かつ色調、土質とも同期の遺物包含層と酷似して、小ブロック的に青黒色（5PB2/1）粘土を含んでいたところから、掘り下げに際しては慎重を期し、精査を行ったが、無遺物であった。このことは、縄文時代早期の遺構の広がりを考える上で、重要なデータになるとと思われる。

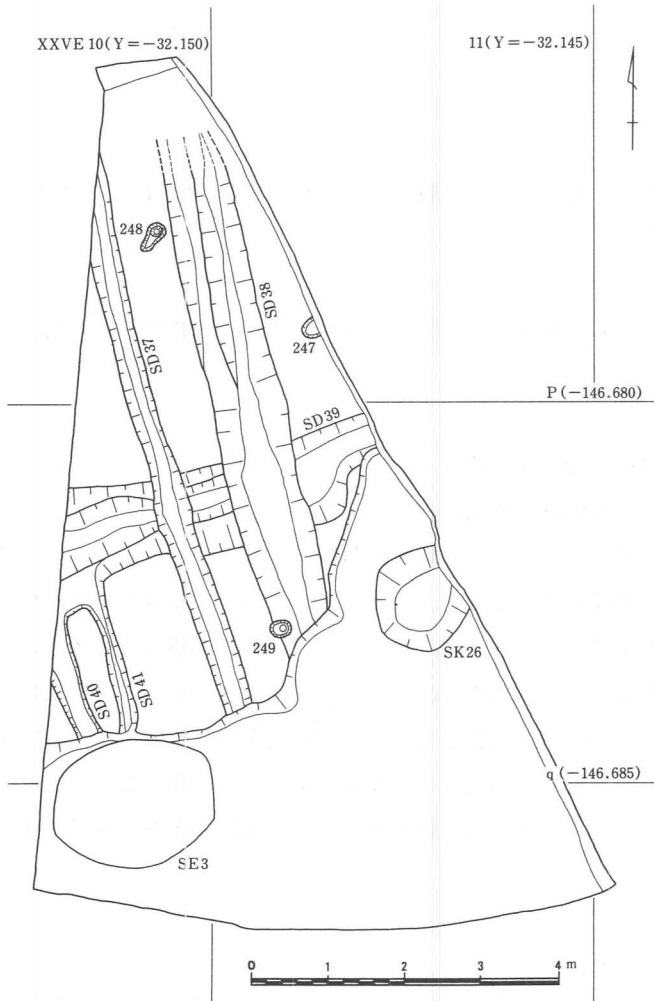
検出した遺構（第56・57図）

SE3

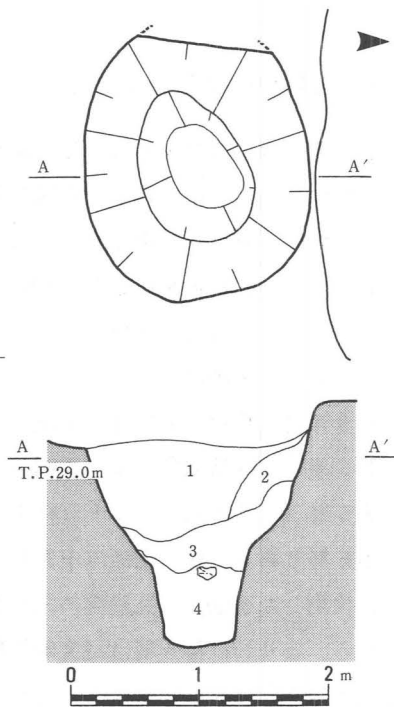
L地区南端（XXVE10q・10r区）で検出した井戸である。L地区の南側ではSX1の延長部がみられ、その底面で検出した。平面は楕円形を呈する。検出面での規模は、長径2.24m、短径1.76m、深さ1.87mであった。埋土は4層に分層できた。1層はオリーブ黒色粘土質細粒砂、2層はベースになる第5層の崩落土、3層は暗灰色砂質粘土、4層は暗灰色砂質粘土であった。井戸としては出土遺物は僅少で、瓦器碗の細片が出土したにとどまった。



第55図 L地区土層断面図



第56図 L地区遺構平面図



- 1. 5 Y 3 / 2 粘質細粒砂
- 2. 4層の崩壊土
- 3. N 3 砂質粘土
- 4. 5 B G 4 / 1 砂質粘土

第57図 SE 3実測図

SK 26

L地区中央やや東寄り (XXV E 11 q 区) で検出した土坑である。東端が未検出であるが、ほぼ円形を呈していたと思われる。検出面での規模は、現存長で長径1.40m、短径1.27m、深さ31cmを測る。埋土はオリーブ黒色 (5 Y 3 / 2) 粘土質シルトであった。出土遺物は皆無。

S X 1

L地区南半部 (XXV E 10 q · 11 q、10 S · 11 S 区) で検出。A地区西端で検出したSX 1 (P. 13~14 第8図参照) の北側への延長部にあたる。A地区で南岸、L地区で北岸を検出したことになり、総延長は長さ6.0mを測る。SX 1の東西方向への広がり是不明であるが、溝状を呈していたと思われる。埋土は2層に分層できた。出土遺物は瓦器椀、土師器皿の細片のみであった。

SD 37 · 38 · 39 · 40 · 41

SD 37は幅45cm、深さ25cm。SD 38は幅80cm、深さ21cm。SD 39は幅70cm、深さ14cmでSD 37、38と切り合う。SD 40は幅37cm、深さ9cm。SD 41は幅21cm、深さ9cmであった。

L地区では出土遺物が僅少で図化しえなかった。遺構の年代は大概A地区と同じと思われる。

IV. 神並遺跡・池島遺跡ほか出土白玉の化学分析

1) 中河内の滑石製模造品出土の遺跡

今回の化学分析では3遺跡4ヶ所（池島遺跡2ヶ所、佐堂遺跡・神並遺跡各1ヶ所）で出土した滑石製白玉の破片及び滑石の原石をもとに実施した。そこで分析報文に入る前に、これらの遺跡を中心とした中河内地区での滑石製模造品出土遺跡の概況について述べておきたい。

池島遺跡は、神並遺跡の南西約3.2kmの地点にある。東大阪市池島町、八尾市福万寺にまたがって所在し、縄文時代晩期から現代にいたる複合遺跡として知られている。大阪府の治水緑化事業に伴う発掘調査が1984年から現在まで継続して実施されている。調査主体は平成元年度まで大阪府教育委員会であったが、現在は財団法人大阪文化財センターが担当されている。昭和59年度の調査⁽¹⁾では、古墳時代後期遺構面の下部にあたる遺物包含層から子持勾玉2点、板状滑石製品132点、滑石製白玉約4000点、鉄製品7点と膨大な量の滑石製品が出土した。これらの製品が出土したトレンチの南約20mの地点でも、昭和61年度の調査⁽²⁾で、未製品を含む滑石製白玉が318点、玉の欠損品27点、その他の滑石製品20点が、古墳時代後期遺構面の直上の遺物包含層から出土し、その遺構面上で検出された溝603から滑石製白玉11点が確認された。分析報文中、「大阪府教育委員会で発掘した遺跡」とあるのは、この時の調査を指している。このように、池島遺跡で大量の滑石製品が出土し、未製品や鉄製品が併せて発見されているところから、池島遺跡が「滑石製模造品製作遺跡⁽³⁾」として注目されるようになった。これは、平成元年度の財団法人大阪文化財センターによる調査⁽⁴⁾で、滑石製模造品製作の工房址の可能性のある古墳時代後期の竪穴住居址が検出されたことから蓋然性はきわめて高い。

佐堂遺跡は、神並遺跡の西約8.5kmに位置する。東大阪市金岡から八尾市佐堂町に所在する縄文時代晩期から江戸時代にいたる複合遺跡である。遺跡は旧大和川の長瀬川が形成する



第58図 河内を中心とした玉作遺跡

自然提防上に立地する。近畿自動車道建設工事に伴って昭和56年から58年まで行われた調査⁽⁵⁾で、古墳時代前期（布留式併行）の土坑内から滑石の原石が5点出土した。土坑内からは、原石やその剥片以外の遺物は認められなかった。報文中の「佐堂遺跡の原石」はこれを指している。池島遺跡と同様、滑石製模造品製作遺跡の可能性がある。

さて、中河内地方の「玉作遺跡」といえば、水越遺跡（旧高安遺跡）が夙に著名であった。八尾市水越から千塚にかけて広がる遺跡で、弥生時代から鎌倉時代にわたる複合遺跡である。当地で考古遺物を採集、研究されていた故清原得巖師によって、玉作関係遺物が発見されている。師の報文⁽⁶⁾によれば、早く昭和5年秋に勾玉の筋砥石を発見され、以降、滑石製模造品をはじめ、瑪瑙・碧玉・滑石・石英の原石や、碧玉・滑石製の管玉未製品、砥石などを採集されている。さらに、昭和53年の大阪府教育委員会による調査⁽⁷⁾で、原石や滑石製の管玉未製品、有孔円板が出土し、水越遺跡は、中河内の玉作遺跡として大きな注目を浴びるところとなった。池島遺跡を含めた水越遺跡周辺の歴史的環境については、吉岡哲氏によって考察が加えられている。同氏は、水越遺跡の東約1.3kmに所在する、延喜式内社である玉祖神社との関連を説かれ、当地が「河内国高安郡玉祖郷」（『和名類聚抄』）にあたること、史料に散見される玉作関係氏族の分布から、玉作工人集団の動向など、多角的に論じられている。それらの点を踏まえると、水越遺跡周辺が、滑石製模造品を含めて、各種の石材による玉類を製作していた集落として、今後より多くの資料をもとにその歴史的評価を検討しなければならないと思われる。

いっぽう、神並遺跡では、滑石製模造品の欠損品は認められるものの、未製品、鉄製品や砥石などの製作道具は出土していない。その意味からいえば、いわば滑石製模造品の消費遺跡ということができ、自然河川内での出土状況から、祭祀行為に伴うものであると考えられる。従って、2)の分析報文の結果は興味深く、今後神並遺跡周辺で資料が増加すれば、より多くの問題点が明らかになっていくと思われる。

注(1) 阪田育功「遺構と遺物 Cトレンチ」（大阪府教育委員会『池島遺跡発掘調査概要Ⅰ』、1986年。）なお、滑石製模造品に関する用語は各報告書での表記に従った。

(2) 岸本道昭「86-4 調査区の調査結果」（大阪府教育委員会『池島遺跡発掘調査概要Ⅲ』、1988年。）

(3) 「滑石製模造品製作遺跡」「玉作遺跡」の区別については、寺村光晴『古代玉作形成史の研究』1980年、p.398を参照のこと。

(4) 江浦 洋・小野久隆・三宮昌弘「池島・福万寺遺跡 古墳～古代面1」（財団法人大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡発掘調査概要-89-1～6 調査区の概要-』1991年）

(5) 井藤暁子・阪田育功・森屋直樹「調査成果 古墳時代前期」（財団法人大阪文化財センター『佐堂(その2) -Ⅰ』、1984年。）

(6) 清原得巖「高安の遺跡と私」（『大阪文化誌』第2巻第2号、1976年。）なお、東大阪市教育委員会原田修より教示を得た。深く御礼申し上げます。

(7) 吉岡 哲「河内の玉作遺跡」（『紀要清友』第1号、1988年。）大阪府教育委員会の調査と水越遺跡については、吉岡氏並びに八尾市教育委員会米田敏幸氏よりご教示いただいた。記して深く御礼申し上げます。

2) 神並遺跡・池島遺跡ほか出土白玉の化学分析 (財団法人大阪文化財センター)

1 はじめに

池島遺跡より出土した小玉の化学分析は15個おこなった。池島遺跡に隣接する神並遺跡の小玉8個、佐堂遺跡の原石4個、大阪府教育委員会の発掘した遺跡より出土の原石4個もあわせて化学分析を行った。化学分析はEDSによる非破壊化学分析とX線回折試験による鉱物及び粘土鉱物の分析、電子顕微鏡による観察、実体顕微鏡による観察もあわせておこなった。

2 実験及び実験条件

化学分析は日本電子製JED-2001エネルギー分散型X線分析装置によっておこなった。実験条件は加速電圧：20KV 測定時間：200SECである。

X線回折試験は日本電子製JDX-8020X線回折システムによって行った。実験条件はTARGET：Cu, FILTER：Ni, Voltage：40KV, Current：30mA, ステップ角度：0.02計数時間：0.5SEである。

電子顕微鏡により観察及び写真は200倍の倍率で行った。

3 実験結果

第1表化学分析表には各サンプルの化学分析値が記載してある。第2表X線回折試験結果一覧表には佐堂遺跡の原石4個、大阪府教育委員会の原石4個、神並遺跡出土の神並-7の小玉の分析結果が記載してある。

第1図 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図と第2図 $\text{FeO}-\text{MgO}$ 図は化学分析に基づいて作成したものである。

これらの結果について以下に述べる。

〈X線回折試験による鉱物組成について〉

第2表X線回折結果一覧表に示すように佐堂遺跡の原石は佐堂-1、2、3の3個は明らかに緑泥石が多く検出され、他の鉱物が検出されないのが特長である。佐堂-4は角閃石と滑石が緑泥石とともに検出されている。このサンプルの組成及び化学分析の結果、肉眼的観察によると、このサンプルは御荷鋳帯の緑色岩的である。化学分析では SiO_2 は43%と少なく MgO 、 FeO に富む塩基性岩類と思われる。このようにみてくると佐堂-4は比較的変質の進んでいない緑色岩に近い組成を示しているものと推察される。佐堂-1、2、3の3個の角閃石が検出されておらず、佐堂-4と比較して緑泥石化が進んでいるものと判断される。

大阪府教育委員会のサンプルのうち、府教委-1、2は緑泥石と滑石が検出され、滑石の強度は非常に高く、滑石そのものに近いものと判断される。府教委-3は滑石だけ検出され、その強度も他と比較して非常に高く良質の滑石と判断される。府教委-4は緑泥石だけ検出され明らかに佐堂-1、2、3の組成と類似しているのが特徴である。

神並遺跡出土の小玉についてのX線回折試験は神並-7についてのみおこなった。神並-7

は府教委-3と同様に滑石だけが検出され、他の鉱物は検出されていない。このサンプルも良質の滑石で構成されているものと判断される。

〈化学分析について〉

第1図に示すように $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ の相関ではI~IIIの3つのグループが認められる。これらの3つのグループについてはX線回折試験で鉱物組成を把握しており、その結果に基づいて特徴を述べる。

(Iグループ)

このグループは SiO_2 は30%~50%、 Al_2O_3 は15%~25%の範囲にあるもので、佐堂-1, 2, 3, 4の4個はこのグループに属す。このグループの特徴は緑色岩系の原石で構成されることである。このグループに属するサンプルは肉眼的にも緑色をしているものが多い。組成的には府教委-4が佐堂のサンプルと似ていることはX線の項で述べたが、府教委-4もこのグループに属し、X線の結果ともよく対比される。このグループには池島遺跡のサンプルが10個含まれている。池島遺跡のサンプルは15個分析したもので、そのうち10個と言うことは60%以上に達する佐堂遺跡の原石と池島遺跡のサンプルとは一致し、明らかに、この原石を使用しているように見受けられる。また、神並遺跡の小玉もこのグループに属し、8個分の分析に対して4個が含まれ、50%に達している。これらも佐堂の原石と同じものとする、佐堂に原石の利用度は非常に高いものといえる。

このグループの鉱物的な特徴は緑泥石と滑石で構成されることであり、緑色岩のグループと言える。

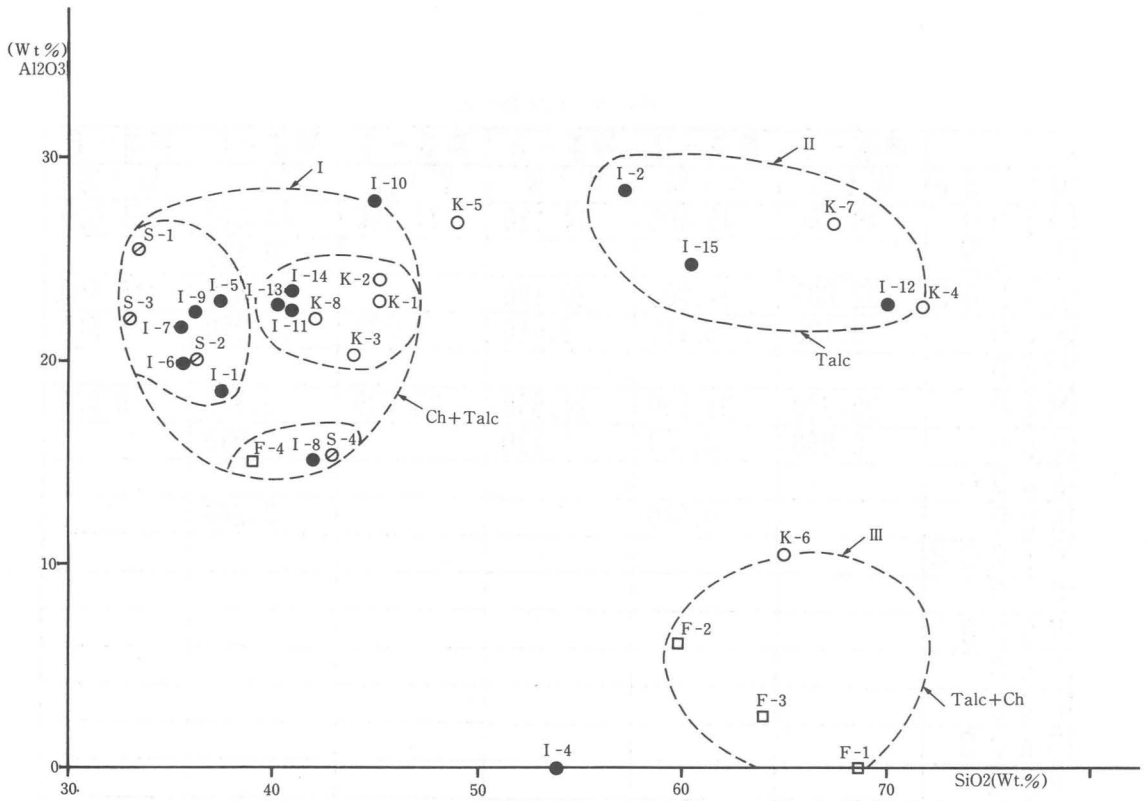
(IIグループ)

このグループは池島遺跡のサンプル3個と神並遺跡の小玉が共存する。 SiO_2 は50%~75%、 Al_2O_3 は22%~28%の範囲にあり、集中度はあまりよくない。神並-7はX線回折結果では滑石だけが検出されているもので、IIIグループの滑石のグループとは組成的に異なっているのが特徴である。このグループは明らかに Al_2O_3 の含有量が高く、IIIグループとは原石が異なっているように見受けられる。このグループは滑石で特徴付けられる。

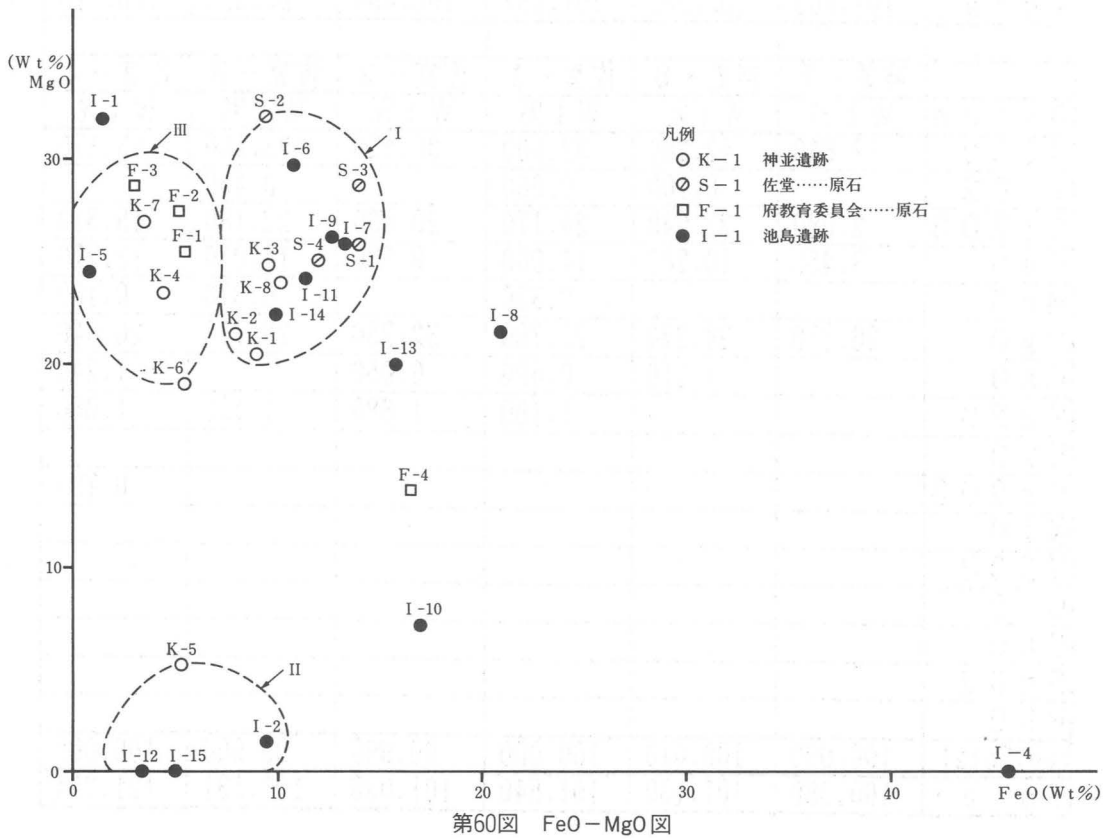
(IIIグループ)

このグループは府教委-1, 2, 3の3個と神並-6で構成される。個体数は4個と少なく集中度もあまりよくない。 SiO_2 は60%~70%、 Al_2O_3 は0%~10%の範囲にある。このグループには府教委-1, 2, 3の3個が属し、X線回折試験では滑石の強度が非常に高く、緑泥石を少量含むのが特徴である。このグループは府教委の原石で特徴付けられる。

このような関係は第2図 $\text{FeO} - \text{MgO}$ 図においても認められるもので、主要元素ではないために若干ばらつきがあり、まったく同じグルーピングとは言えないがその大まかな傾向は一致している。



第59図 SiO₂-Al₂O₃ 図



第60図 FeO-MgO 図

第4表 化学分析表

	神並-1	神並-2	神並-3	神並-4	神並-5	神並-6
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
SiO ₂	46.560	45.460	44.130	71.840	49.010	65.020
TiO ₂					0.320	
Al ₂ O ₃	22.800	24.000	20.190		26.810	10.490
FeO	9.120	8.110	9.610	4.530	11.950	5.500
MnO						
MgO	20.640	21.550	24.850	23.630	5.330	19.000
CaO	0.880	0.850	1.220		0.940	
Na ₂ O						
K ₂ O		0.040			0.280	
Cr ₂ O ₃						
NiO						
V ₂ O ₃						
CoO						
CuO						
SnO ₂						
PbO						
FeO:Total	100.000	100.010	100.000	100.000	94.640	100.010
Total	101.003	100.902	101.057	100.498	95.955	100.615
	神並-7	神並-8	佐堂-1	佐堂-2	佐堂-3	佐堂-4
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
SiO ₂	67.640	42.280	33.500	36.420	33.150	43.170
TiO ₂		0.100	0.660		0.450	
Al ₂ O ₃	2.080	22.040	24.170	20.060	22.180	15.310
FeO	3.450	10.260	14.000	9.530	14.010	12.220
MnO			0.320		0.370	0.180
MgO	26.830	24.220	25.760	32.250	28.710	26.040
CaO		1.110	0.490	0.050		1.240
Na ₂ O			1.100	1.680	1.120	1.060
K ₂ O						
Cr ₂ O ₃						0.780
NiO						
V ₂ O ₃						
CoO						
CuO						
SnO ₂						
PbO						
FeO:Total	100.000	100.010	100.000	99.990	99.990	100.000
Total	100.380	101.139	101.540	101.038	101.531	101.344

第4表 化学分析表

	府教委-1	府教委-2	府教委-3	府教委-4	池島-1	池島-2
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
SiO ₂	68.850	59.770	64.220	38.990	37.470	57.240
TiO ₂		0.010		0.290	0.320	0.960
Al ₂ O ₃		6.080	2.250	15.660	18.590	28.480
FeO	5.600	5.290	3.250	9.880	7.910	9.450
MnO						
MgO	25.550	27.440	28.810	13.720	31.720	1.540
CaO		0.060		0.350	0.750	0.370
Na ₂ O		1.340	1.470	2.130	1.470	0.780
K ₂ O		0.010				1.180
Cr ₂ O ₃						
NiO						
V ₂ O ₃						
CoO						
CuO						
SnO ₂						
PbO						
FeO:Total	100.000	100.000	100.000	81.020	98.230	100.000
Total	100.616	100.582	100.358	82.107	99.100	101.040
	池島-3	池島-4	池島-5	池島-6	池島-7	池島-8
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
SiO ₂		53.800	37.790	36.340	35.700	42.000
TiO ₂			0.760	0.540	0.620	
Al ₂ O ₃			23.210	19.950	21.760	15.120
FeO		46.200	11.630	10.960	13.520	20.840
MnO			0.140	0.220		
MgO			24.620	29.950	25.910	21.660
CaO			0.590	0.360	0.500	
Na ₂ O			0.560	1.120	1.380	
K ₂ O					0.070	
Cr ₂ O ₃						
NiO						
V ₂ O ₃						
CoO						
CuO			0.700	0.570	0.530	0.380
SnO ₂						
PbO						
FeO:Total	0.000	100.000	100.000	100.010	99.990	100.000
Total	0.000	105.082	101.279	101.216	101.477	102.292

第4表 化学分析表

	池島-9	池島-10	池島-11	池島-12	池島-13	池島-14
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
SiO ₂	36.410	45.090	41.030	70.370	40.690	40.770
TiO ₂	0.370	0.960	0.100	0.150	0.060	0.980
Al ₂ O ₃	22.450	27.800	22.590	22.870	22.850	23.520
FeO	12.920	16.960	11.440	3.510	15.980	11.340
MnO	0.090					
MgO	26.340	7.200	24.340		19.930	22.510
CaO	0.300	0.470		0.260		0.590
Na ₂ O	0.570					0.210
K ₂ O		0.730		2.840		0.070
Cr ₂ O ₃						
NiO						
V ₂ O ₃						
CoO						
CuO	0.540	0.780	0.510		0.490	
SnO ₂						
PbO						
FeO:Total	99.990	99.990	100.010	100.000	100.000	99.990
Total	101.411	101.856	101.268	100.386	101.758	101.237
	池島-15					
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
SiO ₂	60.770					
TiO ₂						
Al ₂ O ₃	24.740					
FeO	5.020					
MnO						
MgO						
CaO	8.960					
Na ₂ O						
K ₂ O						
Cr ₂ O ₃						
NiO						
V ₂ O ₃						
CoO						
CuO	0.510					
SnO ₂						
PbO						
FeO:Total	100.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
Total	100.552	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

第5表 X線回折試験結果一覧表

サンプル番号	MONT 5.8	Fe-Ch 6.2	Mica 8.8	Talc 9.4	Hb 10.4	Mg-Ch 12.4	An 29.8	Hy 30.9	Qt 26.6	K-fels 27.4	Pl 27.8		備考
佐堂-1		2870				8066							
2		3840				9202							
3		4759				12989							
4		3118		780	939	9129							
府教委-1		509		14829		1385							
2		492		15219		1186							
3				26166									
4		1832				5728							
神並-7				11050									

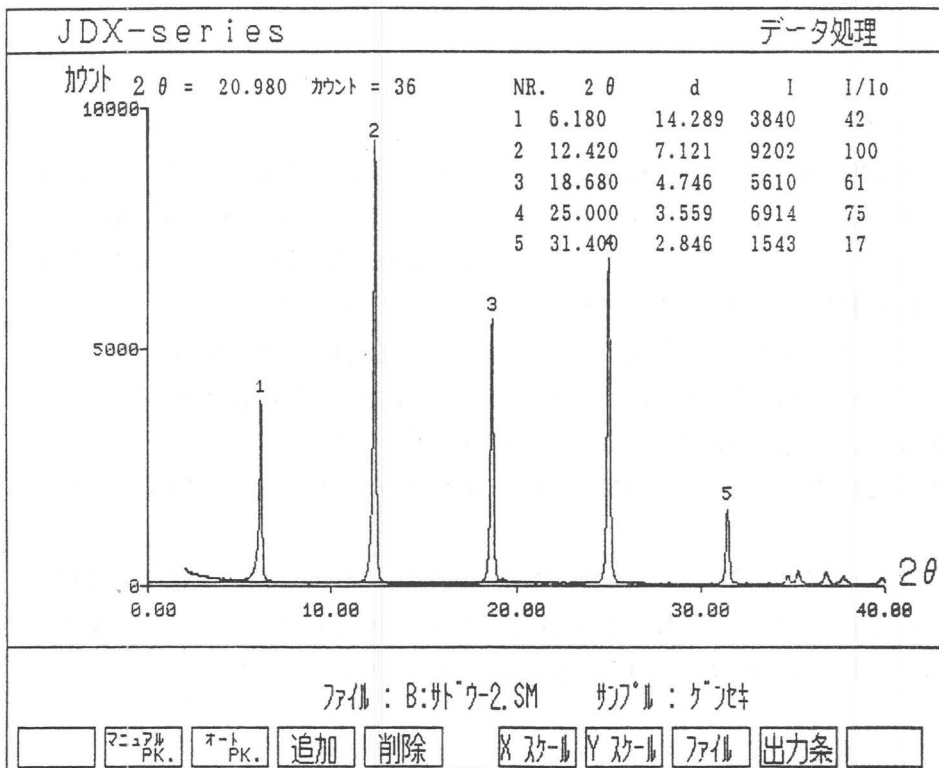
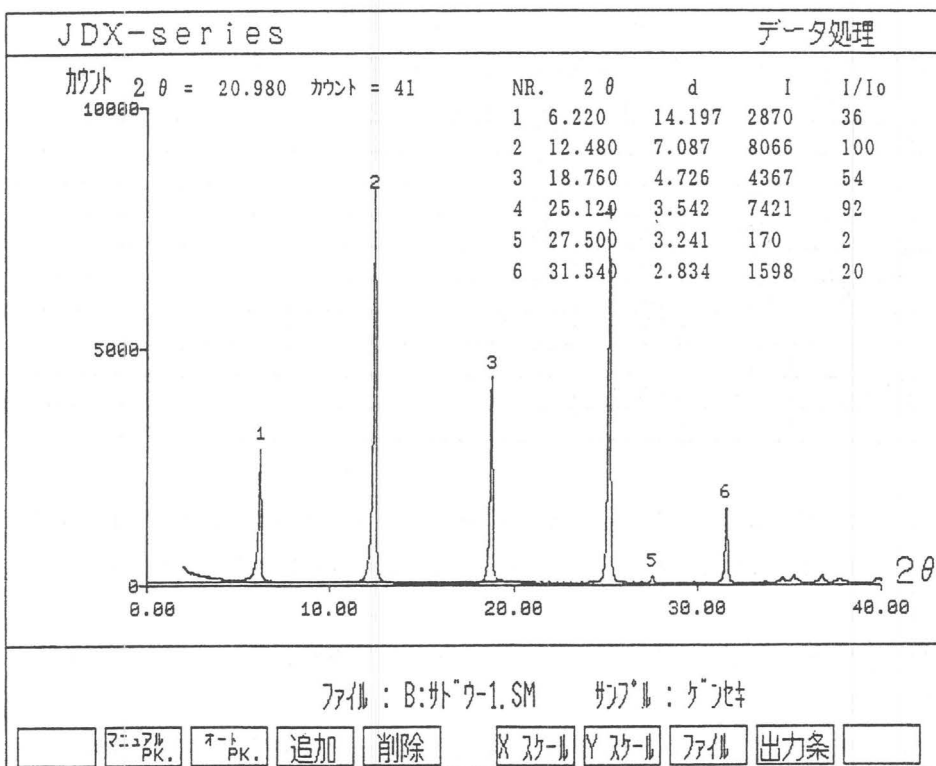
このようにみてくると、Iグループは池島遺跡のサンプル及び神並遺跡の小玉で構成され、佐堂遺跡の原石と共存することから推察して、佐堂遺跡の緑色岩が小玉の大勢を占めているものと思われる。

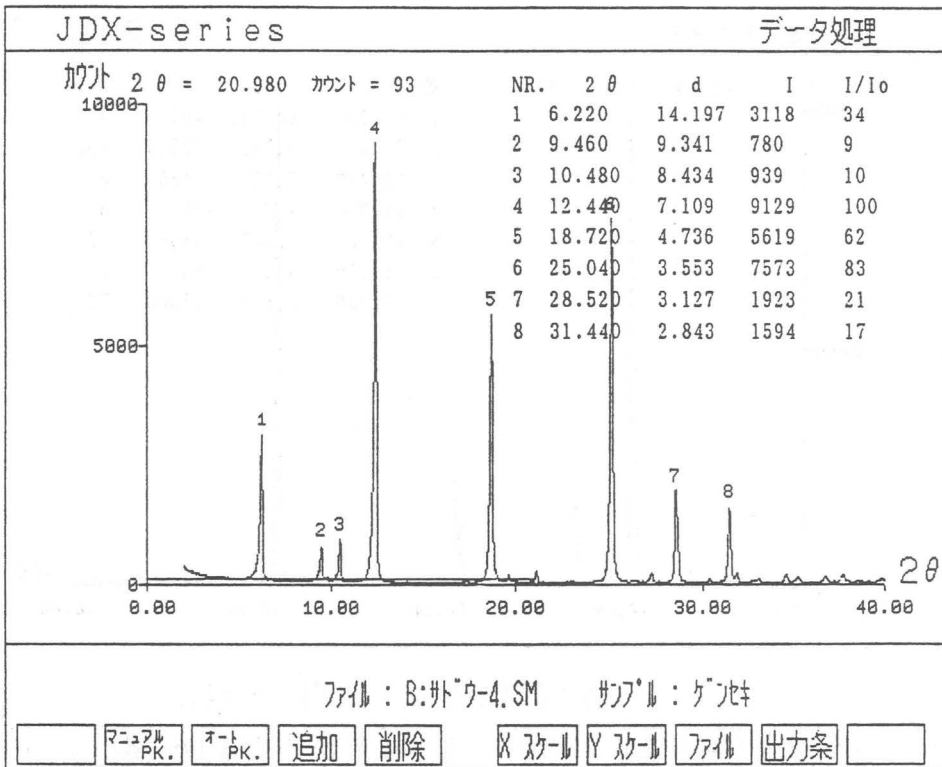
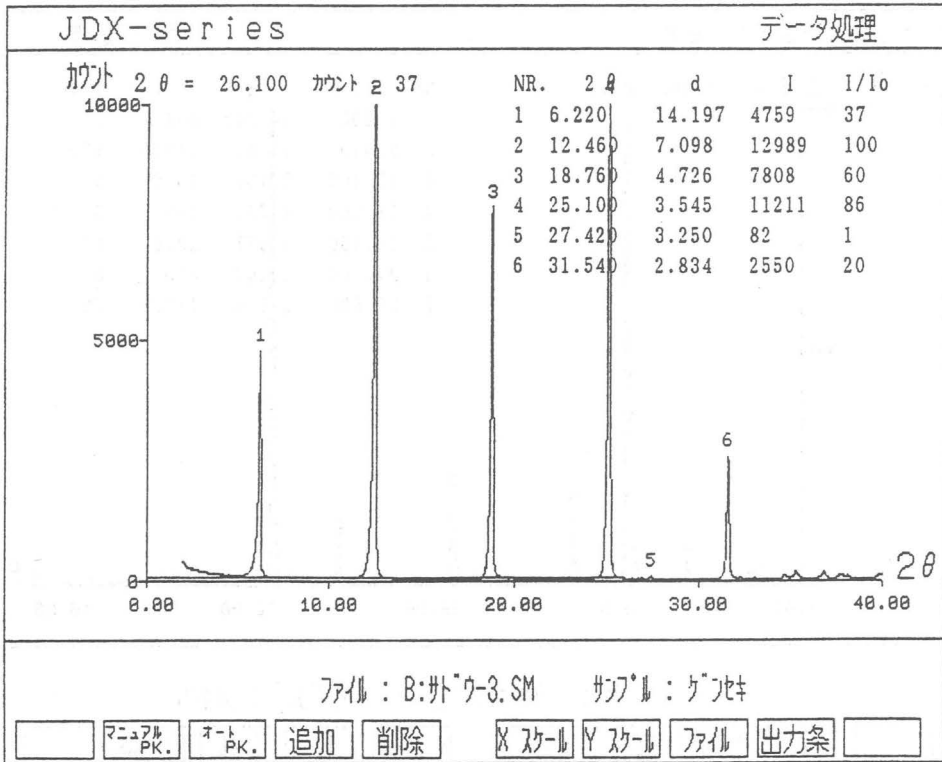
IIグループは神並-7で代表されるように、滑石だけで構成されるグループで、良質の滑石が特徴である。

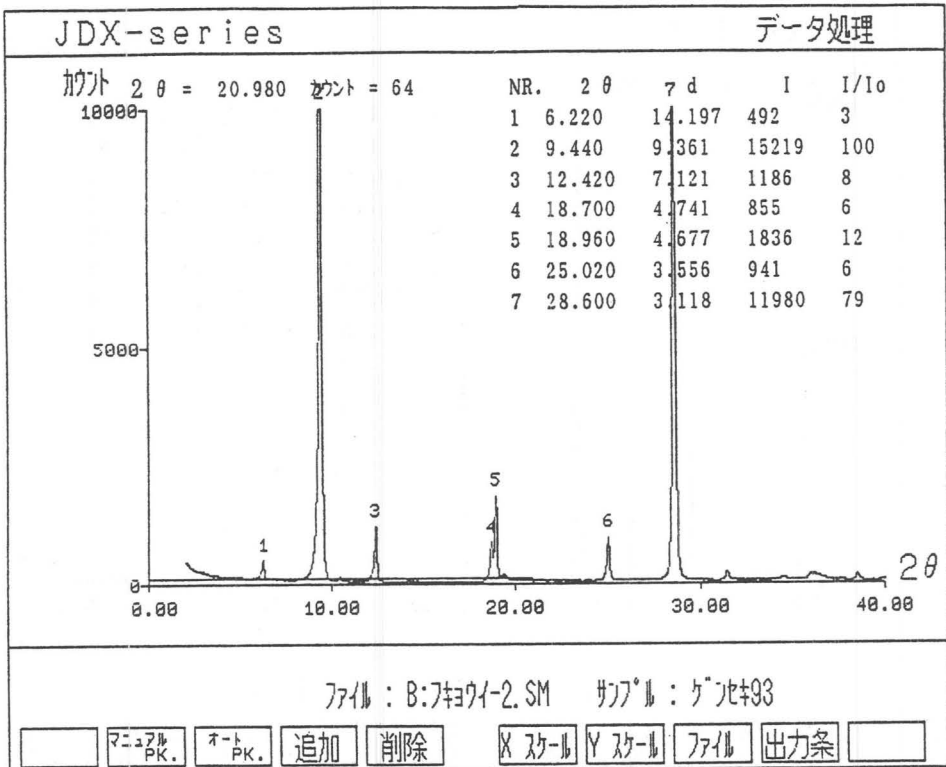
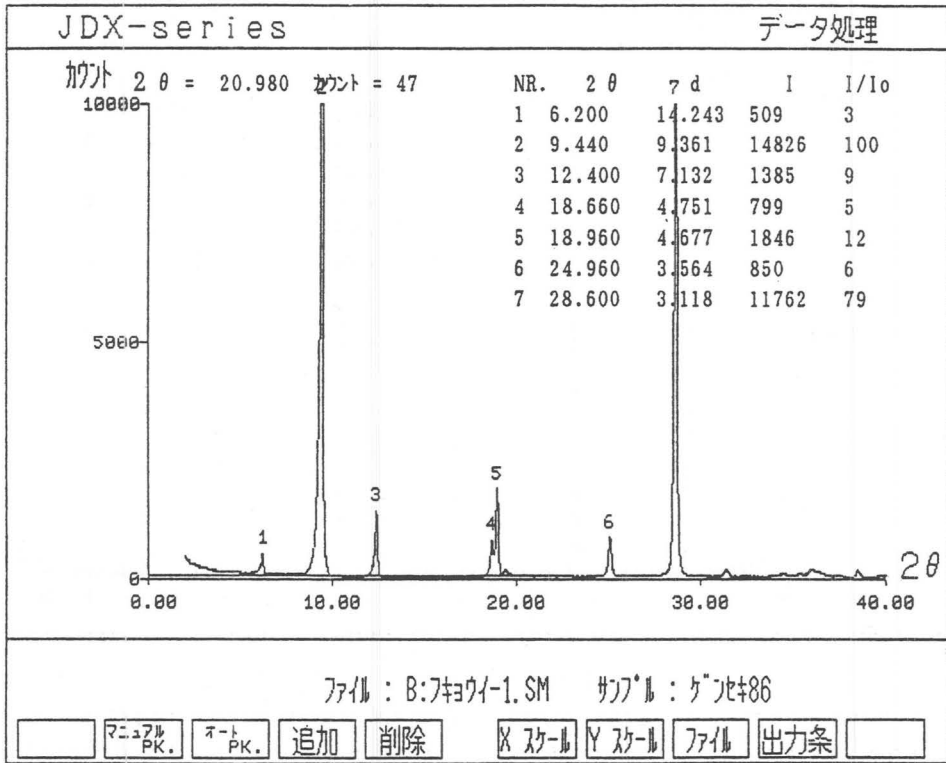
IIIグループは府教委の原石で制作され、滑石を主体とし、緑泥石と共存するグループとして特徴付けられる。この原石で制作されているものは神並-6だけであり、少数派と言えるようである。

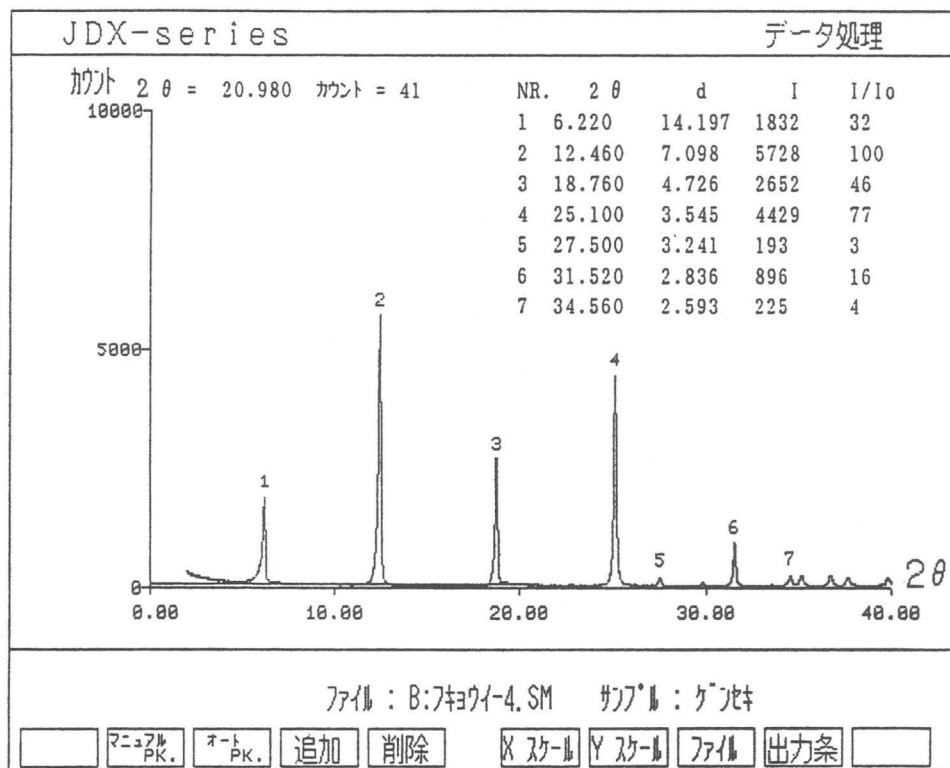
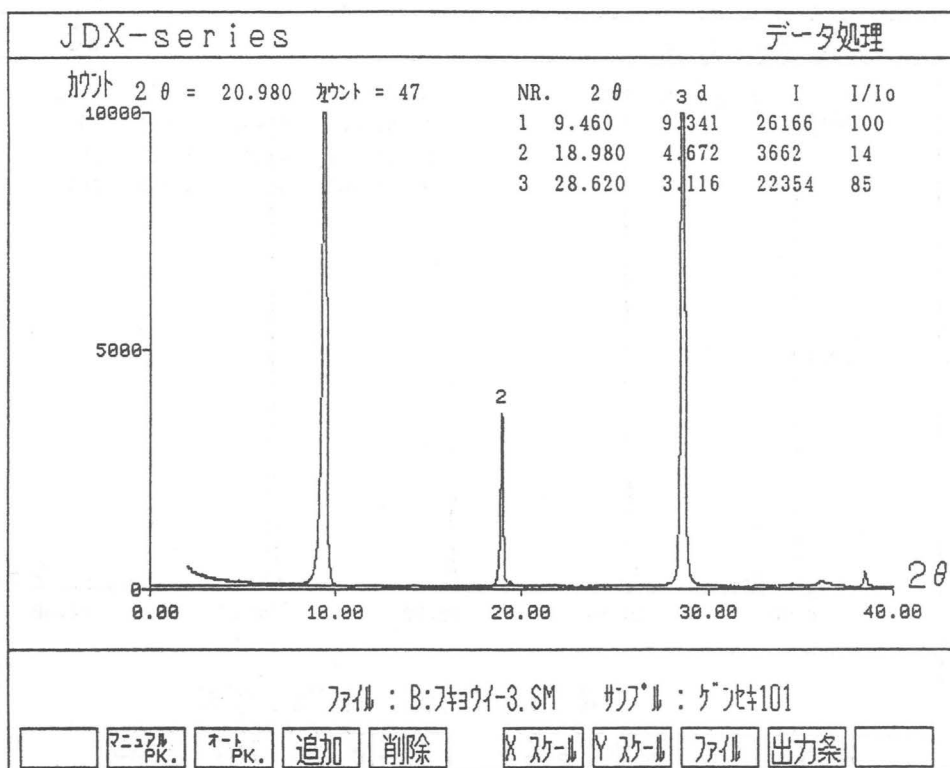
4 まとめ

- I) 池島遺跡、神並遺跡、佐堂遺跡、府教委の発掘した遺跡の4箇所から出土した小玉及び小玉の原石について化学分析とX線回折試験を行った。化学分析では第1図に示すようにI～IIIの3つのグループに別れ、Iグループは佐堂遺跡の原石組成が一致するものが集中している。佐堂遺跡の原石は緑泥石を主体とする緑色岩として特徴付けられる。
- II) IIグループは滑石だけが検出されるグループで、池島遺跡と神並遺跡の小玉が共存する。
- III) IIIグループは府教委の原石が主体をなすもので、組成的には滑石の強度が高く、緑泥石を少量含むもので構成される。神並-6だけが共存している。
- IV) I)～III)の関係については第2図FeO-MgO図のおいてもおおよそ類似した傾向が認められた。
- V) このようにみてくると池島遺跡及び隣接する遺跡において、小玉の原石として利用されたものの主流はIグループに属する緑色岩類であり、ついでIIグループの滑石、IIIグループの滑石を主体とし、緑泥石を少量含むものの順になっているようである。







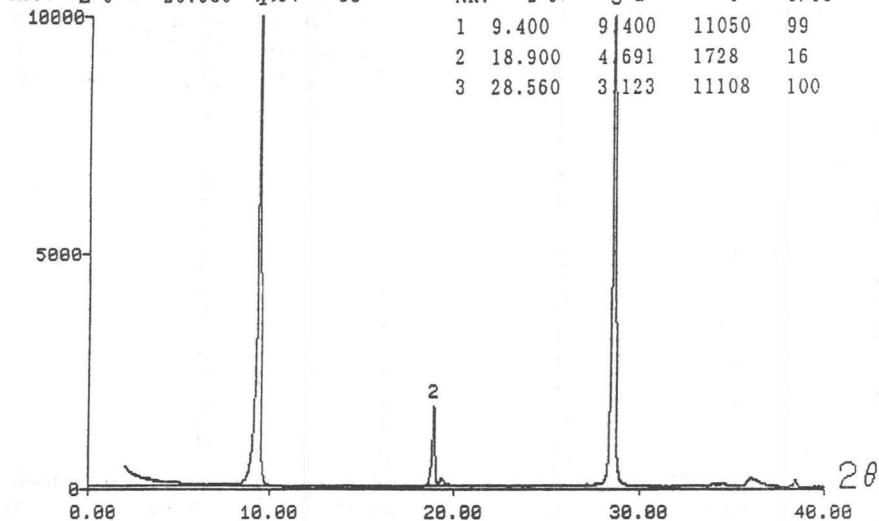


JDX-series

データ処理

カウント 2θ = 20.980 カウント = 58

NR.	2θ	3d	I	I/I ₀
1	9.400	91400	11050	99
2	18.900	4691	1728	16
3	28.560	3123	11108	100



ファイル : B:カンミ-7.SM サンプル : タタ

マニプ PK.
 オート PK.
 追加
 削除
 X スケール
 Y スケール
 ファイル
 出力条

V. まとめ

今回神並遺跡の第13次調査として設定したトレンチから、中世期の遺構、古墳時代の掘立柱建物、縄文時代早期の遺物包含層などが確認・検出され、各時期の遺物の出土をみた。以下、今回の調査成果について問題点を列記してまとめに代えておきたい。

1) 中期の遺構について

中世期の遺構は各地区で検出されている。これは第3次調査地周辺が中世期集落の中心地であったことを示しているといえる。とりわけA地区の中央部では柱穴や溝、土坑、井戸が重複・密在している。この地域は、第1次調査で発見された建物1、2検出地区の北側への延長部にあたる。遺構の年代は大概13世紀代に属すると思われるが、SE1のように、14世紀中葉～15世紀代に埋設したと考えられるものがあり、中世期における遺構の変遷過程を追求する必要がある。

2) 奈良～平安時代の遺構・遺物について

中世期以降の造成・開発工事によって遺構面は大きく削平されている。しかし、当該期の遺物がK地区で散見されることから、集落の存在が窺われる。西に約150～200m隔った第3次調査地や第5・6次調査地で、奈良～平安時代の掘立柱建物が検出されている。距離を置いて小規模な集落が点在していた当該期の景観が復元できよう。

3) 古墳時代の祭祀跡

C地区の自然河川が形成する緩傾斜面・平坦面上で、祭祀跡とみられる遺物集中区を検出した。遺物には、①口縁部その他に打ち欠きのある土師器壺や須恵器杯、②供膳、供献具として使用されたとみられる多量の土師器高杯、③ミニチュア土器群、④多種多量の滑石製模造品などがあり、金属製品を除く祭祀用具がセットをなして出土した点が注目される。今回出土した滑石製模造品に未製品や原石がみられないことは、C地区の遺物集中区において、これらの祭祀用具が「消費」された点を重視すればおのずから首肯されよう。I-1)で述べたように、市内の祭祀遺跡としては、下六万寺遺跡が著名で、刀子4点、有孔円板1点、勾玉12点、管玉2点、小玉2点が下六万寺墓地内で発見されている⁽¹⁾。神並遺跡では、有孔円板一鏡、剣形品一剣、勾玉・白玉一玉の三種が一組となって出土した点が、これまでの単独、あるいはそれに近い形で発見された例と大きく相違する。C地区の北約250mには延喜式内社である石切劔箭神社が所在する。神社とその境内域にあたる祭祀地との密接な関連については、大場磐雄氏が指摘されており⁽²⁾「原始神社」⁽³⁾に関わる議論が深められることを期待したい。

最後に子持勾玉について一言しておく。市内の出土例については原田修氏が集成されている⁽⁴⁾。それによれば、瓜生堂遺跡、えの木塚古墳、横小路町、山畑22号墳石室の4例を数えるが、今回の出土例のように、扁平、退化した形態を示すものは初例であることが注目される。

注 (1) 藤井直正、都出比呂志ほか『原始・古代の枚岡(第1部各説)』、1966年。

(2) 大場磐雄「神社と祭祀跡」(『祭祀遺蹟』所収、角川書店、1982年(三版))

(3) この用語は注(2)大場磐雄前掲書による。

(4) 原田 修「瓜生堂遺跡の調査—ガソリンスタンド建設に伴う調査—」

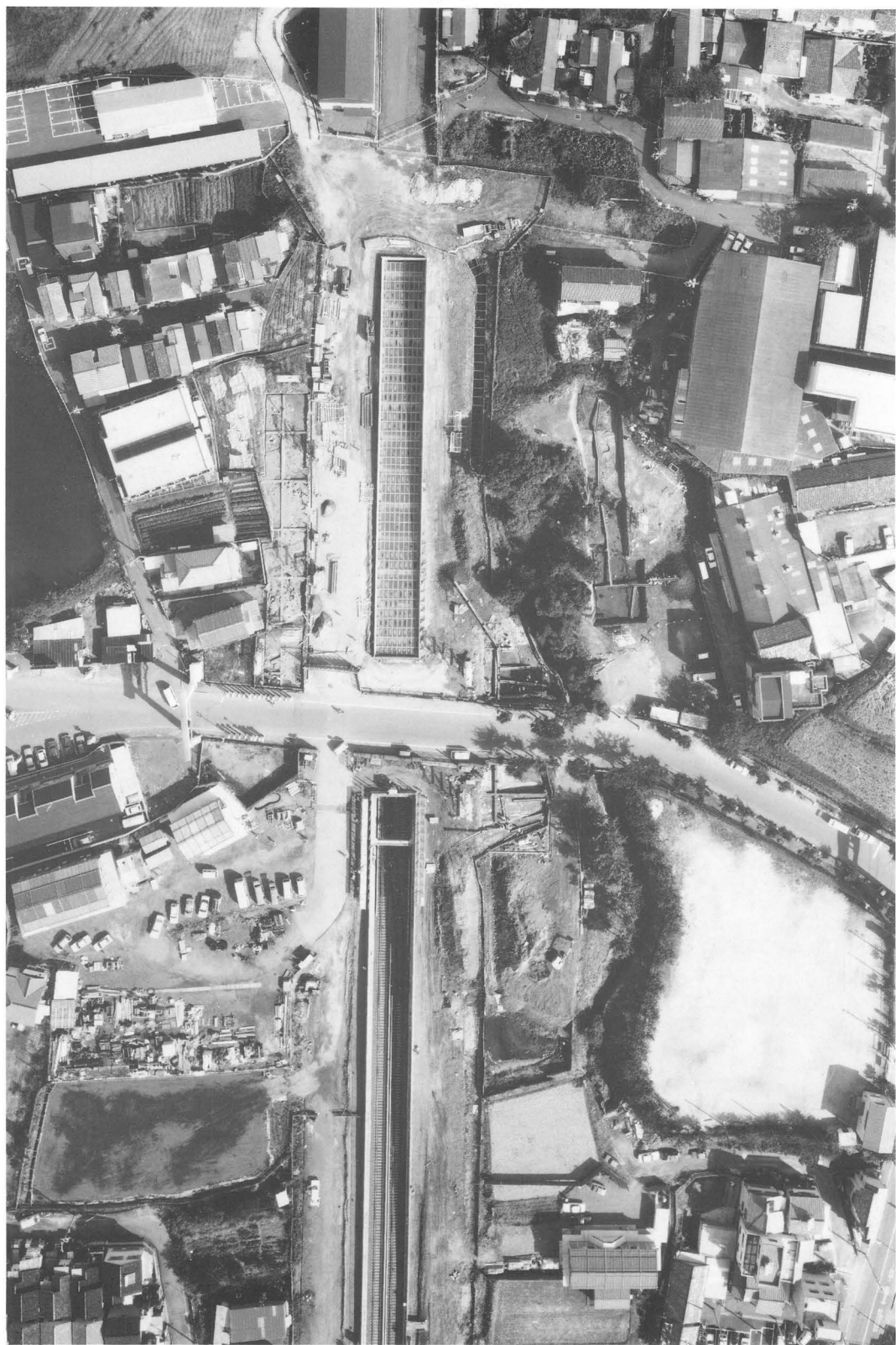
(『(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度』、1989年)

〔引用・参考文献〕（各章・節で注として掲げたものは除く）

- 下村晴文・才原金弘・曾我恭子・小西優美『神並遺跡Ⅰ』
東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会、1986年。
- 下村晴文・菅原章太・曾我恭子『神並遺跡Ⅱ』
東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会、1987年。
- 松田順一郎・中西克宏・小西優美『神並遺跡Ⅲ』
東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会、1988年。
- 西口陽一・宮崎泰史・蜂屋晴美・瀬川眞美子『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅰ』
大阪府教育委員会、1984年。
- 西口陽一・宮崎泰史・蜂屋晴美・瀬川眞美子『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅲ』
大阪府教育委員会、1986年。
- 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ、Ⅹ、Ⅻ』、1976年、1981年、1985年。
- 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』所収、1982年。）
- 森島康雄「西ノ辻遺跡周辺における中世土器の編年」
（大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要Ⅳ（本文篇）』、1987年。）
- 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」
（『九州歴史資料館研究編集』4、1978年。）
- 京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会
『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』、1978年。
- 才原金弘「東大阪市内出土の製塩土器Ⅱ」（『財団法人東大阪市文化財協会紀要Ⅰ』、1985年。）
- 勝田邦夫『若江遺跡第32・33次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会、1990年。
- 大場磐雄『祭祀遺蹟—神道考古学の基礎的研究—』角川書店、1982年（三版）。
- 小野真一『祭祀遺跡』ニューサイエンス社（考古学ライブラリー10）、1982年。
- 森谷ひろみ「石製模造品の岩種について」（『千葉大学文理学部紀要』4-3、1965年。）
- 日本玉研究会、下総郷土研究会合同調査団「滑石製模造品製作の工房址
—千葉県香取郡下総町東明神山の遺跡—」（『玉』日本玉研究会会誌3、1972年。）
- 楢山林継・小山修三「石製模造品」（阿智村教育委員会『神坂峠』、1985年（復刊））。
- 北野 重・花田勝広・桑野一幸『大県・大県南遺跡—下水道管渠埋設工事に伴う—』
柏原市教育委員会（柏原市文化財概報1983—Ⅲ）、1984年。
- 勝田邦夫「縄手遺跡第8次発掘調査報告」（東大阪市教育委員会『山賀遺跡発掘調査概要』、1990年。）
- 葉賀七三男『考古学と金属生産—遺跡調査の指針—』クオリ（コインブックス20）、1986年。
- 花田勝広「倭政権と鍛冶工房—畿内の鍛冶專業集落を中心に—」（『考古学研究』143、1989年。）
- 丸山竜平「近畿地方」（たたら研究会『日本古代の鉄生産』所収、六興出版、1991年。）
- 株式会社INAX『すき・くわ・かま』（INAXBOOKLET91'—No.1）、1991年。

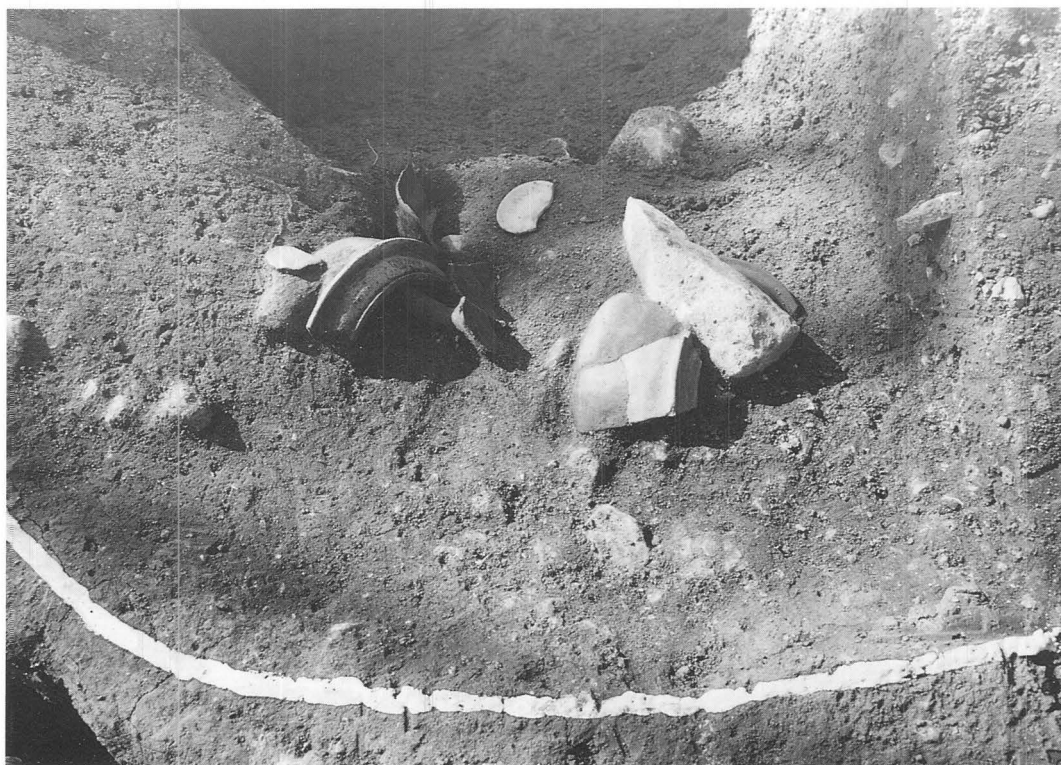
版 図

図版一 神並遺跡第13次調査航空写真（※上方が東）

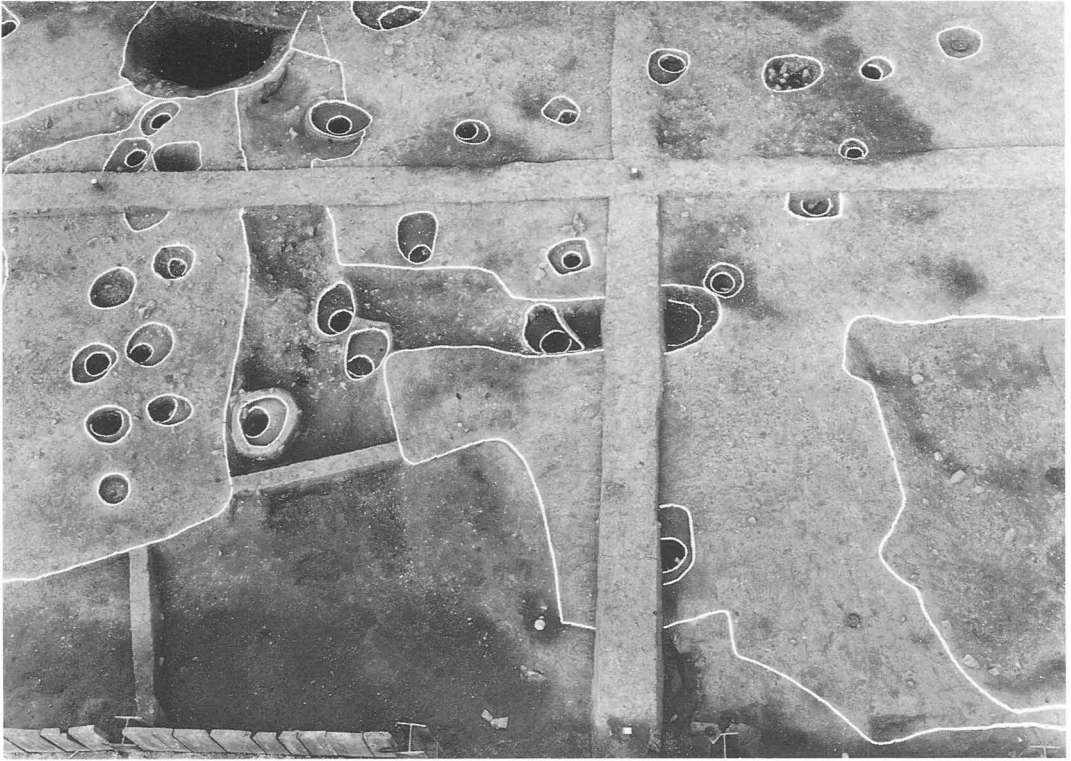




1. 調査前の状況



2. SE1 土器出土状況



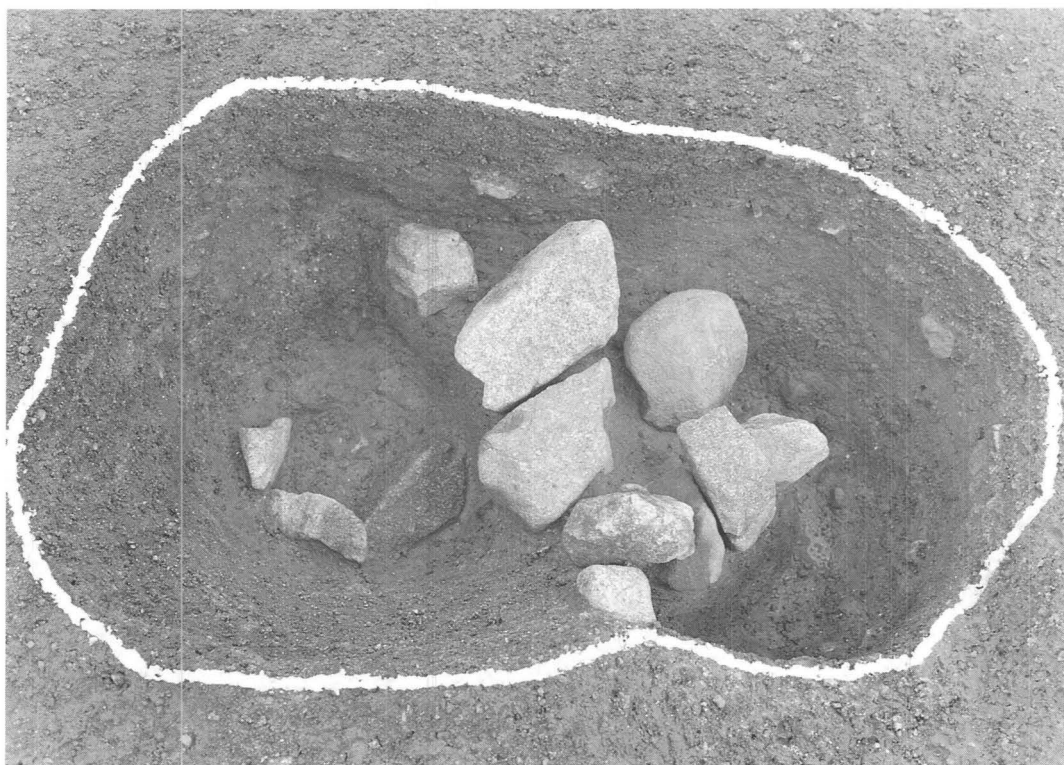
1. 中世遺構検出状況(南より)



2. 中世遺構掘削後状況(南より)



1. 古墳時代遺構検出状況



2. S P 316 根回り石検出状況

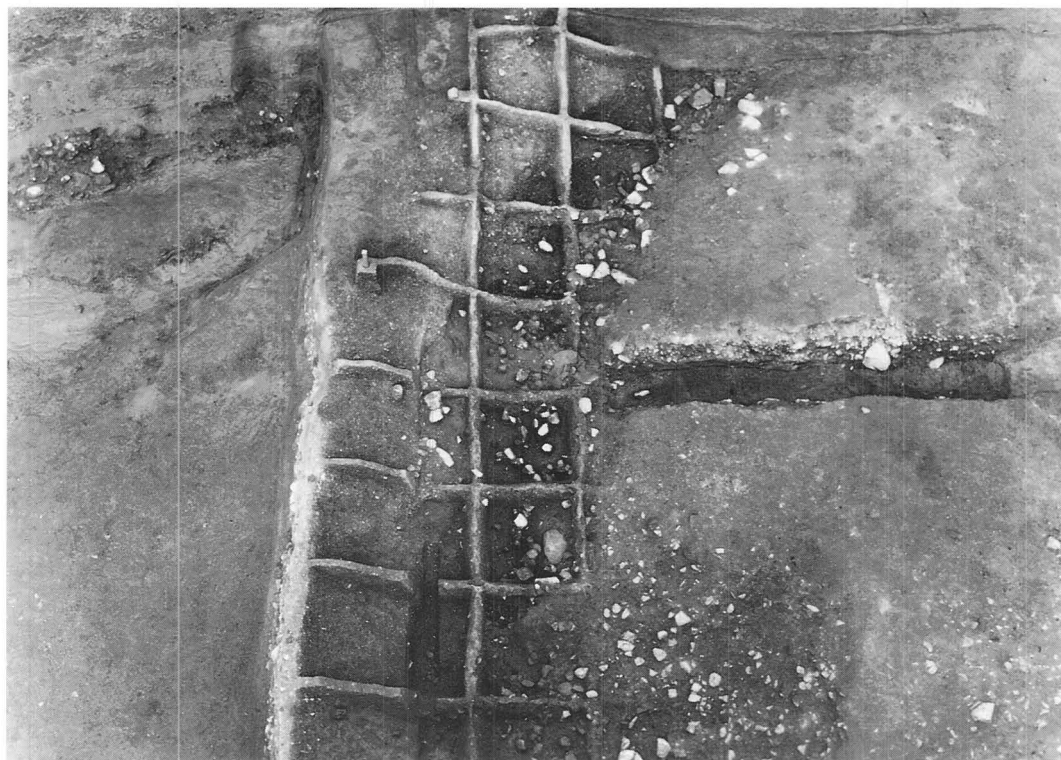


1. 第8層内有舌尖頭器出土状況

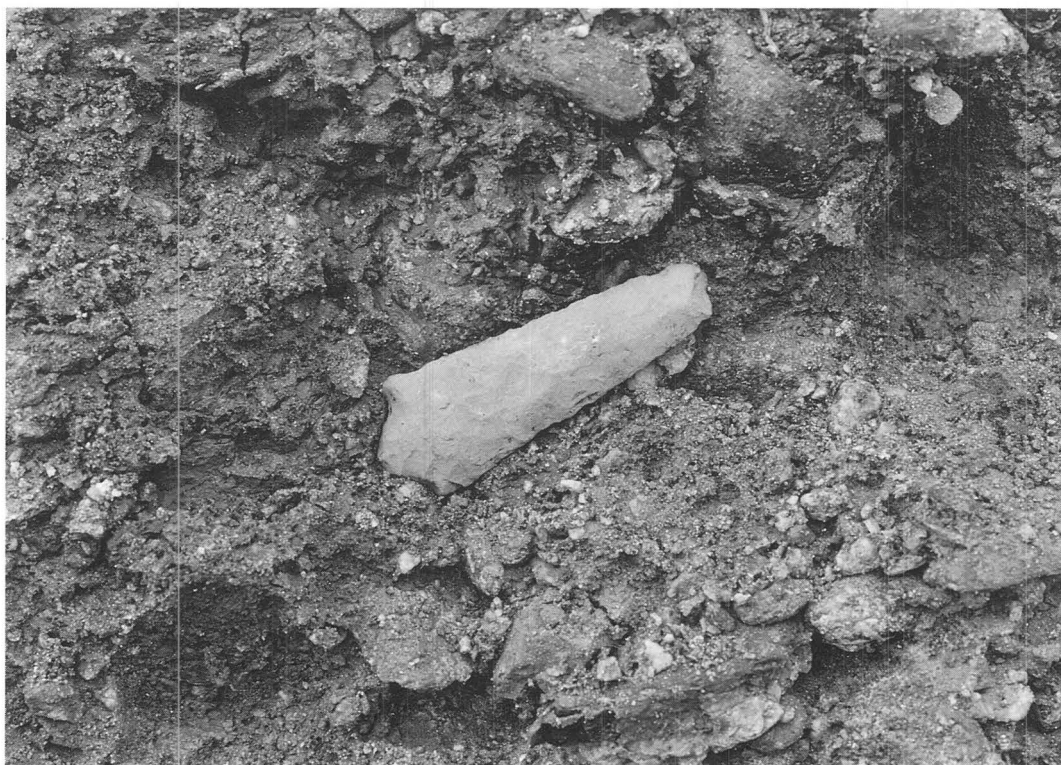


2. 押型文土器出土状況

図版六
A地区の遺構



1. 縄文時代早期遺物包含層検出状況(南より)



2. 第8層内有舌尖頭器出土状況



1. 自然河川検出状況(西より)



2. 第9層内 土器出土状況



1. 調査前の状況



2. 中世遺構検出状況(北より)



1. 古墳時代遺構検出状況(北より)



2. S D31 遺物出土状況



1. 第9層内遺物出土状況(西より)



2. 第9層内遺物出土状況(近景、南より)



1. 調査前の状況



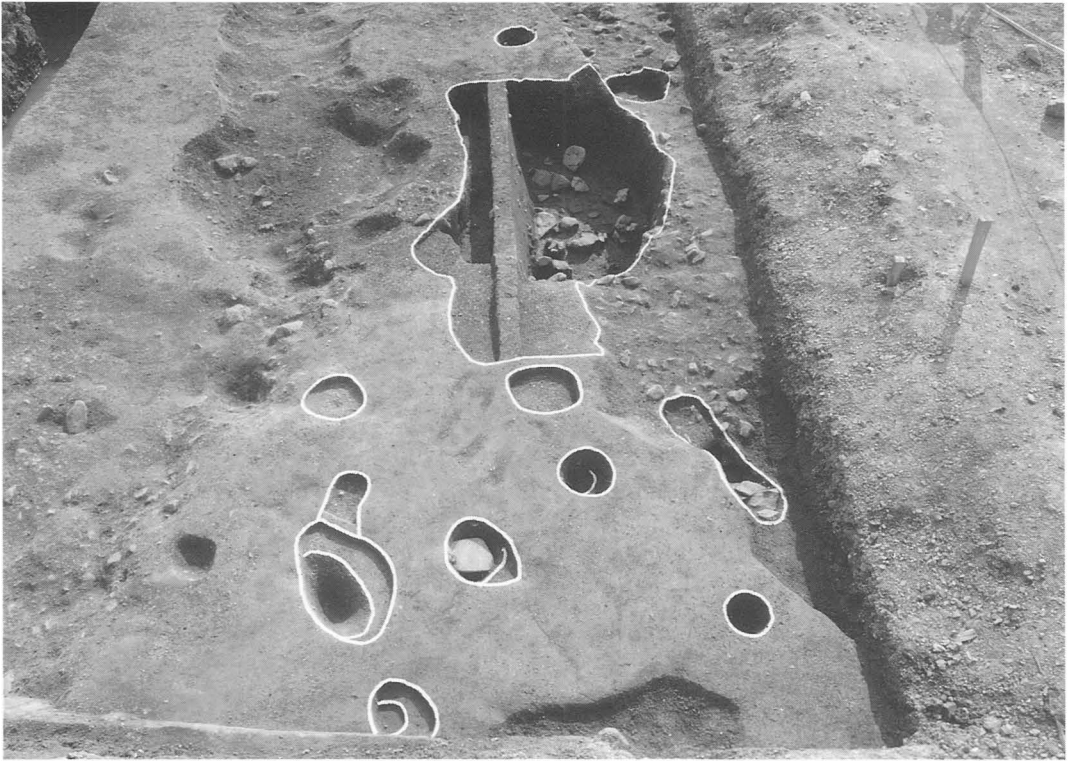
2. 中世遺構検出状況(北より)



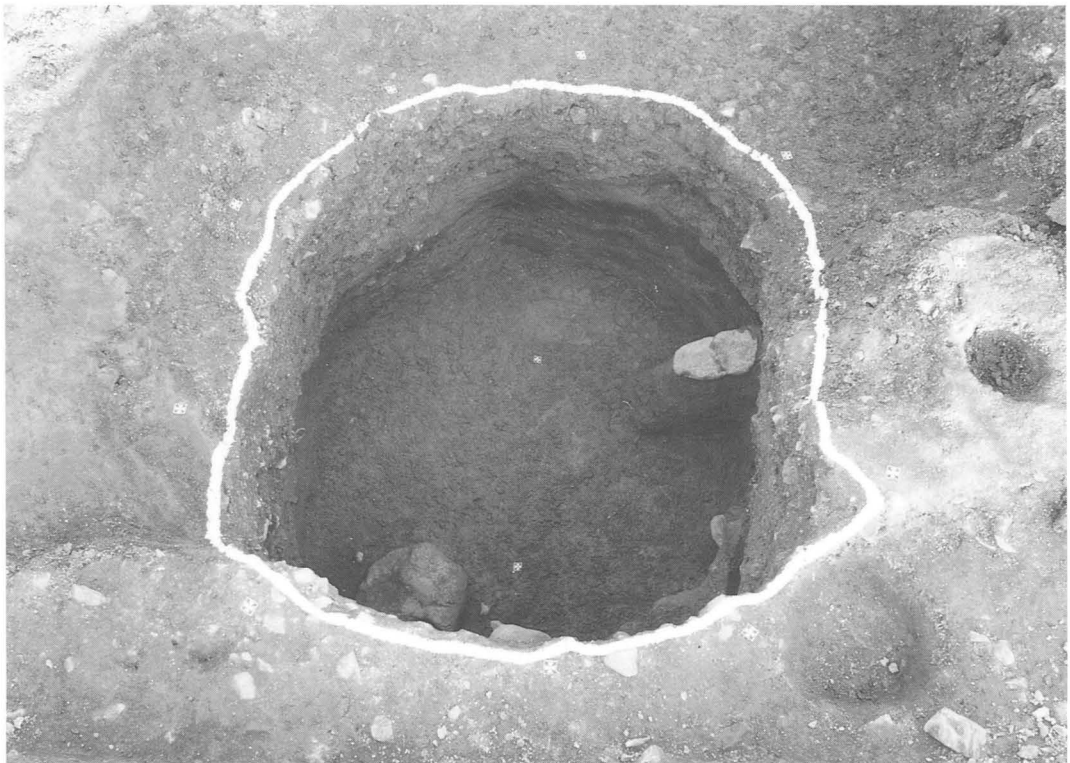
1. SP35 根石出土状況



2. 古墳時代遺構検出状況(南より)



1. 遺構検出状況



2. SE 5 掘削後状況



1. F地区遺構検出状況(西より)



2. I地区中世遺構検出状況(西より)



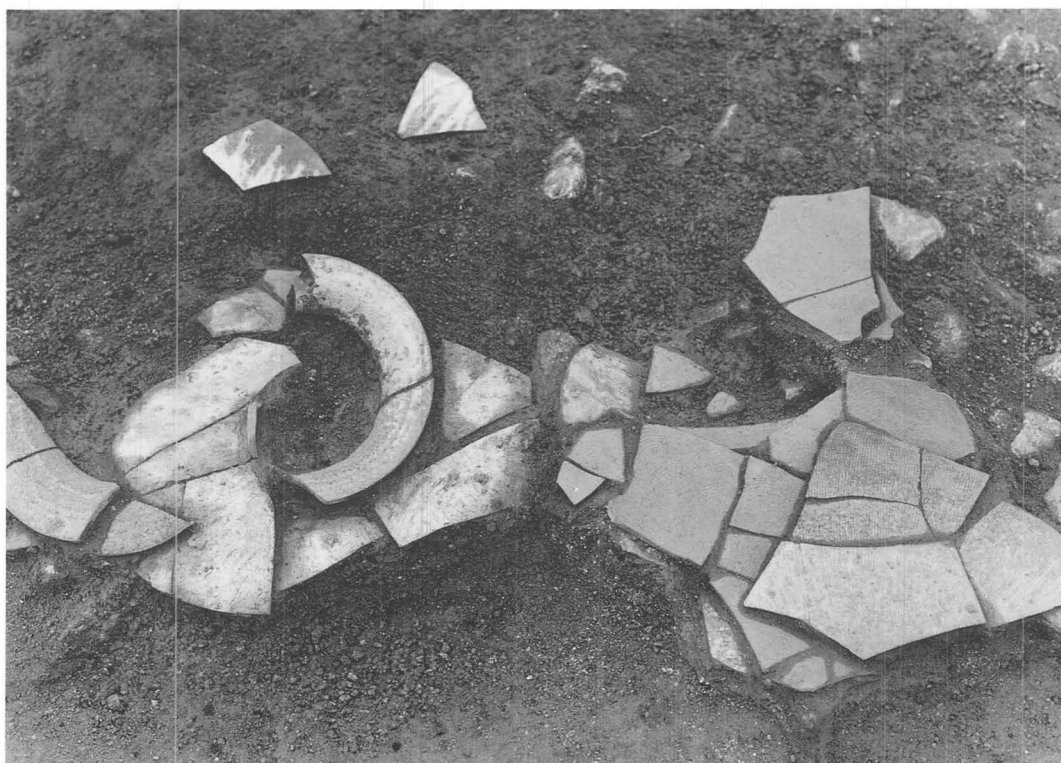
1. 自然河川検出状況(南より)



2. 第9層内 遺物出土状況



1. 第9層内 遺物出土状況



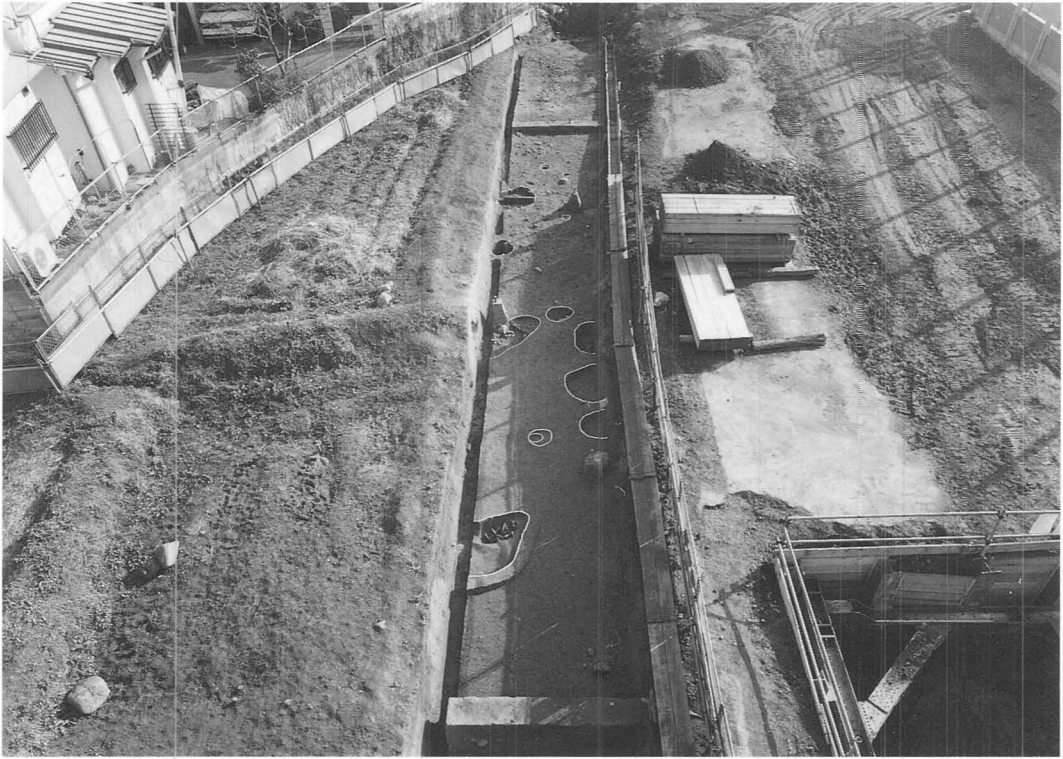
2. 第9層内 須恵器甕(370)出土状況



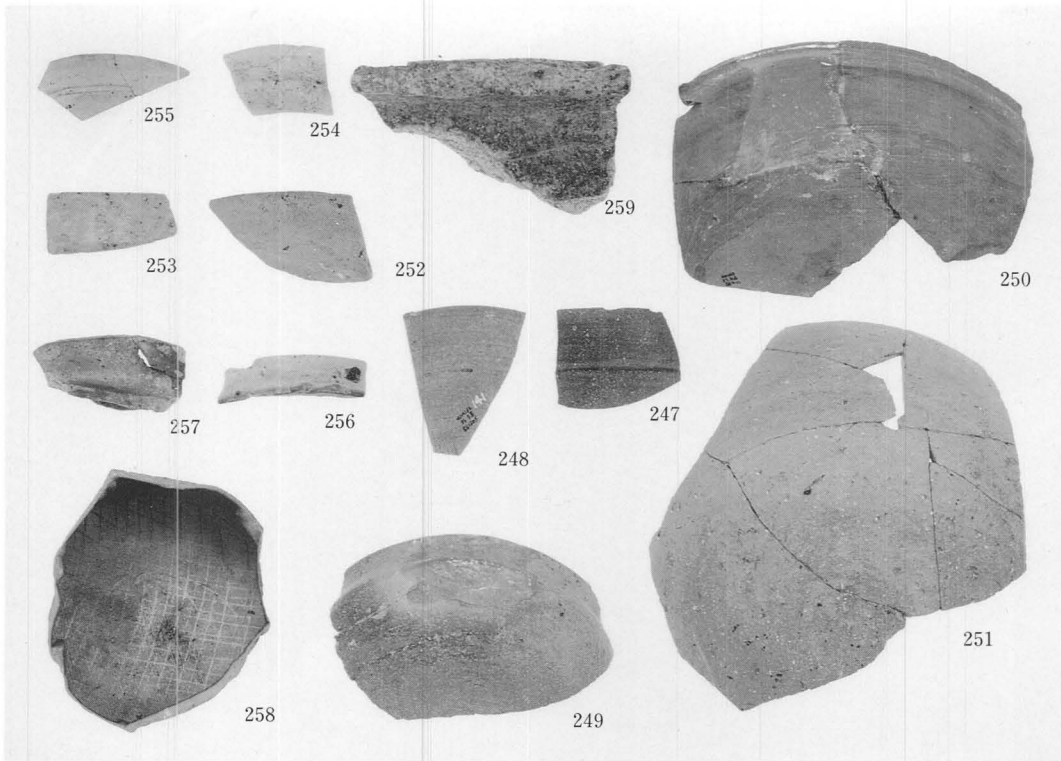
1. J地区遺構検出状況(西より)



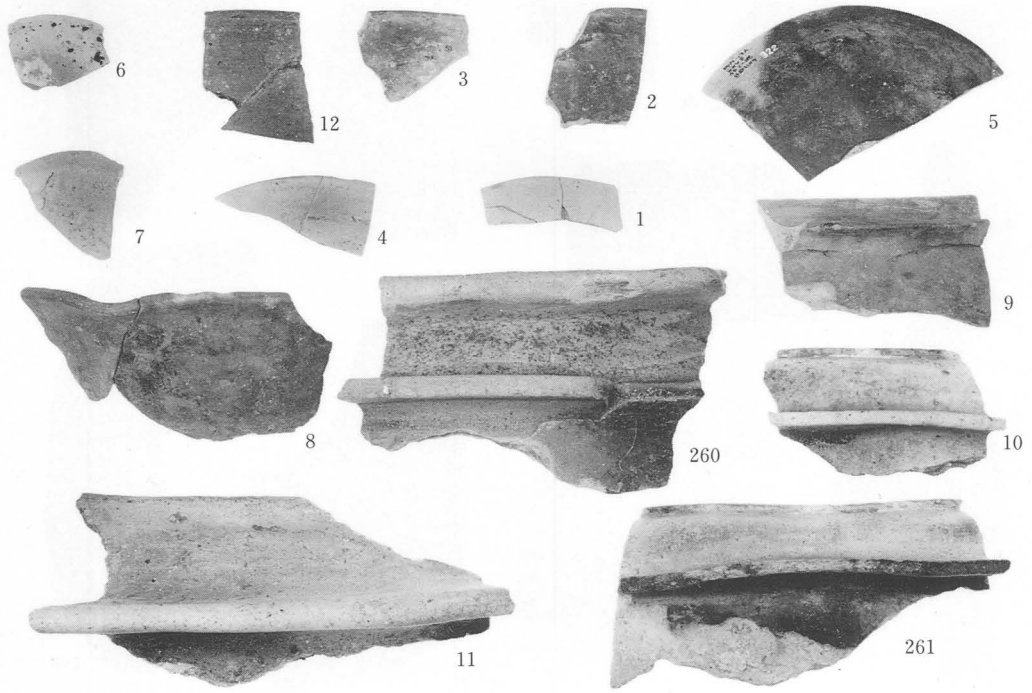
2. L地区 SE3断面



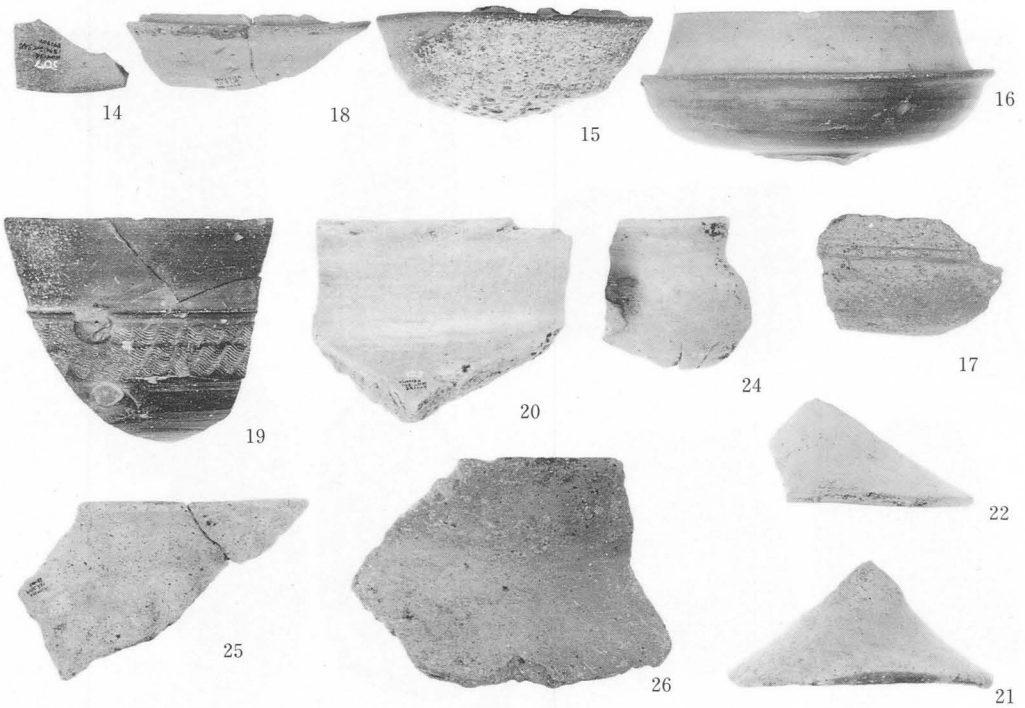
1. K地区遺構検出状況(西より)



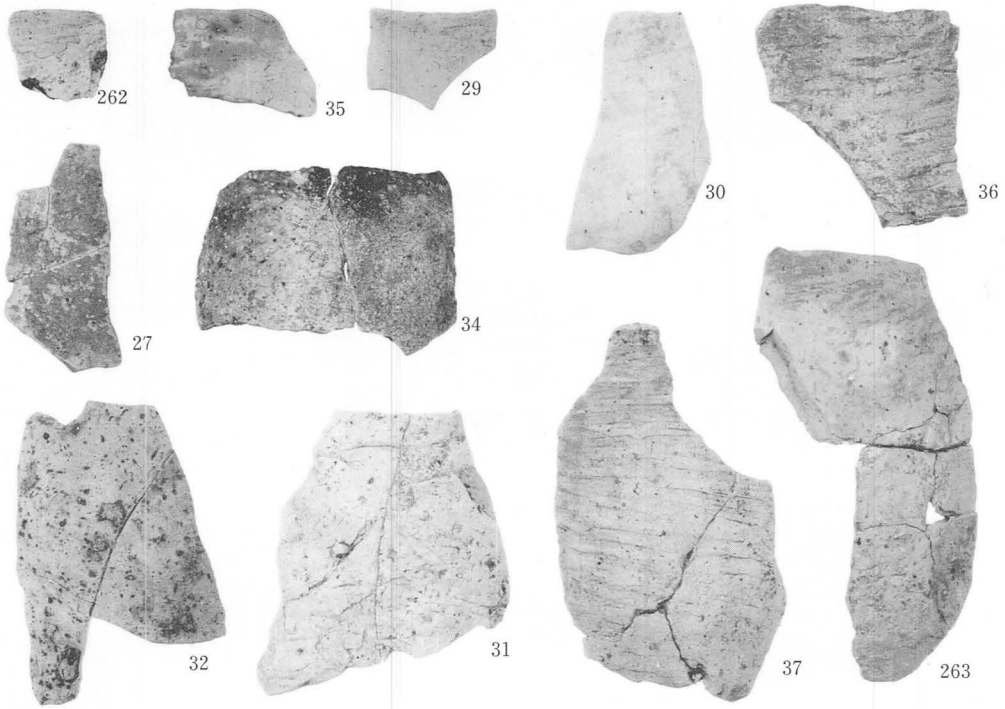
2. 出土土器(須恵器蓋・杯、黑色土器碗、瓦器碗、土師器皿・羽釜)



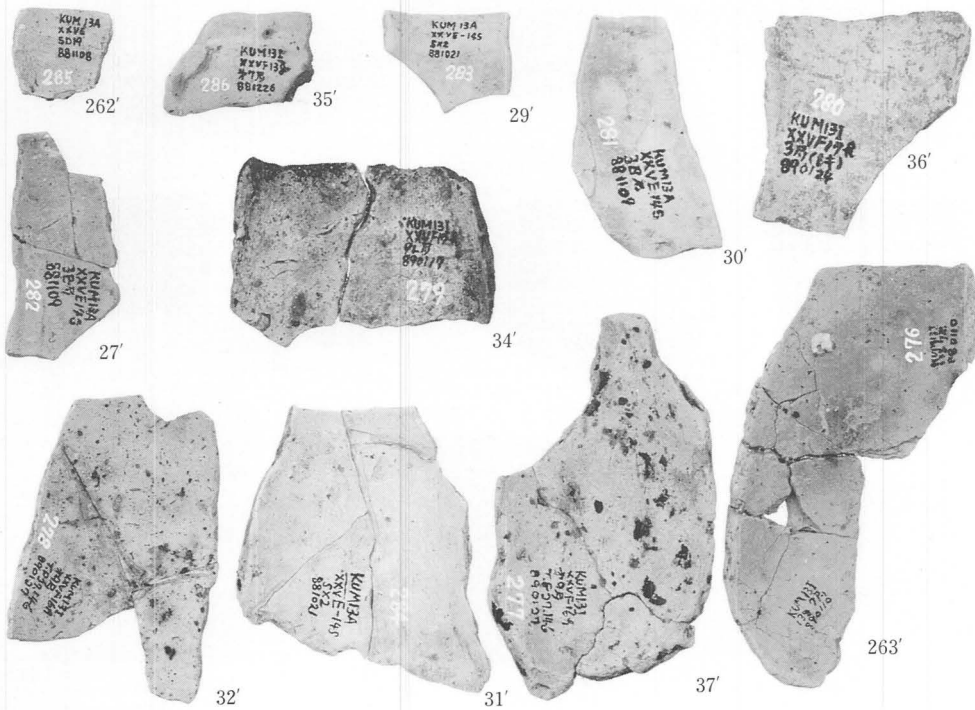
1. 中世の土器(瓦器碗・片口・羽釜、須恵器捏鉢、土師器皿・羽釜)



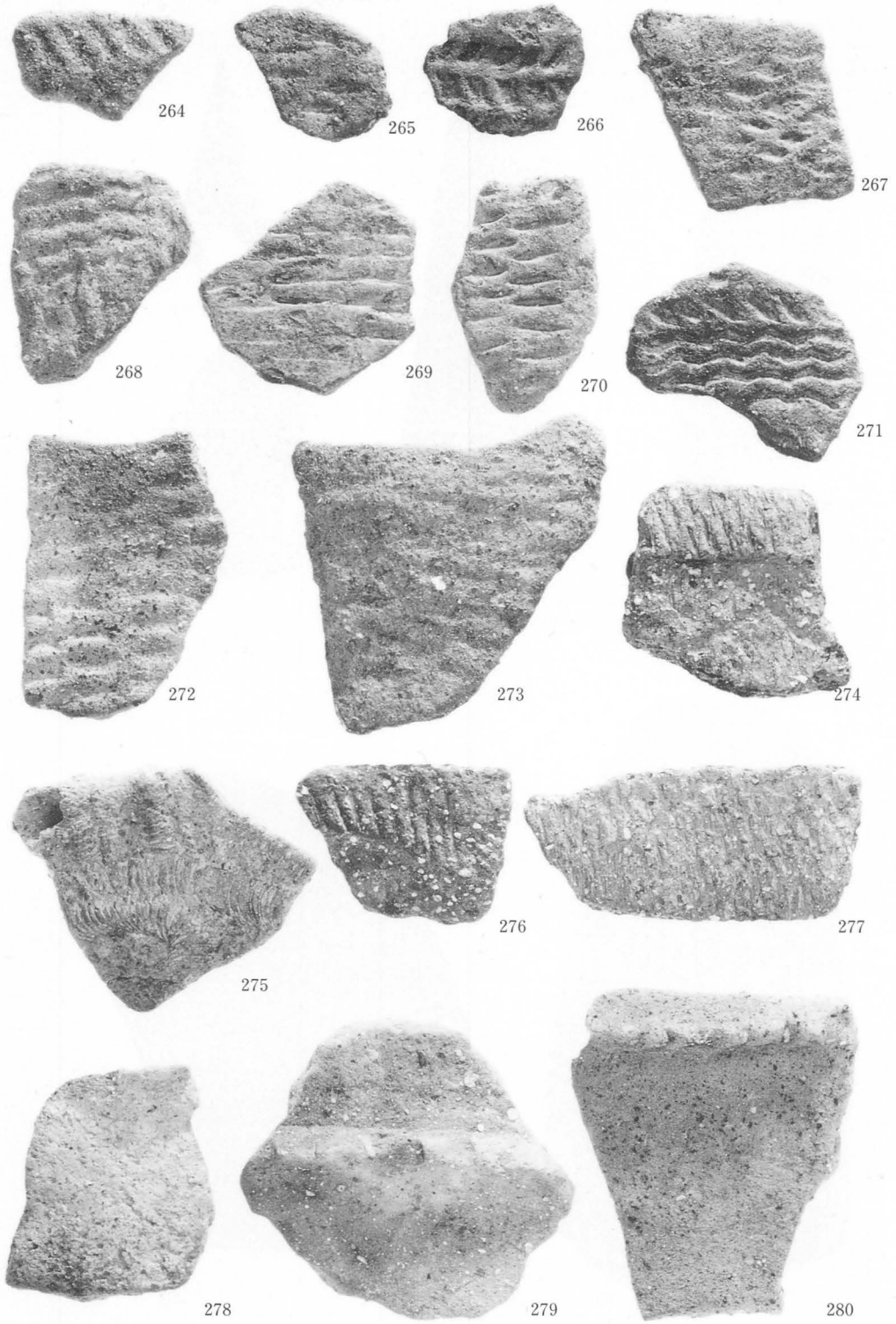
2. 古墳時代の土器(須恵器蓋・杯・高杯・甕、土師器高杯・甕・壺)

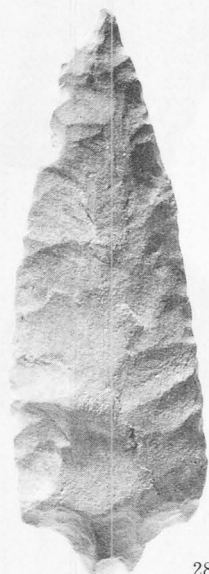


1. 製塩土器(外面)



2. 製塩土器(内面)





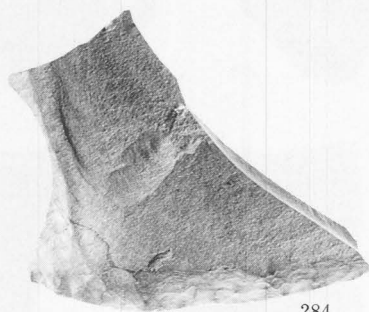
281



282



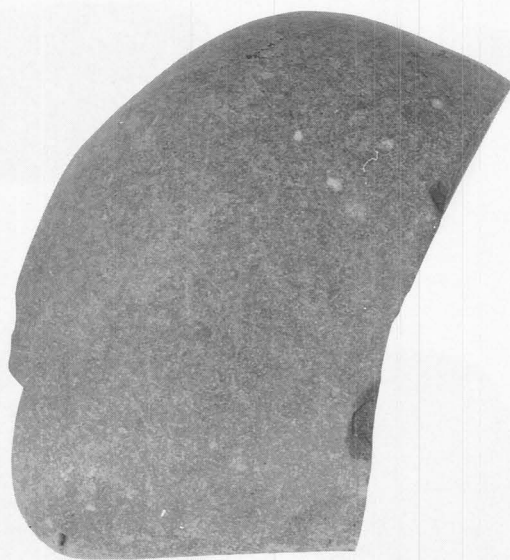
283



284



285



286

第7 A層、第8層内出土石器



52'



55'



52



55



53'



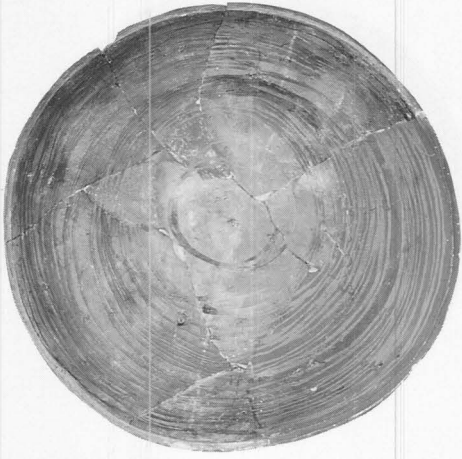
54'



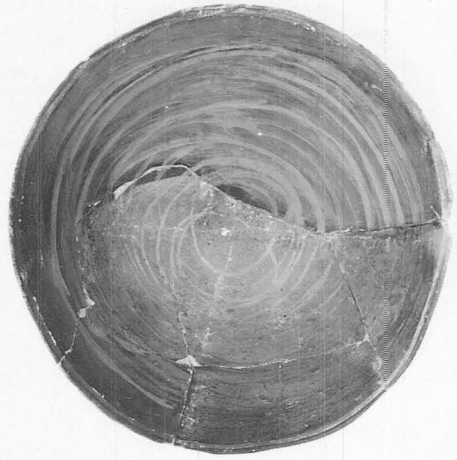
53



54



50'



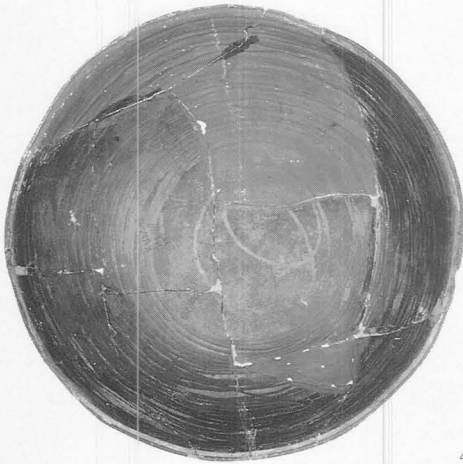
51'



50



51



49'



287



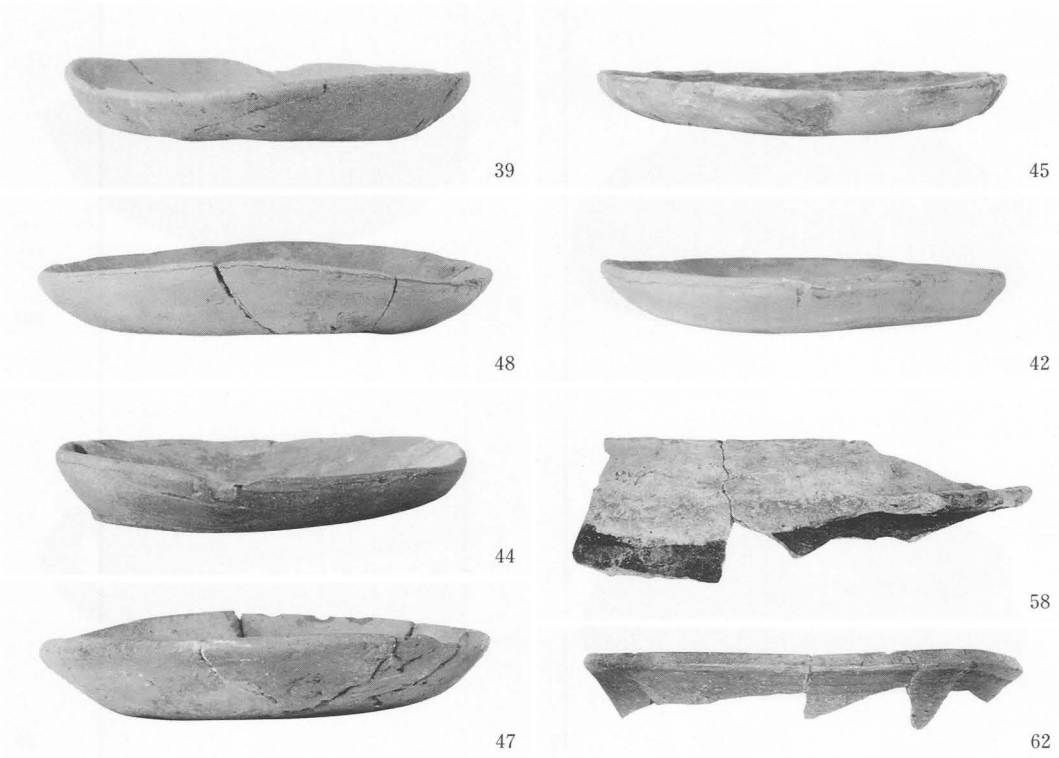
288



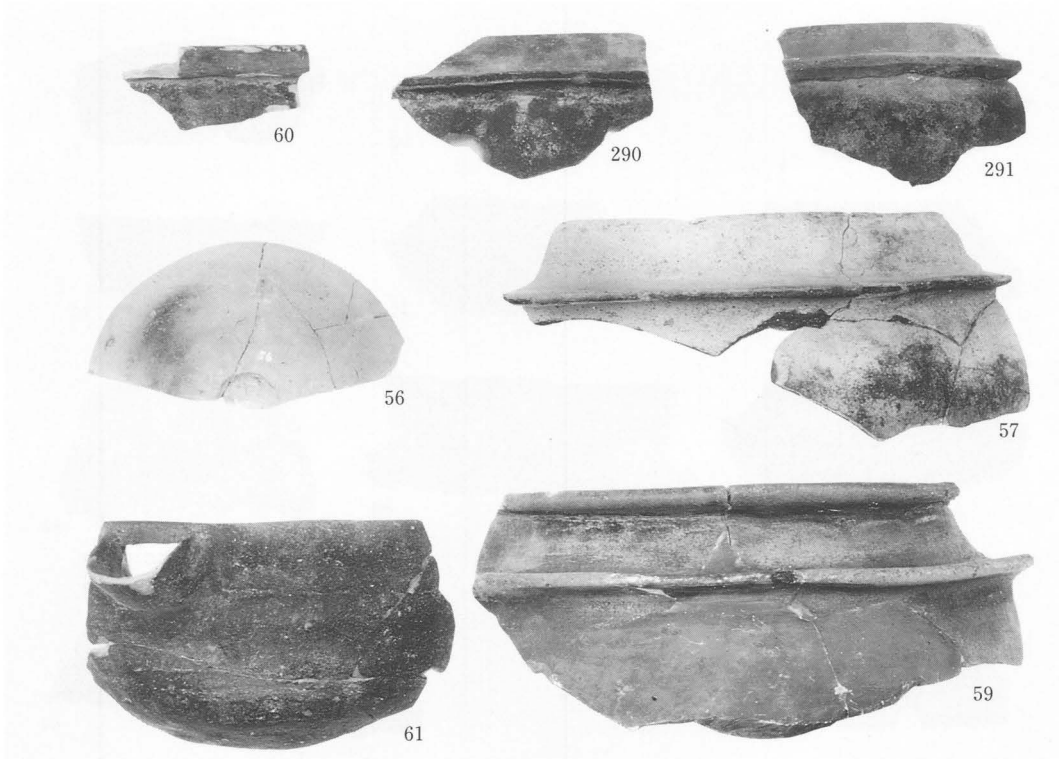
49



289



1. 第9層内出土土器(土師器皿・羽釜、須恵器捏鉢)



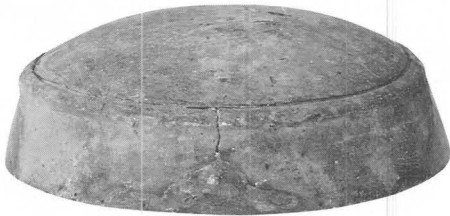
2. 第9層内出土土器(瓦器碗・鉢・羽釜・片口、土師器羽釜)



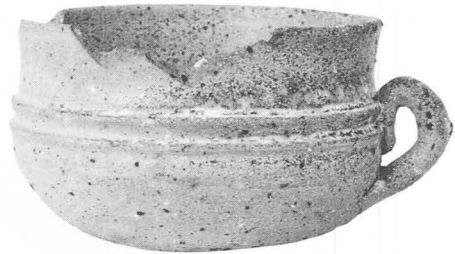
72



292

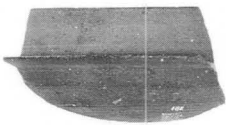


70



78

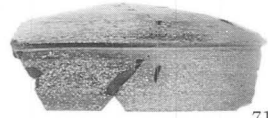
1. SD出土土器(須恵器蓋・高杯・把手付碗)



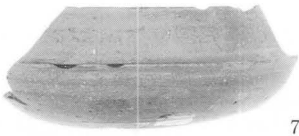
74



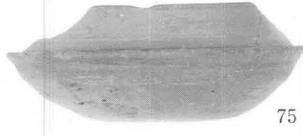
76



71



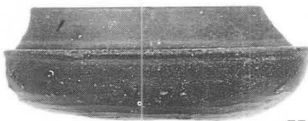
73



75



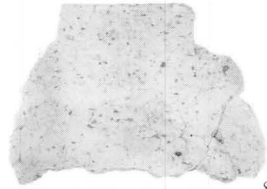
79



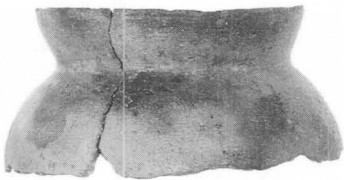
77



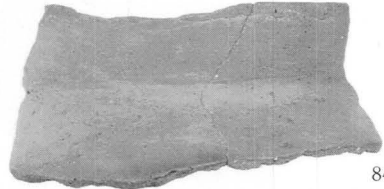
80



82



81



84

2. SD31出土土器(須恵器蓋・杯、土師器杯・壺・甕)



117



116

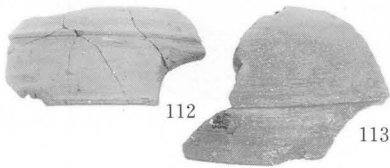


115



114

1. 第9層内出土土器(須恵器蓋・杯・高杯・壺)



112

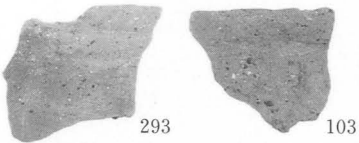
113



89

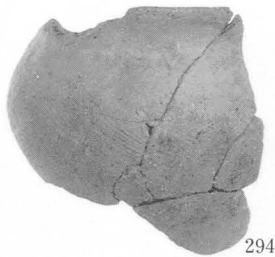


102

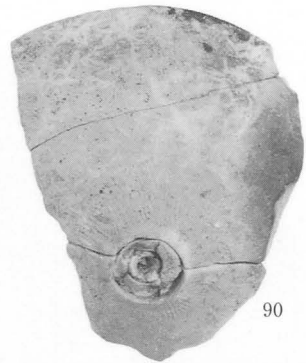


293

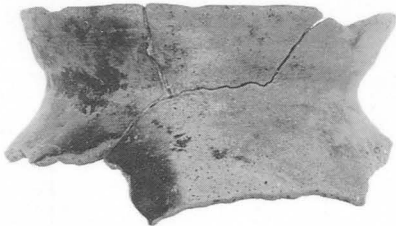
103



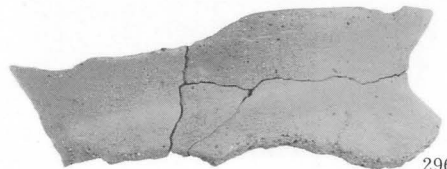
294



90



295



296

2. 第9層内出土土器(須恵器蓋、土師器杯・高杯・鉢・壺・甕)



109



110



104



107



105



106



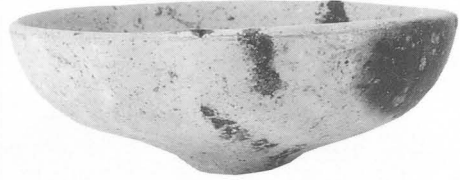
111



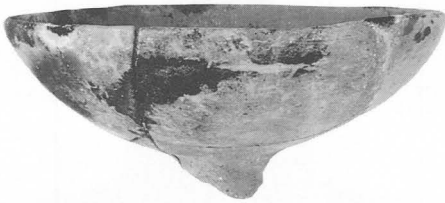
108



88



87



91



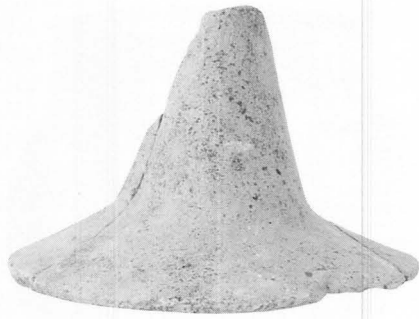
92



85



86



97



93



96



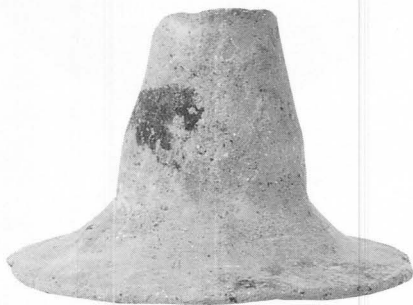
95



94



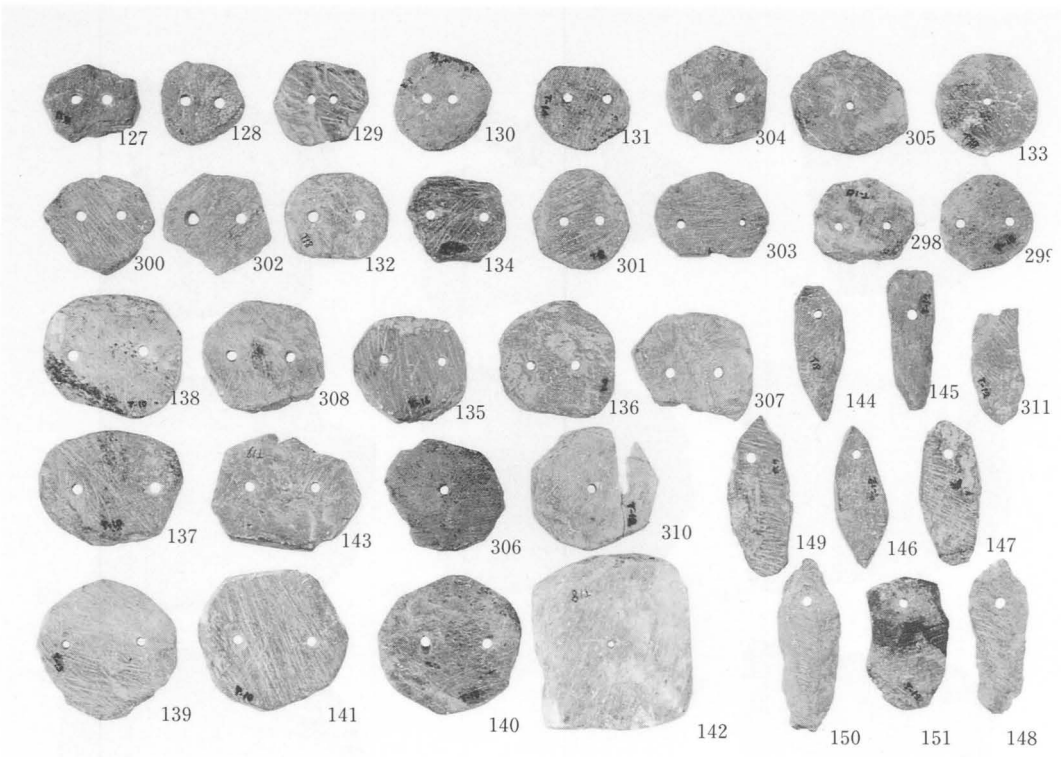
101



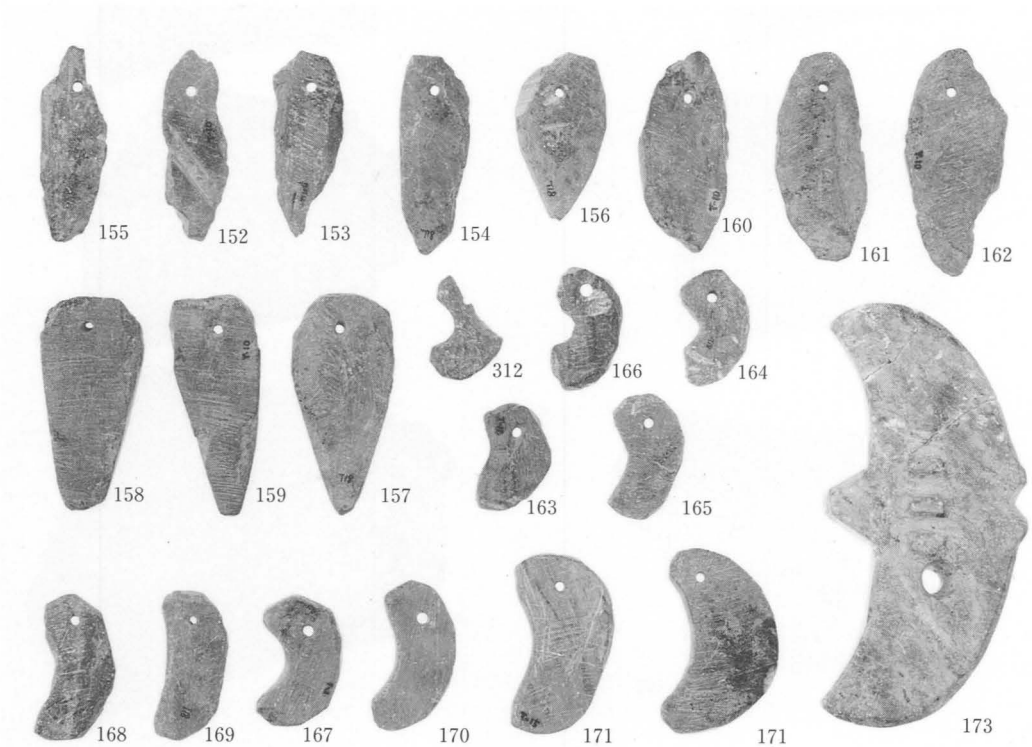
100



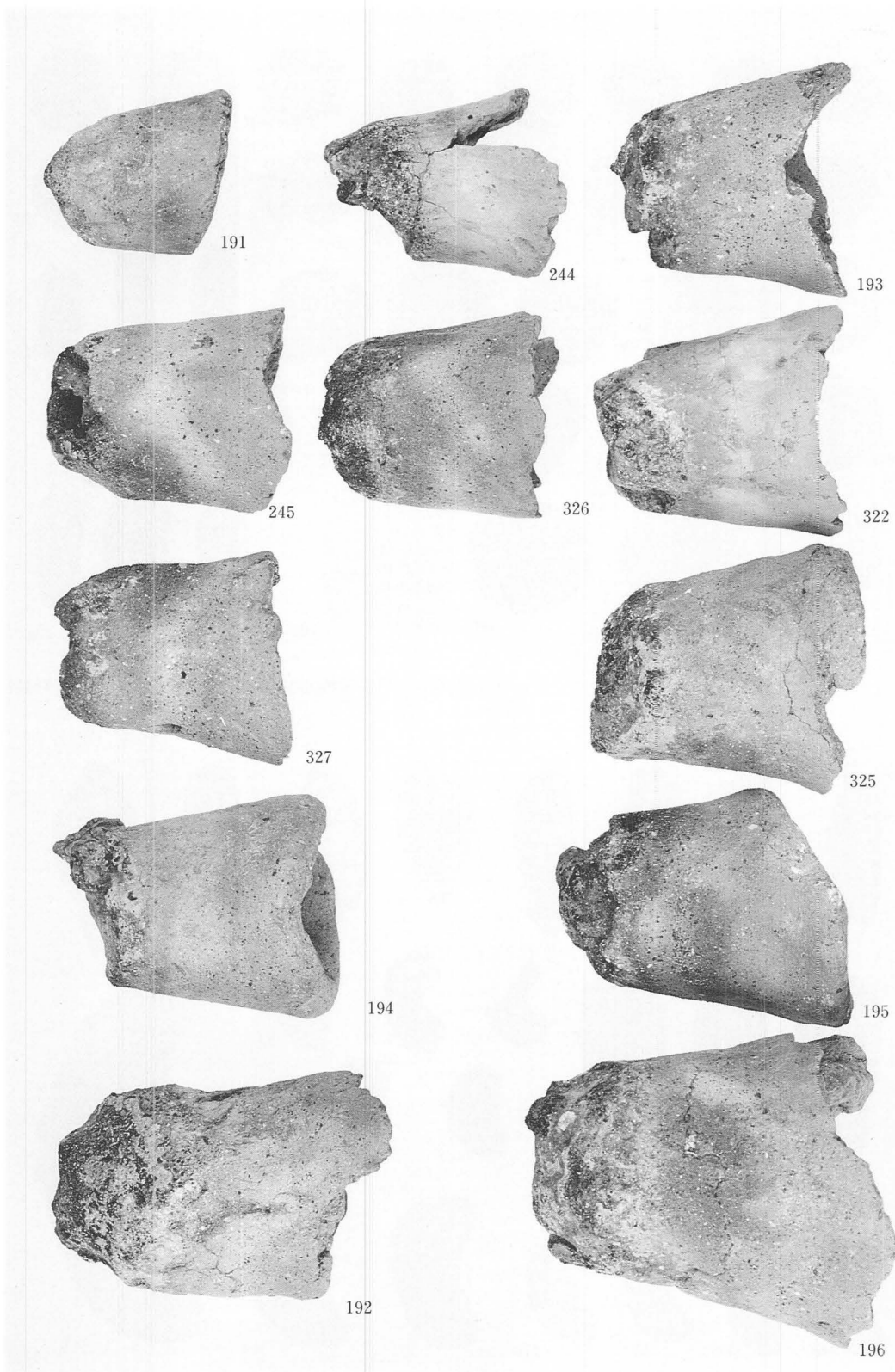
98



1. 第9層内出土滑石製模造品(有孔円板、不整形板、剣形品)



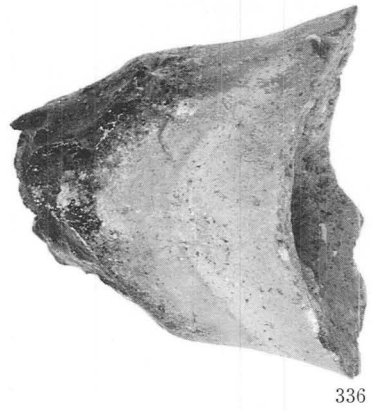
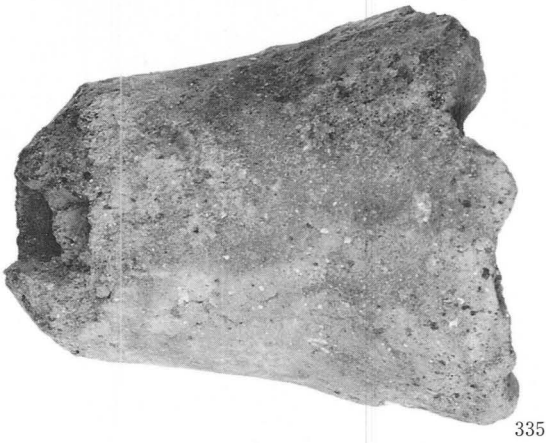
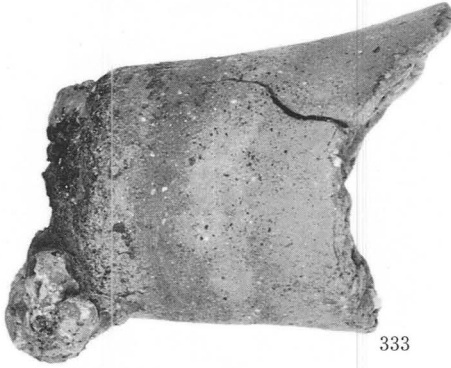
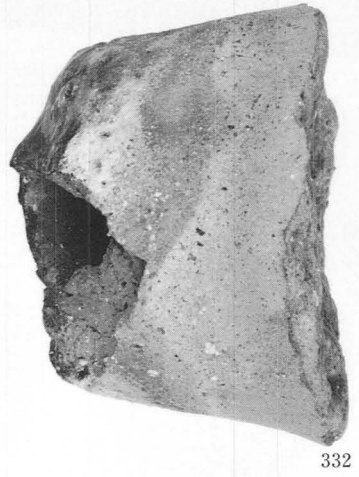
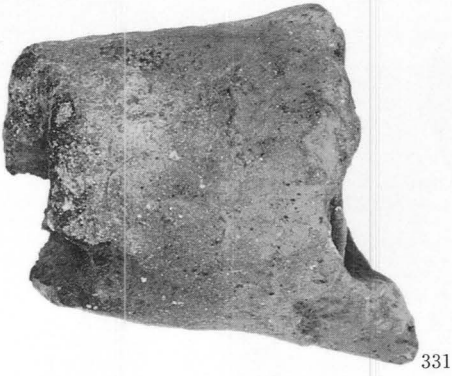
2. 第9層内出土滑石製模造品(剣形品、勾玉、子持勾玉)



C地区S D31出土鞆羽口、I地区第9～10層出土鞆羽口(側面)

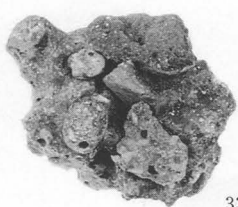


C地区SD31出土鞆羽口、I地区第9~10層出土鞆羽口(正面)

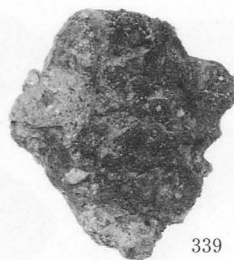




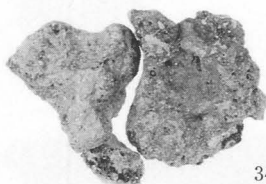
337



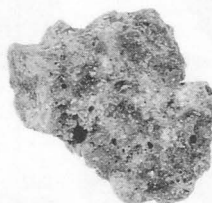
338



339



340



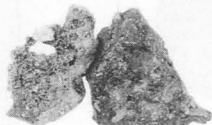
341



342



343

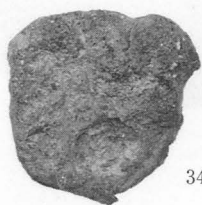


344



345

1. 鉄滓



346



348

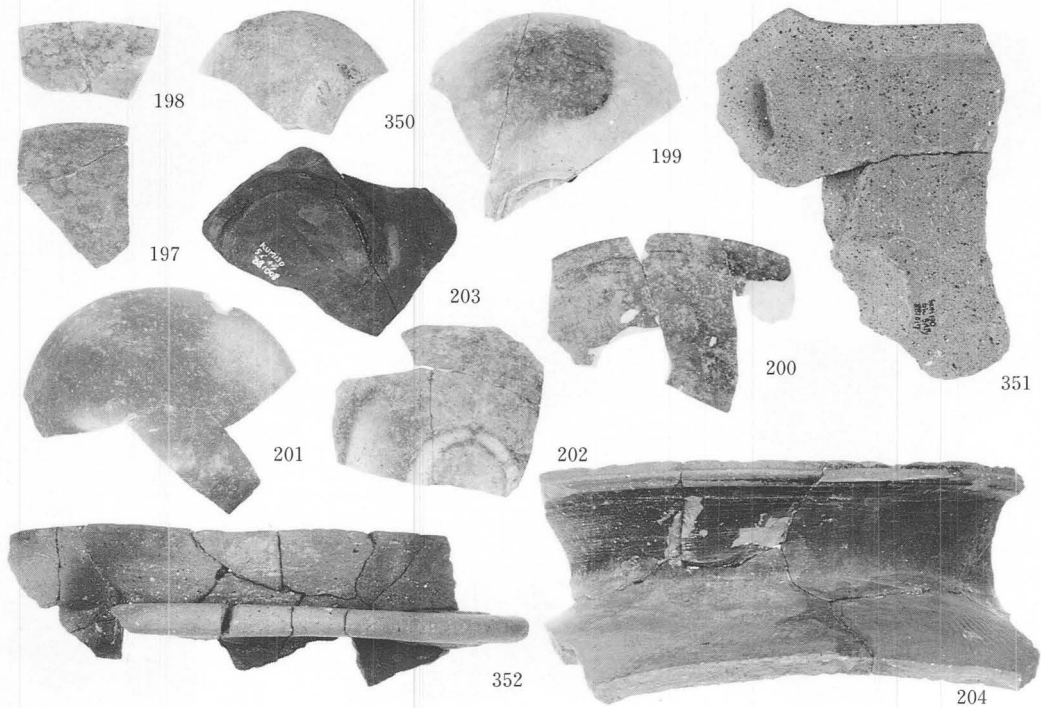


347



349

2. 炉壁片



1. 出土土器(土師器羽釜、カマド、須恵器甕、黒色土器碗、瓦器碗)



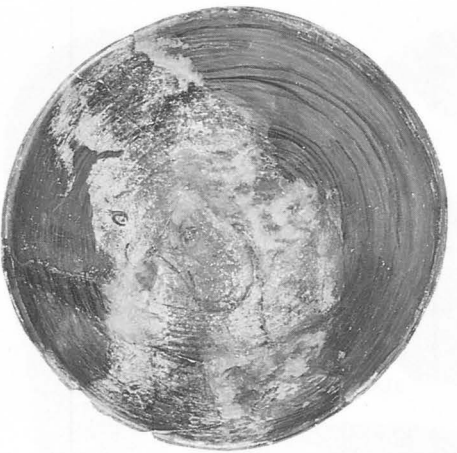
2. B地区、D地区出土砥石



217'



217



216'



216



213



211



354



355



356



357



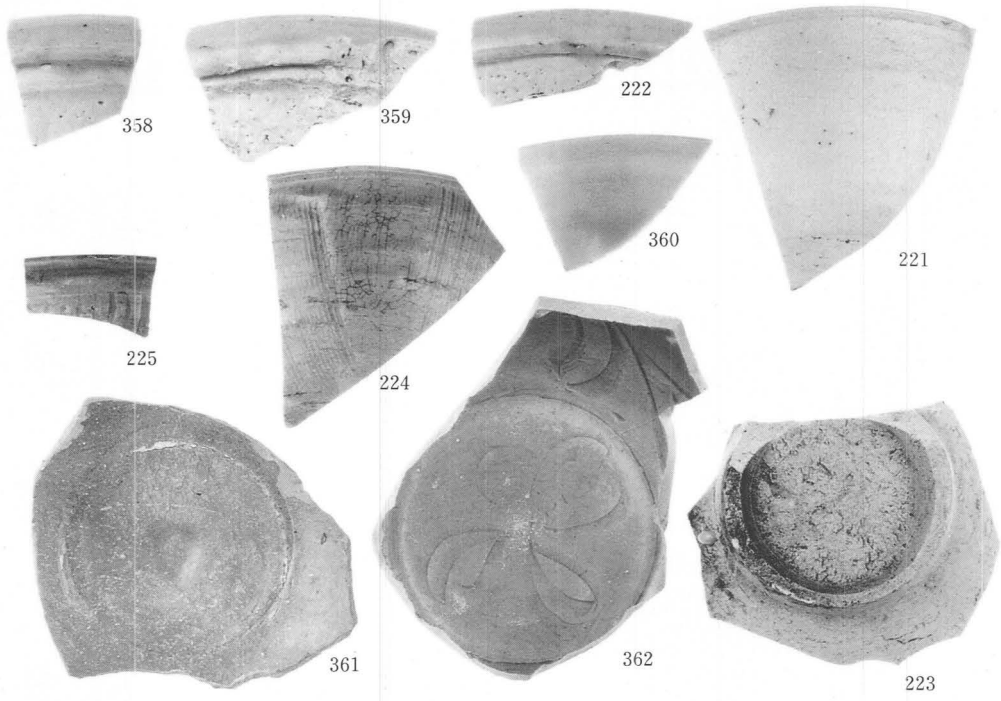
212



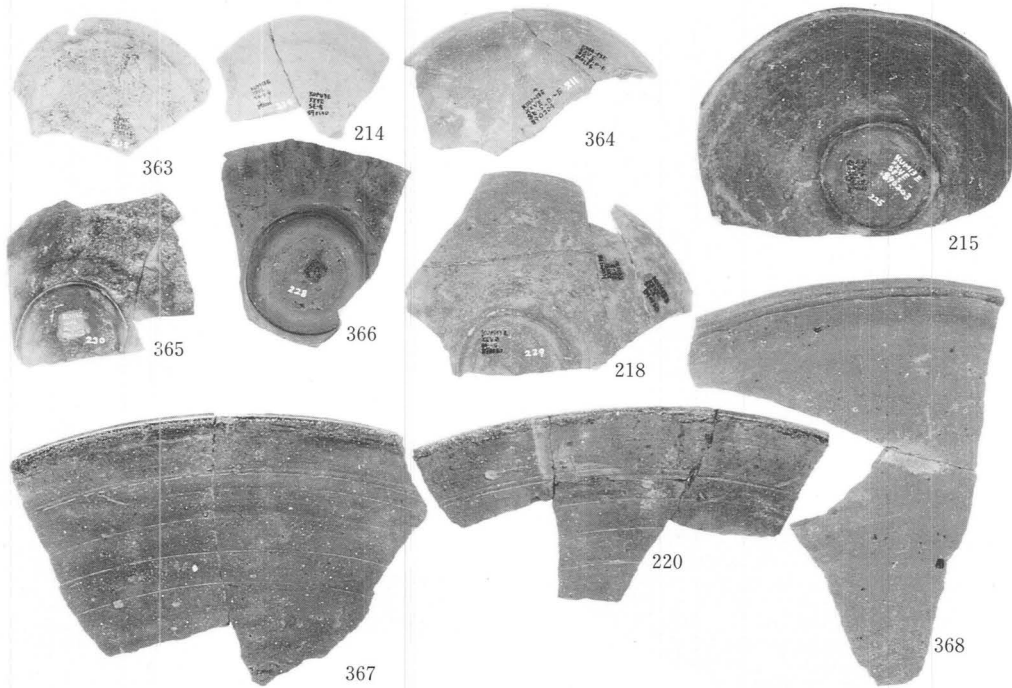
210



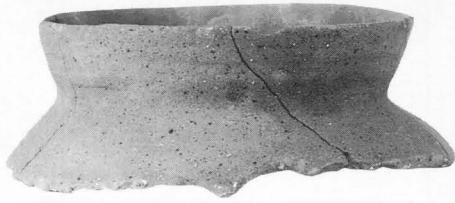
219



1. C地区第3層内出土青磁碗、E地区SE5出土白磁碗、青磁碗



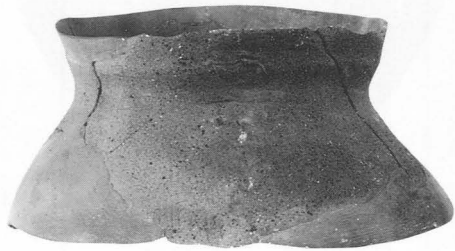
2. E地区SE5出土土師器皿、瓦器碗、須恵器捏鉢



369



239



237



238



235



236

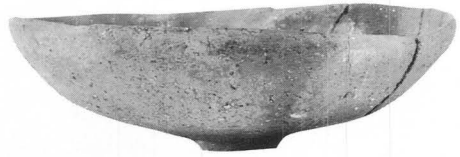


243

図版四〇 I地区・JK区の遺物



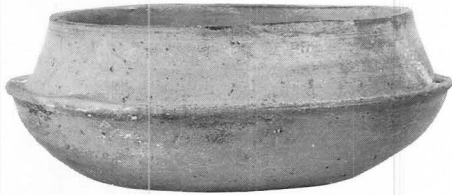
226



232



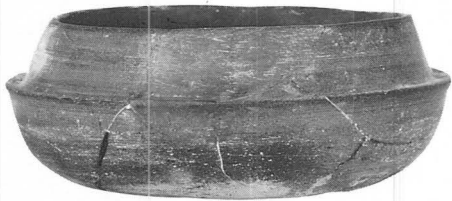
233



228



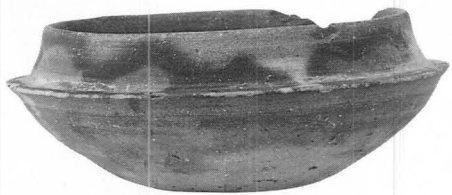
370



229

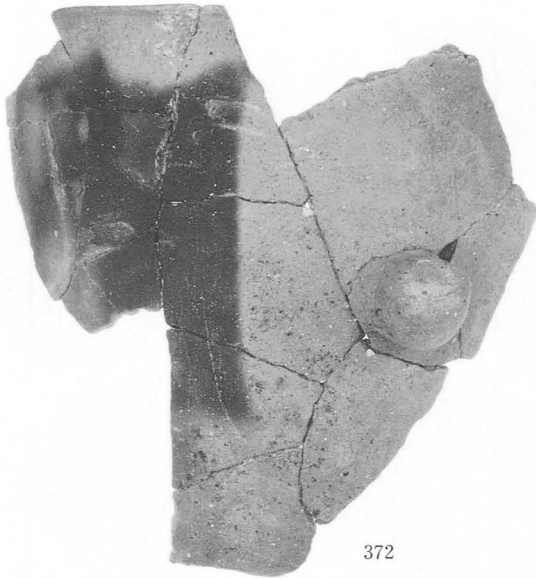


371

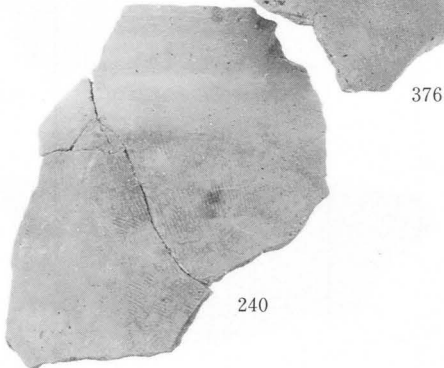
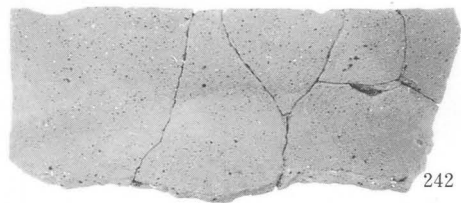
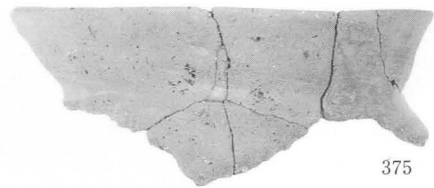
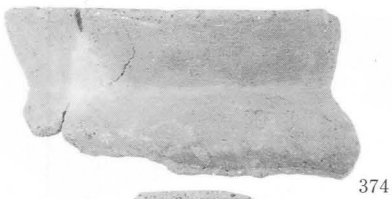


230

I地区第9層内出土須恵器蓋・杯・甕、土師器高杯・鉢、J地区SD51出土隼



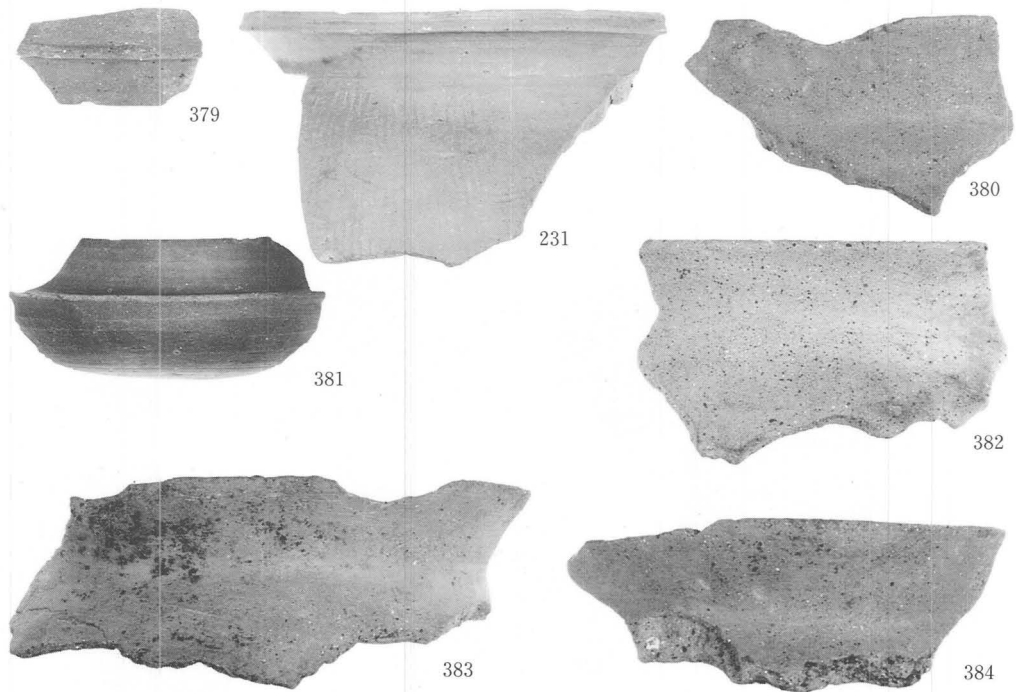
1. I地区第10層内出土土師器甑



2. I地区第9層内出土土師器甑



1. C地区第9層内出土ミニチュア土器



2. I地区第9層内出土須恵器杯・甕、土師器甕

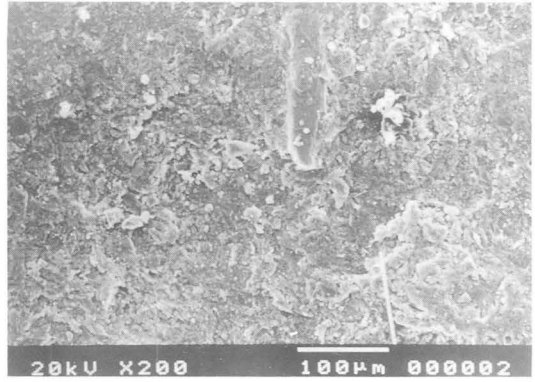
実体顕微鏡写真(左)
電子顕微鏡写真(右)



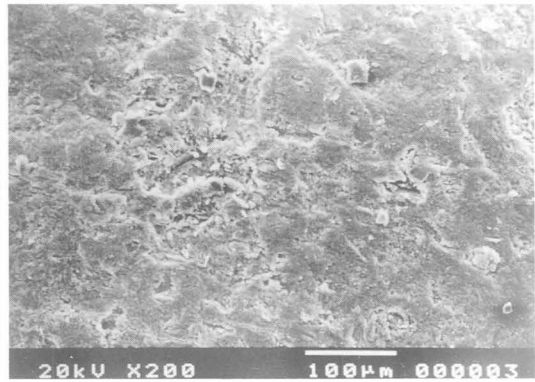
神並-1



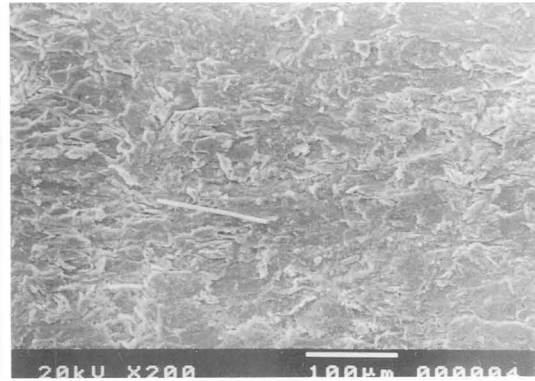
神並-2



神並-3



神並-4



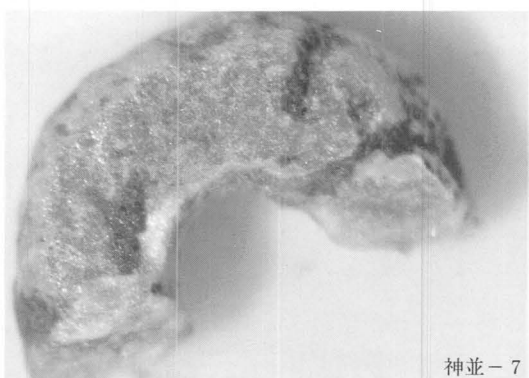
図版四四 神並遺跡第一三次調査出土滑石製白玉現形及び顕微鏡写真②



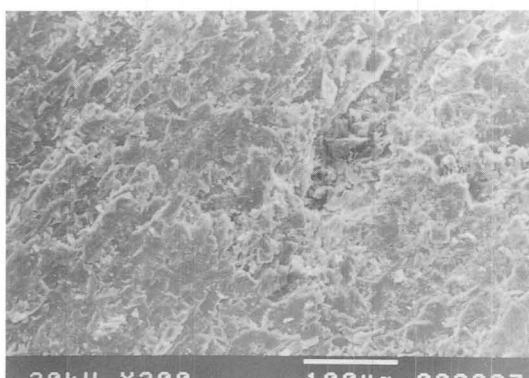
神並-5



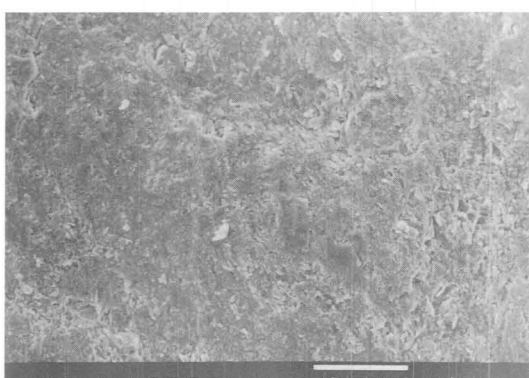
神並-6



神並-7



神並-8



神 並 遺 跡 XIII

— 第二阪奈有料道路建設に伴う —
— 神並遺跡第13次発掘調査概要報告書 —

1992年3月31日

発 行 東 大 阪 市 教 育 委 員 会
財 団 法 人 東 大 阪 市 文 化 財 協 会
印 刷 ド ウ ミ 印 刷 広 研 社